

930.28
766

930.28-B66ウ



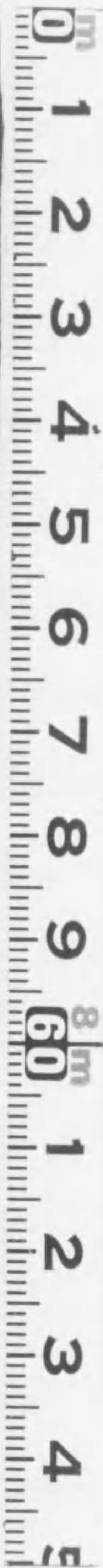
1200500759684

サミュエル・ジョンソン傳

下

ボズウェル 著
神吉三郎 譯

岩波書店



始



岩波文庫

2733—2735

サミュエル・ジョンソン傳

下

ボズウェル著
神吉三郎譯



岩波書店

930.2
B64

サミュエル・ジョンソン傳 下

一七七八年—一七八四年



千七百七十八年、三月十八日（水曜日）、私はロンドンに到着し、忠實なるフランシスカら、主人は快方に向ひ、目下ストレットタムのスレール氏方に往つてゐる由を聞いた。で、私はそこへ宛てて彼に手紙を書き、何時ロンドンへおいでになるか知らせて頂きたいと願つた。彼は暫く来ないやうな話であつた。然るに翌日、私がウェストミンスター・デインズ・ヤードに於けるテラー博士を訪問したところ、そこに彼が見出だされた。彼は數時間だけ町に出て来たのださうである。彼は常に變らぬ懇ろさで私に會つた。が、直きに、私が入つて来た時に取掛つてゐた書きもの——彼はそれに非常に熱心のやうに見受けられた——を續けた。彼が忙しさをうのを見て私は訪問を早く切上げたので、彼の談話としては次のものだけを聞いた。——彼はわれ／＼の友人の一人が、外見が甚だ貧弱な割にあまりに入費の多い生活をしてゐるのを頗る遺憾がつかつた。彼は言つた、「もし人が金を費して豪奢を味はうのなら、金を誇りと快樂に費すのなら、それはそれだけの値打ちがある。けれども、自分の代りに他人がその金を使ふのならば——兎角さういふことになり勝ちだが——彼の身の足しには少しもならぬ。」

三月二十日（金曜日）、私は彼が自分の家でウィリアムズ嬢と坐つてゐるのを見出した。以前私のために宛てられてゐた部屋は目下慈善的な目的に使用されてゐることであつた。デムーリン夫人とその息女（だつたと思ふ）及びカーマイケル嬢なる者がすべてそこに寝起きしてゐるのであつた。デムーリン夫人自身私に、彼が一週半ギニーを彼女に與へてゐるこ

とを打ち明けた。彼の慈悲心と物惜しみのなさはかくの如くであつた。この金額は彼の恩給の十二分の一以上にあたるといふことを記憶して頂きたい。

＊ジョンソンの数文スウィンソン博士の息女で習字教師デューロン氏の墓誌

彼の寛大さは實際、その生涯のすべての時期を通じて甚だ著しいものであつた。ジョンソンが若年の頃その父の家に深切に迎へられた、リッチフィールドのハワード氏が私に語つたことだが、氏がチャーターハウス校の生徒だつた頃、氏の父は氏にサミュエル・ジョンソン氏を訪問に往くやうに書き送つた。そこで氏はその通りにし、とある見すばらしい階上の部屋に彼を見出した。ジョンソンはこれを甚だ鄭重に迎へ、學校生徒としてのその教課目やその他の事情についていろ／＼と話しかけた。氏は後日この偉人の高邁な人柄を知り且つ理解するやうになつた時、よく自分に對してあれほどにしてくれたと驚きの念を以つてそのことを回想したのであつた。氏は又、自分が辭し去らうとした時ジョンソン氏が半ギニーをくれたことを附言した。そしてそれは彼が恐らくあと半ギニーとは持つてゐなかつた時代のことであつたと、ハワード氏は語つた。

われ／＼はウィリアムズ嬢を残して別の部屋に引き取つた。間もなくトム・デーヴィスがわれ／＼に加はつた。彼は不幸にも此頃では境遇が不如意で、いろ／＼とその窮境を緩和して貰ふためにジョンソン博士の厄介になることが甚だ多かつた。彼が辭し去つた後、ジョンソンは、夫婦で一年に五百磅も儲けてゐたのに舞臺を去るなんて愚なことをしたものだと思つた。

を賣めた。私は、それはチャーチルが

「野良犬が骨をしやぶるがごとく、彼は文章をしやべる。」

と悪る口を云つたためだらうと思ふ、と云つた。ジョンソン、「わしもそんなことだらうと思ふ。しかし、たつた一行で舞臺から追ひ出されるなんて、何んとした男だ？ もう一行書かれたら自分の店(譯者註・デーヴィスは俳優だ)から追ひ出されたかも知れん。」

私は此度スターリングの町邑の道路法案に反對するために下院の裁判所で辯護士として立つことになつた話をし、さういふ聴衆に話しかけるにはどういふ方法をとることをお勧めになるかと彼に訊いた。ジョンソン、「左様さ——君は當面の問題以外の材料をたくさん用意して往き、時々それを持ち出して時間つなぎをしなければならん。何故なら、彼等は碌に話を聴かないのだといふことを考へなくてはならんからだ。聴き手の注意を捉へたところで、問題の理非得失を強調するのだ。」彼は理非得失の一箇條として自分はかう考へると云つた。「小地主から、道路を作つたり修繕したりする費用を自ら査定する特權を剝奪するのは間違つたことであらう。それは、正當な理由無くして自由の或る部分を破壊することになるが、さういふことは常に悪いことである。」私がこの言葉を次の日ウィルクス氏に傳へると彼は面白さうに云つた、「あの男が自由を云々したのか？ 彼の口から自由が出るとは僕の口から宗教が出ると同じ程度に滑稽だね。」下院の裁判所でどういふ遣り方で話したら最も良いかといふことについてのウィルクス氏の忠告は、ジョンソンのそれと同様、この立法議會に

對してあまり敬意を拂つたものではなかつた。「君はできるだけ無遠慮に、できるだけ面白可笑しくやりたまへ、そして何んでも頭に浮んだことを云ひたまへ。そこで話した辯護士の中でチャック・リーが一ばん皆に傾聴された。彼は此の上なく無遠慮な奴で、しよつ中われわれを罵倒する。」

今晚のジョンソン博士との會見中私は全く氣樂で、全く彼の相棒になつてしまつた。それについて私の日記に次のやうな感想が書いてある、「私の心は不満を思ひつくに實に鋭敏で、今度は自分がそんなに氣樂な氣分になつたといふ點で一種の遺憾を感じた。私はサミュエル・ジョンソン氏の文學的、道德的、宗教的性格の複雑な偉大さに於いてその人を觀する時に常に起こしたあの畏敬の念を今日は感じなかつた。私は神祕に對する驚くべき迷信的な愛をもつてゐる。が、恐らく眞實のところは、それは私自身の心が暗く曇つてゐることにもとづくものらしい。私は私の本質がもつと進歩して、ジョンソン博士をもつとしつかりした、もつと明白な眼を以つて眺め得るやうになることを喜ぶべきだ。今晚の私の不満は愚かしかつた。未來の世界に於いてわれ／＼のもつ神祕が少くなるであらうと遺憾がるとしたら愚かではないか。『今われらは鏡をもて見るごとく見るところ曠ろ』(譯者註、コリント)であるが、來世に於いては『顔を對せて相見る』であらうことを悔やむのは愚かではないか?」私がかういふ風に包まず語る此の感想は、自らも同じやうな心的状態を経験されたことがあるかも知れない、讀者諸君の心ある方々の御參考になるであらう。

次の日彼は、ストレッタムへ——スレール氏方に戻つた。ストレーアン氏が會つて私に訴へた通り、「彼は彼の古い友人仲間から離れてそつちの方に引きつけられることが非常に多い」のであつた。私は所用のためロンドンに引き留められたので、二十七日に手紙をもつて、こんなにお互ひに近くにゐながら一週間も離れてゐるのは四百哩を隔ててゐる時に一年も會はないで居るのに等しい、と書き送つた。三月三十日(月曜日)、私はストレッタムに赴いた。彼が姿を現す前にスレール夫人は特色を非常によくあらはしたことを云つた、「わたしは何がジョンソン博士を喜ばすか、はつきり判りません。けれど、どんな物でも——あの人の好きなものでさへも——大げさに褒めることはお氣に入らないのだといふことは、はつきり判つてゐます。」

正餐の折彼は、贅澤——ロンドンの膨脹——食物の不足——その他その類の話題で、當世を罵るやかましい叫びをわらつた。彼は云つた、「家はどし／＼建築されて家賃は下るだらうし、穀物は今日此頃はこれ迄になかつた程豊富だ。」

.....

次の朝、われ／＼が食卓についた時、ジョンソンは彼自身極めて良心的に實行したこと——即ち、最も些細な點に到るまで嚴重に眞實を守ること——を大へん熱心に勧めた。彼は云つた、「子供等を絶えずそれに慣らしなさい。或ることが一つの窓で起こつたとして、彼等がその話をする時に別の窓で起こつたやうに云つたら、そのままに放つて置かず、直ちにそ

れを遮るのだ。眞實から離れたすと際限がなくなるものだから。」ボズウェル、「それは戸口で起こつたことになるかも知れません。一旦話の一部分が多少とも歪められると、段々と變つていつて事實から全然相違したことになるかも知れません。」かういふ拘束に甘んじ得ない想像力を有するわれ等の快活な主婦は、これを聞いて落ちついて居られず、思ひ切つて云つた、「いいえ、それはあんまりですわ。もしジョンソン氏がわたしにお茶をお禁じになるのならわたしは承知します、——一日に二回だけ辛抱すればよいのですから。けれども、話をするときに少しばかり變へることは、日に千度も起こるに違ひありませんもの——よつほど、しよつ中氣を付けてゐない限りは。」ジョンソン、「さうです、奥さん、あなたはしよつ中氣を付けてゐるべきなのです。この世にそんなに多くの虚偽があるのは、故意に嘘をつくことより、眞實に對する不注意から來ることの方が多いいのです。」

ジョンソンはウォートン博士の『ボープの著作及び天才についての論文』を批評したもので、この問題について次のやうな有益な注意を興へてゐる、

「誤れる傳聞がいかにも屢々あるかを示し、又は、根據の無い報告が非常に多く流布するもので、すべての有名な人物は自分に關してそれを聞くほどであるといふことを人をして悟らしむるには、經驗による他はない。或る人々は自分の考へたことを知つてゐることとして話す。記憶の混亂した、不正確な習慣をもつた人々は、乙の人に關することを甲のこととしてしまふ。或る人々は無考へに不注意に語り傳へる。虚偽を云ひ始めるには極く少數で十分で、

あとはそれからそれへと語り手により悪る氣は無くても傳播される。」

彼が生きてゐてサー・ジョン・ホーキンスやピオッツィ夫人が彼について書いたものを讀んだとしたら、自分の説があまりにもよく例證されてゐるのを見出すことであらう。彼は實際、故意或ひは故意ならざる虚偽の横行を痛感してゐたので、何か並外れた事柄が語られるのを聞いた時に彼ほど多くの「懐疑的ナル嫌惡」を示した人を私は見たことがない。彼は意味あり氣な顔つきと斷乎とした口調で云ふのを常とした、「そんなことはない。そんな話は二度としたまふな。」彼はすべての友人に、極めて些細な偽りに對しても絶えまなく警戒することが肝要であることを教へこんだ。その結果として、サー・ジョン・レノルツが私に云つた通り、彼の一派に屬したすべての人々は、眞實及び正確に對する愛で他を抜きんでてゐた。それは、若し彼等がジョンソンと知り合はなかつたらそれ程には到らなかつたであらう程度のものであつた。

幽霊の話について彼は云つた、「世界の創造以來既に五千年が経過したが、人の靈が死後に現れた例が有つたかどうかといふことが未決定なのは驚くべき事實である。すべての理論はそれに反對してゐる、しかし、すべての信念はそれに味方してゐる。」

彼は云つた、「ジョン・ウェズリーの會話はよい。しかし彼は決して閑なことが無い。彼はしよつ中或る時刻までに往かねばならぬことになつてゐる。これはわしのやうに、脚を組んで心ゆくまで話しこむことを愛する者には甚だ不愉快だ。」

四月三日（金曜日）、私は彼とロンドンに於いて幾名かの高名な人々と共に正餐をとつた。その人々の名を私は擧げないが、會話に於ける話し手を區別するために相異なる文字を用ひることにしよう。

* 場所は俱樂部で、Bはレノルツ、Fはフォーダイス、Eはエドマンド・パークを指すものと推測される。（マロンの註）

F、「私はデュエングス氏所有の時價一千磅と評價されてゐる、あの有名な古代の大理石造の犬を見て來ました。それはアルキピアデスの犬ださうです。」デュエングス、「そんなら尾が短かく截つてなければならぬ。それがアルキピアデスの犬の印しだつた。」E、「一千ギニー・どんだ動物にもせよ、動物をあらはしたものにそんな値段は有り得ない。その割りでいくと、死んでる犬が實際生きてる獅子より値打ちがあることになる。」デュエングス、「君、高く評價されるのは、物そのものの價値ではなくそれを形作る技巧なのだ。人間の能力の範圍を擴大するあらゆるもの、人間にはできないと考へられてゐたものができるとを示すものは價値があるものだ。初めて鼻の上に鬘を立てた男とか、同時に三頭の馬を乗りこなしたデュエングスとか、要するに、さう云つた種類の人々はその所爲が有用だからといふわけではなく、彼等が示した巧妙さの故に人類の喝采に値ひしたのだ。」ボズウェル、「しかし、時間と勉強の濫用は獎勵さるべきではありませんね。アディソンは『スペクテーター』の一つの中で、長いこと刻苦した末に大麥の粒を投げて針の穴を抜けさせる術を體得した男に對する適當な褒美

として大麥を一ブッシュ（譯者註）（約二斗）與へた王様の分別をたゞへて居ります。」デュエングス、「そ、王様は、大麥の乏しいスコットランドの王様だつたのだらう。」F、「有名な動物の古代彫刻の一つはフロレンスにある野猪です。」デュエングス、「大理石で巧みに作られた最初の野猪は驚異として保存さるべきだ。人々が野猪を巧みに作ることを造作なくするやうになつた時には、その技術は左程價値は無くなる、けれども、それ等は標本として、それから、萬一その技術が失はれた時に、それを再興するのに一層安心なやうに保存さるべきだ。」E、「われ／＼は昨今移民について大きな不満の聲を耳にする。私としては、移民は國の人口を一層殖やすと信じてゐる。」J、「それはどうも逆説のやうに聞こえますね。」E、「人間の輸出は、すべて他の物品の輸出と同様、その生産を一層増させます。」デュエングス、「しかし移民をしなければならぬ、一層多く人間が居るわけぢやないか、一層多くの者のための食物さへあれば。」E、「さうでない、少數の生殖者だけ残して置いてこらんなさい、さうすれば、移民を行はなかつた場合より一層人間が殖えます。」デュエングス、「何んの、君。一層多くの生殖者が居た方が一層多くの人間ができることは明白だ。良い牧場に置かれた三十頭の牝牛は十頭の牝牛よりも、一層多くの仔牛を産む、——良い牝牛が居さへすれば。」E、「アイルランドには牝牛は随分居るんすがね。」デュエングス、「（にや／＼笑ひながら）君の議論ぶりから察すると、いかさまさうだらうと思ふよ。」（譯者註、「アイルランドのブル」には「文章才」の意味がある。尙E（パーク）はアイルランド出身。）

E、「私のもつた経験——そして私は随分いろいろな経験をしました——からして、私は人間のことをより善く考へることを學びました。」ジョンソン、「わしの経験からして、わしは人間といふものが、商業的の取引に於いては、わしなどが思ひもよらなかつたほど、悪くて、人を瞞す傾きがあるといふこと、しかし、思つたより、お互ひに對して深切をしようといふ傾きのあることを見出した。」J、「正義はより少く、好意はより多いといふわけ。」ジョンソン、「人々がわが身に氣を付けて自分に迫つてくる直接の害悪を防ぐためにいかに多くの注意をすることが必要であるかを考へ見ると、彼等が他人のためにいかに多くをしてやるかは實に驚異すべきほどだ。最大の嘘吐きについて、彼は嘘よりはほんとのことを一層多く云ふ、と云はれてゐると同様に、最悪の人間についても、彼は悪よりも一層多くの善を爲す、と云はれ得るかも知れない。」ボズウェル、「多分経験からして人間はわれ／＼が想像するよりはより幸福だといふことを見出だされるかも知れない。」ジョンソン、「いや、われわれがよく調べて見れば見るほど人間がより少く幸福であることがわかるだらう。」P、「経験上人間を善いと考へるか悪いと考へるかといふことに關しては、するどい人間は自分の氣の濟む方法で試験して見ないと納得しないかも知れません。治安判事としてのサー・ゴッドフリー・ネラーについて非常に佳い話が傳へられてゐます。——一人の紳士が自分の金を盗んだと訴へてその召使ひを彼の前に引つぱつて來ました。ところが紳士はその召使ひの正直さを試すためにわざとそれを目の觸れるところに置いておいたといふことが判つたので、

サー・ゴッドフリーは主人の方を投獄したといふのです。」ジョンソン、「一回だけ誘惑に抵抗したのでは十分な正直の證據にはならない。もし召使が、ある人々がよくやるやうに窓の所に置きばなしにしてある銀貨の誘惑を——主人はそこに幾らあるか知つてないことをはつきり承知しつゝ——引きつゞいて抵抗するなら、それは正直の強い證據になるだらう。しかし、他人にさういつた試験をして見る權利をわれ／＼はもつてゐない。知つての通り、人間的に考へて見れば、いかなる善徳をも打ち負かす程度の誘惑もあるのだ。ところで、われわれは人に誘惑を近づければ、それだけその人に害悪を加へるわけだ。もしその人がそれに打ち負かされれば、われ／＼がその罪の一部を分擔するわけだ。」P、「そして、一度負かされれば、その人は再三屈伏され易くなる。」ボズウェル、「さうです、われ／＼は彼の誘惑者となります。彼を墮落させたわけです。私は友情を試験しよるとかかつてゐる男を知つてゐます。彼は單にその目的のために、用もないのに友人に借金を申し込むのです。」ジョンソン、「それは非常に間違つたことだ。その友人は吝嗇ではあるが多くの美點を持つてゐるといふことも有り得る。吝嗇が唯一の缺點なのかも知れない。さういふやり方は、たまたま友人の缺陷とするところの一缺點によつて友人としての全體的性格を試みることになる。然るに實際に於ては、彼の性格は多くの部分から成立してゐるのだ。」

J、「聞くところによると、われ／＼の友人の副監督(譯者註、ケリーの副監督パーナード博士)が此の會に寄贈された赤葡萄酒の樽が殆んど空になつたさうです。彼に一つ手紙を出して同じものをもう一

と導送つて貰ふべきだと思ひます。その要求には巧みに曖昧な云ひ廻し方を用ひてあの人にそれを今度も贈り物として送つてくれるように仕向けようではありませんか。」ジョンソン「わしはこの件について書記として働いてもよい。」P、「ジョンソン博士が書記となることに賛成人は手を擧げて下さい。——満場一致で可決。」ボズウェル、「博士が口授者(口授者、口授する者)に就く(口授する)意味もある。」になつて下さるでせう。」ジョンソン、「いや、皆がわしに口授するのだ。わしはたゞ酒をくれるやうに手紙を書くだけだ。わしは酒を飲まないから、まるつきり無關心なのだ。わしならその申込を偽造したと疑はれることはあるまい。わしは單なる『書記』に過ぎない。」E、「では、『指圖』してください。」ボズウェル、「これはうまい。今日の第一等の洒落だ。」J、「どうして、どうして。アイルランドの牡牛が一等だ。」ジョンソン、「わしが君がたのディクテーターになつたら諸君は酒が飲めなくなるよ。『國家ガ害ヲ蒙ルコト無キヤウ注意スル』のが、わしの任務だらうからね。そして酒は危険なものだ。ローマは奢侈のために滅亡した。」(と云つて笑ふ。)E、「もしあんたがディクテーターとして酒を許さないなら私はあんたの騎兵司令官(譯者註、執政官が任命した)の役を御免蒙ります。」

四月四日(土曜日)、私はジョンソンとテラー博士方でお茶を飲んだ。……

彼は今晚は大へん黙りがちであつた。そしてあれやこれやの書物を覗き讀みした。突然一冊を投げ出し、他の一冊を取り上げるといふやり方で。

彼はこの夜ストレッタムに往くやうなことを云ひ出した。テラー、「今時分往けば追刺

ぎされますよ、さもなければ追刺ぎを射ち殺さなければならぬ破目になります。私としてはさうするよりは追刺がれる方がましです。追刺ぎを射殺したくはありませんな。」ジョンソン、「わしとしては、追刺ぎがわしを刺がうとしてる最中にそれを射ち殺す方が、後に、刺がれてしまつてから、彼の生命を取るためにオールド・ペリーの中央法廷で證言するよりましだと思ふ。後の場合より前の場合の方が、自分は正しいのだ、と確かに思へるよ。證言する時にはその男を取り違へてゐるかも知れない、現場で彼を射てば間違へる心配はない。おまけに、害を受けて興奮してゐる時にその男の生命を奪ふ方が、冷靜に歸つてから、時日を隔てて證言をしてさうするより遲疑を感じることが少ない。」ボズウェル、「では先生は、公共の利益といふ動機よりは個人的激情の動機から行動しようと欲せられるのですね。」ジョンソン、「いや、わしが追刺ぎを射つ際には両方から行動してゐるのだ。」ボズウェル、「成る程、成る程。——この人をやりこめることはできやしない。」ジョンソン、「とは云ふものの、實は何んとも云へないのだ。さういふことをした者は、一年もたつてから、一人一人を射殺したといふ不安から首を縊つて死んでしまふかも知れないから。そんな重大なことをして安心しきれぬ心などはなか／＼有るものでない。」ボズウェル、「それでは、先生はその男を射殺なさらないのでせうか？」ジョンソン、「それならそれで、わしは後になつて後悔するかも知れない。」

彼が待つてゐたスレールの馬車が迎ひに來なかつたので、私は彼が自宅に歸るのを途中ま

で送つた。私は、數日前ダニング氏と彼の噂をし、彼と一座する時にはわれ／＼は會話を取交はすといふよりは寧ろ彼の話を傾聴するのだと云つたところ、ダニングは「ジョンソン博士の話なら誰でも傾聴する氣になる。」と云つたので私は「あなたからさう云はれるのは大したものですよ。」と答へた話をした。——ジョンソンは云つた、「さうだ。ほんとに大したものだ。一年中世の中の人によつて傾聴されてゐる、その人が傾聴しようといふのだからナ。」ボズウェル、「他の人がした、さういふ好い噂を當人に傳へるのは結構なことだと思ひます。それは好意を増進するに役立ちます。」ジョンソン、「確かにそれは結構なことだ。」

四月七日（火曜日）、私は彼の家で朝食を共にした。彼は云つた、「誰も満足してゐる者はゐない。」私は彼も知つてゐる、スコットランドの或るれつきとした人（譯者註、アフレック卿即ちボズウェルの父）をもち出し、この人はいつも満足してゐると私は信ずる、と云つた。ジョンソン、「いや、彼は現在に満足してゐない。いつも何か新しい計畫、何か新しい農場——何か未來のもの、を目論んでゐる。知つての通り彼は男やもめとして満足してゐなかつた、彼は結婚したものだ。」ボズウェル、「でも、彼は落ちつかない、といふ様子がありません。」ジョンソン、「君、彼はたゞ地域的に落ちついてゐるだけだ。化學者などは地域的に落ちついてゐる。しかしその心はせはしなく働いてゐるのだ。この紳士は外部的な努力が終つてしまつたのだ。遠い計畫を遂ふにはもう遅過ぎてゐるのだ。」ボズウェル、「彼は結構たのしんでゐるやうです。極く些細なことに注意を集中し心の平和を維持してゐるやうです。私はその眞似をしようとし

ましたが、どうもうまくいかないのです。」ジョンソン、（笑ひながら）「なか／＼さうはいかない。小つぽけなことをして満足して居られるには、さういふ風に生れついでるなければならぬ。體裁悪くなく小つぽけなことができるといふ點では女は大いに有利だ。男はさういかぬ、——提琴を弾くことを除いては。わしが提琴を弾くことを學んでゐたら、他に何にもしなかつたらう。」ボズウェル、「もし先生、あなたは何か樂器をおやりになつたことがお有りですか？」ジョンソン「無い。わしは嘗つて銀笛フランクフルトを買つたことがある。しかし、どうしても調子が出なかつた。」ボズウェル、「銀笛フランクフルトですか——あんな小さい樂器を？私は先生がセロをお弾きになるのを聞いたかつたです。それこそあなたの樂器たるべきでありました。」ジョンソン、「どれでなくてはならんといふわけは無く、セロでも結構だつたわけだ。が、わしはそれをやつたら、他には何んにもしなかつたことだらう。人は、小さいことで楽しめるなら、決して大きなことを企てはしないだらう。わしは昔、編み細工を試みたことがあつた。デムプスターの姉妹がわしにそれを教へようとした。しかし、わしはそれが習へなかつた。」ボズウェル、「さういふわけなら、大架婆に云へばかう云へますね——嘗つて彼は慰みに編み細工を試みた、——このハーキェリーズは婦女子の手業をも侮らなかつた。」ジョンソン、「靴下を編むことは好い慰みだ。アバーディーンの一市民と生れたらわしは靴下編みの職人となつたらう。」

●私がこの話をシーワード嬢にしたら嬢はほほえみながら早速の氣轉で「エーシスとガラテア」の中の次の句を

「われにはすすくと生ひ伸びし百本の蘆をもたらせ、わが大いなる口にふきはしき笛をつくるため。」

飲酒のことに關しては彼は云つた、「わしは酒に堪へなくなつたからそれを止めたんぢやない。わしはポートワイン三本を飲んで別に何んとも無かつたものだ。ユニヴァーシティ・カレッジがちやんと知つてゐる。」ボズウェル、「では、なぜお止めになつたのですか？」デ・ジョンソン、「なぜつて、人は自分が決して酔つばらはない、——自分自身を支配する力を失はない、といふ自信ができる方がずつと良いからさ。わしは老ひ込んで酒が入り用になるまではそれを再びやり始めないつもりだ。」ボズウェル、「先生は何時だつたか、酒を飲まないことは人生から大なる差し引きになる、と云はれたやうに思ひますが……」デ・ジョンソン、「それは確かに快樂の減少だ。が、わしは幸福の減少とは云はないよ。理性的であることは一層大なる幸福がある。」ボズウェル、「けれども、われ／＼がしよつ中快樂をもち得るなら幸福になれるのではありますまいか？ 大多數の人は快樂と妥協するでせう。」デ・ジョンソン、「われ／＼がしよつ中快樂をもち得ると假定して見ても、知性の人はそれと妥協しはしないだらう。大多數の人間は妥協するだらうさ、何故なら、大多數の人間は粗雑だから。」ボズウェル、「私は酒から得られる以上の快樂もあることを認めます。私は先生との會話から一層大きな快樂を得ました。ほんとうに。私は保證いたします。」デ・ジョンソン、「われ／＼

は快樂について語る時に肉感的快樂を意味する。人が、自分は或る女について快樂をもつたといふ時、彼は會話を意味しないで、まるつきり違つたことを意味する。哲學者たちは、快樂は幸福に反すると告げてゐる。粗雑な人間は動物的快樂を擇ぶ。そこで野蠻人の中で生活することを擇ぶ人間があらはれたのだ。ところで、野蠻人の中で得られるやうな會話で満足してゐられる人間は何んといふ憐れむべき奴だらう！ 君は、アメリカで勤務したことがある、オーガスタス要塞の一將校が、ある女を野蠻人の生活から連れ戻すために縛り上げなければならなかつた、といふ話をわれ／＼にしたのを覚えてゐるだらう。」ボズウェル、「その女は動物——けだものだつたに違ひありません。」デ・ジョンソン、「物を言ふ猫だつたのだ。」

私は、次のやうな文句以外には全然知的な言葉が聞かれなかつた集まりに於いて、大いに退屈した話をした。その文句といふのは、「ミノルカ島で十年間定住した或る人は、彼がロンドンに住んでゐた時分より非常に劣つた人間になつてしまつた、——人間の心は狭い土地にゐると狭くなつてしまふからだ。」といふのであつた。デ・ジョンソン、「その心がただ大きな土地に住んでゐたといふ理由で擴大された人間の心は、狭い土地に於いては狭くなる。しかし、書物や思索によつて獲られたものは、廣い土地に於けると同様に狭い土地に於いても維持される、人はミノルカに於いては、人生の様相はロンドンに於けると同様にはわからぬ。しかし、數學を學ぶにはミノルカに於いても一向差支へない。」ボズウェル、「どういふ

ものでせうか——若し先生が十年間コル島に籠つて居られたとしたら、今日の先生とはなつて居られなかつたのではないでせうか？」ジョンソン、「わしが十五歳から二十五歳までだつたなら差支へないよ。二十五歳から三十五歳までだつたら困るがね。」ボズウェル、「確かに私はロンドンに居ると元氣が出て来て、あらゆることがテキパキと精力的にできます。私はロンドンでは他の土地にゐる時に較べて二倍も餘計におしやべりができます。」

ゴールドスミスについて彼は云つた、「彼は氣持ちのよい話相手ではなかつた、彼はいつも名譽を得んがために語つたからだ。さういふやり方は決して愉快であり得ない。自分の思つてゐることを披瀝するために語るといふやり方が、聞いてゐて氣持ちがよいのだ。わし等の友人の或る有名な男はその多方面な知識の割り合ひにわれ／＼を喜ばせぬ、それは彼が幾分ひけらかしのために語るからだ。」

* 本書の題名は皆この「有名な男」をバークであるとしてゐる。しかしヒル博士は、ジョンソンが二三年後逸つ

た意見を述べてゐる事實を指摘してゐる——」バークの談話はその心が薄いて流れたものである。彼は他にま

さらうといふ欲望からでなく、自分の心が充ちあふれるから語るのである。」(モリス註)

われ／＼がスレール氏方に到着すると間もなく、女中の一人が頻りにもう一人の女中を呼んで、ジョンソン博士の許に行くやうに云つてゐるのを聞いた。私は一體何の用かといふかしく思つた。後で聞いたところによると、それは博士が彼女への贈物としてロンドンから持参した聖書をわたすためであつた。

彼は帽子をかぶらずに、中庭に通ずる低い木戸に倚りかゝり、それをユラ／＼させながら可成り長い間『フォントネルの回想記』を読み耽つてゐた。

私はケームズ卿の『人間の歴史のスケッチ』を覗き讀みした。そして、チャールズ五世が生きてゐる間に自分の謙儀を執り行つたことをこの著者が非難してゐるのを、ジョンソンに話し、私としては、かね／＼それを嚴肅な、感動すべきことと思つてゐたと述べた。ジョンソン、「チャールズのおあいふ行爲を君のやうに考へるのは勝手だ。が、それはいかにも嘲笑を蒙り易いことで、もし一萬人中のたつた一人がそれを笑へば、残りの九千九百九十九人もそれにつれて笑つてしまふ。」私はこの事について彼と同意見ではあり得なかつた。

サー・ジョン・プリングルはかねて私に、文體的に見て英國の説教のうちでどれが最も優れてゐるか、ジョンソン博士の意見を訊いて貰ひたいといふ希望を洩らしてゐた。私は今日折りを見て、幾人かの名を彼に向つて擧げて見た。「アッターベリーはいかゞでせう？」ジョンソン、「さう、最も善いものの一つだ。」ボズウェル、「ティロットソンは？」ジョンソン、「今では善いと云へない。わしは今日の説教家にティロットソンの文體を模倣せよと云はないだらう。が、斷言はできない、そんなに多數の人間が善いとしてほめそやしたものを輕々に異論を唱へるのは慎まねばなるまい。——サウスは最も善いもの一つだ、彼の妙な癖と亂暴さと、時々見られる言葉遣ひの野卑なことを除けば。——シードは大へん立派

な文體をもつてゐる、が、彼はあまり神學的ではない。——デューティンの説教は大へん典雅だ。——シャーロックの文體も大へん典雅だ、彼はそれに特に意を用ひたわけではないが。——この他スモールリッチも之に加へてよからう。近頃の説教家はみんな善い文體をもつてゐる。實際、今では文體のことをあまり言ふ者は無くなつた。誰もかれも相當善く文を綴る。百年前頃のぎこちない文章はもう見あたらない。クラーク博士が正統派だつたら、わしは彼の説教を勧めたい。が、彼の何處が正統派をはづれてゐるかは善く知られてゐる——それは三位一體の教義についてであつて、その點については彼は宣罪された異端者である。だから、誰でもそれを知つてゐる。」ボズウェル、「私はオグデンの『祈禱についての説教集』を、文體の整つてゐるのと行論の巧妙との故に好みます。」ジョンソン、「わしはオグデンの書いたものを悉く讀んでみたいと思ふ。」ボズウェル、「私の知りたいのはどういふ説教が英國の説教臺の雄辯の一ばん善い標本を示してゐるかといふことです。」ジョンソン、「われ／＼は感情に訴へた説教で多少でも取柄のあるものをもつてゐない——君がさういふ種類の雄辯を意味してゐるのなら。」さる牧師（私はその名を思ひ出せない）、「ドッドの説教は感情に訴へてゐませんか？」ジョンソン、「あれは君、何に訴へてゐるにもせよ、取るに足らぬものだよ。」

正餐の時、スレール夫人はスコットランド見物に往つてみたいといふ望みを洩らした。ジョンソン、「奥さん、スコットランドを見るのはイングランドの劣つたものを見るに過ぎ

ません。花が段々に散り失せて裸かの莖ばかりとなるのを見るやうなものです。へブリディーズ諸島を見るのは、實際、まるつきり違つたものを見ることになります。」

彼と私は夕方ロンドンに歸つた。途中、私は、地主たる紳士は自分の領地に住むといふ義務は少しも無い、ロンドンに住んでも何等自分の國に害をなさない、といふ議論を主張しやうと試みた。ジョンソン、「彼は自分の國全般には害を及ぼさない、何故なら彼が其所から引き出す金は循環して又戻つて来るから。しかし、特に彼自身の土地、彼自身の教區には害をなしてゐる。彼が與へることになつてゐるものすべては、それに對して第一に權利をもつてゐる人々に與へられてゐない。それから、わしは、金は循環して歸つて來ると云つたが、さうなるまでには長い時日を要する。だから、家柄と領地を有する者は、自分は土地を預つてゐるので、その上に文化と幸福をふりそそがねばならぬと考ふべきだ。」

次の朝、私は朝のうちに彼を自宅に見出した。彼はデイレーニーの『スウィフトについての考察』を褒めた。そして、彼の書物とオレリィ卿のそれは共に眞實であるかも知れぬ、前者はスウィフトをより有利に、後者はより不利に眺めてゐるが、と云ひ、又、兩者の中間に於いてわれ／＼はスウィフトに對する完全の觀察をつかみ得るであらう、と云つた。

或る人が、道徳的及び宗教的考慮よりして酒を用ふることを禁じようと決心したことについて彼は云つた、「彼はそれについて疑つてはならぬ。快樂について疑ひ出せば、その結論

がどうなるか判り切つてゐる。わしは今では馬が酒を飲まうと思はないのと同様にそれと思はなくなつてしまつた。食卓の上の酒は私にとつて、食卓の下の犬がそれを何とも思はないのと同様になつてしまつた。」

四月九日(木曜日)、私は彼とサー・ジョシユア・レノルツ方で、セント・アサフの監督(シツブレ博士)、アラン・ラムゼー氏、ギボツ氏、ケームブリツヂ氏、ラングトン氏と共に正餐を共にした。ラムゼー氏は最近イタリーから歸つて来たところで、自分が大へん精細に調べて来たホレースの別荘について色々話してわれ／＼の興味を惹いた。私は自身十三年前に非常な喜びを以つて眺めたものを新たに心に蘇らされたのでその話を大いに面白く感じた。監督、ジョンソン博士、ケームブリツヂ氏はラムゼー氏と共に、この主題に關係あるホレースの色々な詩句を思ひ出しあつた。

ホレースのプリンディスイへの旅行の話が出て、ジョンソンは、彼が書きあらはした小川が今でも昔と變らずに見られることを述べ、自分は、この種の小さな川が、山をさへ變へてしまふことのある地震や、地面の表てにあのやうな變貌を及ぼす農業にも拘らず、どうして幾時代をも通じて同じ状態を保つたのかと不審に思つたことが屢々ある、と云つた。ケームブリツヂ、「スペインの作家はさういふ思想を詩的想像の中に託してゐます。ローマの堅牢な建物の多くが壞滅に歸してしまつたのにタイパー河のみ昔に變らず残つてゐることを述べた後、彼はから附け加へてゐます——

「堅く根強きものは過ぎ去り、うつろひ易きもの残りつゞく」(譯者註、原文)

ジョンソン、「君、それは『ヤーマス・ヴァタリス』から取つたものだ——

“——*immata labescunt;*

Et quae perpetuó sunt agitata manent.”]

監督は、ホレースの書いたものから察すると彼は快活な満足した人であつたらしい、と云つた。ジョンソン、「さう信すべき理由はありませんよ。われ／＼は、書いたものの中でさう云つてゐるからと云つて、ポープが幸福だつたと考へるべきだらうか? われ／＼は彼の書いたものの中に於いて、自分の心の状態がどういふ風にあるやうに彼が見られたがつかを見るんです。昇進を望んで心を焦してゐたヤンダ博士は書いたものの中ではそれについて輕蔑を以つて語つて居り、自分が卑しんでゐないすべてのことを卑しんでゐるやうに裝つた。」セント・アサフの監督、「彼は他の宮廷附牧師と同様、缺員の地位を探してゐたんです。しかし、それは牧師に限つたことではありません。私が軍隊附きをしてゐた時分のこと、ラフェルトの會戦の後で、將校連は將軍が一人も戦死しなかつたのを本氣になつて殘念がつかつたのを覚えてゐます。」

われ／＼は田舎で暮らすことについて語つた。ジョンソン、「田舎に於いての方が一層善くできる仕事があるのでない限り、賢い人は田舎へ往つて暮さうとしないだらう。例へば、

一箇年間何かの科學を研究するために閉ぢこもらうといふのなら、向ひ側の扉を見てゐるよりは、野原を見晴らした方がましだ。それから、田舎で出歩くなら、家に戻るのを引き留める何者もゐないが、ロンドンで出歩くとするとなんか何時か家に戻れるか、確かなことは云へない。大なる都會はまことに、人生を學ぶための學校である。そして、ポーブが云つてゐる通り「人間にとつて適當な研究題目は人間である。」ボズウェル、「私はロンドンが社交のためには最善の土地だと思ひます。パリーの極く一流の社交界は、今尙わが國にあるいかなるものより優れてゐるといふことを聞いてみますが。」ジョンソン、「わしは、今このテーブルを圍んでゐるやうな一座が、パリーでは半年以内に集められるかどうか、疑ふね。フランスでは男と女が一しよに過ごすから幸福だといふやうなことを云ふ。ところが實はかうなんだ——あちらでは男が、女より高い位地を占めて居らず女が知つてゐる以上のことを知つてゐないのだ、そのため彼等は女たちがゐてもその會話の調子を下げるといふことが無いのだ。」ラムゼー、「フランスでは文藝は上り坂で、正に春の時期にあるが、わが國ではやゝ盛り過ぎです。」ジョンソン、「文藝はわれ／＼がそれをもつたよりずっと以前からフランスにあつた。パリーは文藝復興では第二番目の都會だ。イタリアは實に最初にそれをもつた。フランスに於けるステファニーはその他の者がしたやうなことに匹敵すべき何をわれ／＼は文學のためにしたか？ われ／＼の文學はフランスを通じて來たのだ。キャックストンは、フランス語からの翻譯でないものはチョーサーとガワリーの二冊しか印刷しなかつた。しかもチョーサーは

知つての通りイタリア人から獲たところが多い。いや君、もしフランスに於いて文學が春ならばそれは二度目の春だ、冬のあとの春だ。今ではわれ／＼は文學に於いてはフランスより進んでゐる、が、われ／＼は彼等よりずっと後にそれをもつたのだ。英國では劍を帯び化粧粉をふいた假髪をかぶる程の人間は無學を恥ぢとする。フランスではさうでないといわしは思ふ。けれども多分フランスでは學問は随分盛んらしい。あんなに澤山宗教的施設があり、勉強をする他用のない人間があんなに多くゐるのだから、わしはそれを知つてゐるわけでは無いのだが、普通の蓋然率からしてさう考へるのだ。射手が大勢居れば的にあてる者も幾人かあらうぢやないか。」

われ／＼は老齡について語つた。七十歳になつたジョンソンは云つた、「老齡になつて精神が遅鈍になるとすれば當人の咎だ、使用の不足のためだ。」監督は、老人は得るよりも失ふ方が速くはないかと訊いた。ジョンソン、「努力さへすればそんなことは無いと思ひます。」一座の一人は輕平に、老人が老碌するのは當人にとつて幸福だと思ふ、と云つた。ジョンソン、(氣高い誇りと輕蔑を以つて)「いや、わしは決して、より少なく理性的になることによつて幸福にはならないだらう。」セント・アサフの監督、「では、あなたのお望みは *mpdackera* *sigar kjueros* (學問と共に齡を重ねる) にあるのですな。」ジョンソン、「その通りです、閣下。」

閣下は、ウェールズの慈善團體で、收容されてゐる人々が毎週自分たちの勞働の産物を寄

附するといふ條件で養はれ、すべての物を給與されてゐることを述べ、その人々は所有權をもたないために全く無氣力になつたと語つた。ジョンソン、「彼等は希望の目的物を有しない。彼等の状態は一層善くなり得ない。まるで港なしに漕いでゐるやうなものだ。」

四月十日（金曜日）、朝のうちに私はジョンソンを彼の自宅に見出した。……

チャムリー夫人が語つた、氣取るつもりで、始め盛んにしゃべり、それから同じ理由からして沈黙を守つた或る紳士の話を、私は彼に思ひ出させた。その人は最初は「自分はすべての席で一ぼん活氣のある人としてもはやされよう。」と考へたのだが、不圖「おお！眞面目な態度で賢いさうな顔をした方がずつと立派だ。」と思ひ返したのであつた。「初めにおしやべりをして後で沈黙を守るなんて、彼はビタゴラスの訓戒の逆を行なつてゐる。彼は又自然の順序にも逆行してゐる。初めに派手やかな蝶であり、後で這ふ蟲となつたのだから。」ジョンソンはこの、彼自身が私に告げた敷衍と解説に對して長い間大笑ひした。

われ／＼はスコット氏（現在の王室御用民事辯護士長サー・ウィリアム・スコット）と共にテムブルの彼の部屋で三人だけで正餐を共にした。人數が少ないのでジョンソンは前日は氣焰があがらず、しばらくは何にも話が出なかつた。遂に彼は口を切つた、「今の時代では服従觀念が無残にくづされてしまつた。今では誰もその父がもつたと同じやうな權威をもつてゐない——牢番以外には。どの主人も召使に對してそれをもつてゐない。それはわが國

の大學に於いて養へた——いや中學校でもさうだ。」ボズウェル、「原因はどこに在るのでせうか？」ジョンソン、「スコットランド人が這入りこんで来るからさ。」（皮肉に笑ふ）。ボズウェル、「物事が逆さまになつてしまつたといふわけですか。——だが、眞面目なところは何？」ジョンソン、「左様さ、原因は幾つもあるが、主なものには金錢が馬鹿に殖えたことだと思ふ。今では誰も領主に依存してゐない、よその土地に人をやつて食料を取寄せることができる。わしのとこの袋小路の入口にゐる靴磨きはわしに依存しない。わしは、たかだか一日に一ペニーを彼に與へるだけだ。彼はそれを誰か他の人が與へてくれるだらうと望む。わしはその一ペニーを別の靴磨きのところにもつていかねばならぬ。だから、その商賣としては少しも損になつてない。わしはわしの書いた『ヘブリディーズ諸島周遊日記』中でいかに金銀が封建時代の服従を破壊するかを説明しておいた。が、そればかりではない、一般に尊敬の弛緩が見られてゐる。今ではどの息子も昔のやうには父に依存してゐない。父たるものは、多くの主張をする權利を有する、それ自身で偉大なることであると考へられてゐたものだ。それが一般に極めて狭い範圍に縮小されてしまつた。わしは、無政府状態が專制を産むやうにこの極端な弛緩は「ヨリ強キ檢束」を生ずるであらうと望んでゐるのだ。」

名聲といふ、世の中があつたやうに欲求してゐるもの話となつて、私は、人間の心に向け、他の對象と較べて見ると、このうちに現實にはいかに僅かばかりしか無いかを述べた。「誰でもよく願ひて見れば、自分の時のいかに小さな部分が、シェークスピア、ヴォルテール、又

は誰でもよい、曾つて世にあらはれた、或ひは現在世界の注意と崇拜とをあつめてゐる最も高名な人物について語つたり考へたりすることに費されてゐるかが判るでせう。それだけ取り出して一と纏めて御覽なさい、それはいかに狭い空間に這入つてしまふこととせう！」私はそれから巧みにギャリック氏の名譽と彼が大人物の様子を氣取つてゐることを話を持ち込んだ。ジョンソン、「君、ギャリックがいかにかわづかしが氣取らないかは驚くべきほどだよ。いや君、ギャリックは《恭シク幸運ヲ頂戴（原文ラテン語）》してゐるよ。考へても見たまへ、君の今言つたやうな高名な人物は遠方からの喝采を受けたのだ、ところがギャリックはそれを顔の前に突きつけられ、耳につめこまれ、毎晩頭蓋の中に千人の賞讃を入れて家に歸つたのだ。それから君、ギャリックは、貴顯の食卓や朝の引見や殆ど寢所にさへも、參上したのではなく、乗り込んだのだ。それから君、ギャリックは多くの人間を彼の下にもつてゐる、その人々は彼の權勢に對する恐れから、彼の愛顧に對する希望から、彼の才能に對する崇拜からして絶えず彼に服従してゐるのだ。そして又、此所に自分の職業の品格を向上せしめた人間があるのだ。ギャリックは俳優をより高尚な人格たらしめた。」スコット、「彼は又なか／＼キビ／＼した文筆家です。」ジョンソン、「左様。そしてすべてこれ等のものが彼自身が儲けた大なる富によつて支持されてゐるのだ。もし、すべてかういふことがわし自身に起つたなら、わしは二人ばかりの男に長い竿を持たせてわしの前に歩かせ、道の邪魔になる人間を薙ぎ伏せさせることにしたらう。考へて見たまへ、すべてかういふことがシッパ

やクインに起つたとしたら、彼等は天上の月を飛び越えたらう。——ところがギャリックはわれ／＼風情と話してくれる。」（にや／＼笑ひながら）。ボズウェル、「それからギャリックは大へん善い人で、慈善家です。」ジョンソン、「物惜しみしない人だ。彼は英國の何びとより一層多くの金を人に與へた。それは多少虚榮心も混ざつてゐるかも知れない、しかし彼は金錢が彼の第一の目的でないことを示した。」ボズウェル、「けれども、フットは彼について、彼は寛大な行爲をなさうといふ心算で出かけた、ところが町角を曲ると半ベニーの幽霊に出くわし、震へ上がった、と云つたものです。」ジョンソン、「その言葉は大いに眞實だ。何故なら、わしはギャリックほど、明日は何をするであらうかといふことを今日確實に言ひにくい人間を未だ曾つて知らないからだ。それはその時々の彼の氣分に左右されるのが非常に多い。」スコット、「私は彼が物惜しみしないと聞いて嬉しく思ひます。非常に縮まり屋だといふ風に聞いて居りましたが。」ジョンソン、「われ／＼は彼の家庭内の縮まり屋ぶりを問題にする必要は無い。わしはずつと昔彼のところでお茶を飲んだことを覚えてゐる、ベッグ・ウオッフイングトンが淹れたのだが、彼はそれをあまり濃く淹れたといつて彼女に小言を云つた。彼は當時既に財布の金を手さぐりすることを始め、何時になつたらこれで充分といふことになるか、わからなかつたのだ。」

* ジョンソンがこの小さな逸話をサー・ジョシヤ・レノルツに語つた時には今日云ひ洩らした事情をつけ加へた——「ギャリックは云つた、なんだ、まるで血のやうに紅／＼したぢやないか。」

富とその適当な使用法、及び經濟と呼ばれる技術の効果といふ話題に關して彼は云つた、「莫大な財産をもつた人間が年々の収入を費ひつくすばかりでなく、屢々實際に金に困つてゐることを考へると不思議な氣がする。彼等は費すものに對するだけの値打を受けてゐないことは明かだ。シェルバイン卿はわしに云つた、——高位の人間が自分自身の事柄を吟味して見れば、彼が當然もつべきものすべてと、何等か役に立ち、若しくは何等か有利な外觀を呈するものすべてを、一年五千磅でもち得るのだ、と。だから、大きな部分が無駄に消えることにならざるを得ない、そして實際、財産の多少に拘らず、大抵の人はさういふことをやつてゐるのだ。」ボズウェル、「私はそれを疑ひません。しかし、どうしてでせうか？何が無駄なんでせうか？」ジョンソン、「まあ、塵をこはすとか、その他數へ切れないことさ。無駄は正確に擧げるわけにはいかない、われ／＼はそれがいかに破壊的であるかを心得てはゐるが。一方では或る額の収入で人を小綺麗に暮していくことを得しむる經濟と、他方では同じ額の収入で別の人間が見すばらしい暮らし方をする無駄とは定義しがたいものだ。それは非常に微妙なものだ、一人の男が他の男よりもずつと速かに上衣を擦り切つてしまふのと同様、どうしてだか説明はできない。」

われ／＼は戰爭について語つた。ジョンソン、「すべての人は、兵士でなかつたこと、或ひは、船乗りでなかつたことに對して自分を肩身狭く感ずるものだ。」ボズウェル、「マンズフィールド卿はさう感じません。」ジョンソン、「君、もしマンズフィールド卿が軍務に服

した陸海軍の將軍たちの集まりに雜じつたら尻こみするだらう。彼はテーブルの下に這ひ込みたい氣がするだらう。」ボズウェル、「いえ／＼、彼は彼等を悉く裁くことができると思へることです。」ジョンソン、「成るほど、もし彼がみんなを捕へることができるとつたらね。しかし、彼等の方がずつと先に彼をさばいてしまふだらう。いや／＼君、ソクラテスとスエーデンのチャールス十二世の兩人が何かの席に居あはせて、ソクラテスが「わしについて來て哲學講義を聴きなさい。」と言ふとし、チャールスが劍を按じて「われに従つて露帝を位から追へ。」と言ふとしたら、人はソクラテスについて往くのを恥づかしく思ふだらう。その感じは普遍的だよ、しかし不思議なことは不思議だね。船乗りに至つては、後甲板から下の方を見下ろせば、人間の悲惨のどん底が眼に映る。あの混雜、あの不潔、あの悪臭——ボズウェル、「しかし船乗りは幸福です。」ジョンソン、「彼等は獸類が幸福なるが如く幸福なのだ、一片の生肉を獲て——最も粗野な肉慾を以つて幸福なのだ。だが、兵士や船乗りといふ職業は危険といふ氣高さをもつてゐる。人類は、恐怖といふ非常に一般的な弱點を克服した人々を尊敬するものだ。」スコット、「でも勇氣といふものは機械的なもので、作り出せるものではありませんか？」ジョンソン、「左様、團體的な意味に於いてはね。兵士は自分たちをたゞ大きな機械の一部分であるやうに考へる。」スコット、「世間の人は船乗りになることを好むやうですね。」ジョンソン、「わしは人の心のその他の奇妙な倒錯を説明できないと同様、それが説明できないのだ。」

彼の船乗稼業に對する嫌惡は終始一貫して猛烈であつたが、會話に於いては彼は常に軍人の職業を持ち上げた。しかし、私は彼の書き物の大きな、そして多方面な私の蒐集中に彼が有名な友人にあてた一つの手紙をもつてゐるが、その中で彼はから述べてゐる——「小生の名附け子が先日來訪しました。彼は軍隊生活に倦きてきました。まことに無理のない話です。もし貴下が彼を何か他の位置に變らせることがおできならば、彼の幸福を増し、身を堅めしむることに相なるかと存じます。軍人の生活は苦しみと危険のりちか、さもなくば怠惰と墮落のりちに過こされます。」これが彼の書齋内に於ける冷靜な思慮であつた。しかし相客の存在によつて熱し活氣づいた時には常に、詩的想像により心をやす他の思索家同様、かがやかしい名聲に對する一般の熱心に感染した。

.....

彼はコック・レーンの幽霊についての詐欺事件(譯者註、千七百十二年ロンドンのコック・レーンに會つてそれが詐欺であることを確かめ、その顛末を發表した。幽霊が現れるといふ噂がつたので、コック・レーン等が立それにも拘らず、コック・レーンがその幽霊を信じたといふ風評があつた)について大いに憤慨し、彼が欺瞞を發見する手助けをし、その記事を新聞に發表した経緯をすこぶる満足さう語つた。この問題について私は不注意にもあまりに多くの質問を浴せかけることによつて彼を怒らせてしまひ、彼は不興な様子を示した。私はかう云つてあやまつた、「私は教訓と興味を得るために質問をしたのです、私は熱心に泉に近づいたのです。けれどもあなたがヒントを與へ、泉に鏡を下ろしたから早速止めにしたまでです。」——「だが、それは人に不愉快なことをし

なくてならないやうに強ひるものだ。」と云つて彼は尙も私に小言を云ひつづけた。私は云つた、「先生、泉に鏡を下ろして私に飲めないやうになさつたからは、あなたの機智の泉を私にさし向けて私を濡らすのは止めにして下さい。」

彼は時々質問を惱まされることを我慢し得ないことがあつた。會つて私が居合せた席で一人の紳士が、「先生は何をなさいました?」とか「何とおつしやいましたか?」といふ風な質問をあまり澤山したので、彼は到頭癡癡を起こして云つた、「わしは査問に附せられるのは御免だ。君、さういふのは紳士の作法ぢやないと思はないのかね? わしは「何」や「何故」で、ぢらされるのは御免だ。これは何ですか? あれは何ですか? 何故牝牛の尻尾は長いのですか? 何故狐の尻尾はボサ／＼してゐるのですか?——つてね。」紳士は大ぶ面喰つて云つた、「ですが、先生は大へん善い方だもんで、ついでい／＼と先生を煩はす氣になりますのです。」デ・ジョンソン、「君、わしが大へん善いといふことは君が大へん悪くすべき理由にはならんぢやないか。」

ウリッチにあるチャステイシア船——其所に罪人を拘束して労働につかせ、以つて刑罰とする——の話となつて彼は云つた、「わしはそれによつて彼等が罰せられるといふのが腑に落ちない。彼等は盗みの罪を犯さなかつたとしても同じやうに働いたにちがひない。彼は今は働いただけだ。だから、結局、彼等は得をしているのだ。彼等が盗んだところのものは彼等にとつて明かに得になつてゐる。拘束されるといふのは何んでもない。すべて働く者は拘束さ

れてゐる。鍛冶屋は仕事場に、裁縫師は屋根裏部屋に。」ボズウェル、「それからマンスフィールド卿はその法廷に。」ジョンソン、「さうだ、知つての通り、拘束の觀念は擴大するところができる、——△すべての島は牢獄である」といふ歌の通りに。ドッツリーの『詩集』にはこの歌の作者へ宛てた詩を集めたものがある。」

大旅行家ボック(譯者註、一七〇四年—一七六五年)についてのスミスのラテン語の詩の話が出た。彼はその中幾つかを誦讀しそれ等がスミスの一ばん良い詩だと云つた。

彼は異常な意氣こみで遠い國々に旅行することについて語り、精神がそれによつて擴大され、人間の風格の向上がそこから得られると云つた。彼は支那の長城を訪れることについて特別の熱心さを云ひ表はした。私は一寸の間それに釣られて、私が世話をやく義務のある子供たちさへ無かつたら、ほんとに私は支那の長城を見に出かけるだらうと思ふ、と云つた。彼は云つた、「さうすることによつて君は子供たちの位地を高めるために重要なことをすることになるだらう。君の精神と好奇心からして彼等の身に光が添へられるだらう。彼等は常に、支那の長城を見に往つた人の子供として特別な目で見られるだらう。わしは眞面目に云つてゐるのだよ。」

われ／＼がスコット氏方を辭した時彼は云つた、「わしと一しよにうちまで來ないか？」
「もう大分晩うございます。しかし三分間ばかりおつきあひ致しませう。」ジョンソン、「四分ぐらゐよからう。」二人はウィリアムズ嬢の部屋に往つたが、丁度印刷業のアレン氏が來

てゐた。この人はポルト・コートの彼の家の家主だつた、立派な深切な人で彼とは極く昔から知り合ひであつた。大へん面白いことに、彼は極めて小男であるにも拘らず、ジョンソンの面前に於いてさへ、この文豪の堂々たる云ひ廻しと重々しいおごそかな話しぶりを眞似する習慣があつた。彼はこの晩、私はその目的のために工夫された特定の文字を以つてする速記術なるものはやらないが、獨特の方法によつて、半分略した言葉を書き、後は全然はぶいて、しかも私の聞いたどんな談話でも、その内容と言葉をよく捉へて、書き留めた直ぐ後に極めて完全にそれを再現することができる、と自慢した。ジョンソンは曾つて本式の速記者に挑戦した時のやうに私に挑戦し、彼がロバートソンの『アメリカ歴史』の一部をゆつくり明瞭に朗讀し、私が私一流の筆記法で書き寫すことを試みるといふやり方で實驗をして見た。ところが私が極めて不完全にそれをしたことが判つた。結局、この文章の長所は主として言葉の推敲をこらした排列によるもので、それは本質的な損傷なしには變更又は簡約できないものである、といふ結論になる。

四月十二日(日曜日)、私は彼を正餐前に自宅に見出した。『獄舎の想ひ』と題したドッド博士の詩が彼の卓子の上に載つてゐた。それは極重罪のためにニューゲートに投獄された人による異常な努力の産物と思へたので、私はそれに對するジョンソンの意見を聴きたいと望んだ。驚いたことに彼は、一行も讀んでゐない、と云つた。私はその本を取り上げて一節を讀み聴かせた。ジョンソン、「相當宜しい——もし前以つて好きにならうといふ氣持ちさへ

あれば。」私はも一つの節を讀んだが、彼は前より尙感心した。それから彼はその本を自身の手に取り上げ、巻末に載せられた祈禱を見て云つた、「それが彼の受難の前夜に綴られたといふことについてどんな證據があるのか？ わしはそれを信じない。」彼はそれから、博士が國王、その他のために祈るところを朗讀してかう云つた、「君は、絞罪に處せられる前の晩に於ける人間が王室の繼承について心配すると思ふかね？——とは云へ、彼はこの祈禱をその時綴つたのかも知れぬ。一生涯殊勝げな口を利いてゐた人間は最後まで殊勝げな口を利くかも知れない。——とは云ふものの、あれ程嘆願したのに赦免を拒絶された人間がこんな熱烈に王のために祈るといふことは殆ど有り得ない。」

彼と私、及びウィリアムズ嬢は尊師レクターパースイ博士の許で正餐すべく出かけた。ゴールドスマスの話となつてジョンソンが、彼は非常に妬み深い、と云つた。私は、彼はあらゆる機会にそれを正直に認めたことを云つて彼を辯護した。ジョンソン、「君はその非難を強めてゐるのだ。彼はあまりに嫉妬心が強いのでそれを包み隠せないのだ。あまりにそれに充ちてゐるのでそれが溢れて流れ出るのだ。確かに彼は随分屢々さういふことを云つてゐる。ところで君、人は自分が公言してゐることを考へるのを恥としない。公言するのを恥とするやうなことを考へる人も澤山あるがね。われ／＼はすべて生れつき妬み深いものだ、但し、それを抑へることによつて、われ／＼はそれを克服するのだ。同様にわれ／＼は生れつき泥棒なんだ、赤んぼはみんな、一ばん手つ取り早く自分の欲しいものを手に入れようとする。善い賢

と善い習慣によつてそれは矯正され、遂に人は他人のものを取らうといふ氣持ちさへ起さないうやうになる、それについて心の内で争ひをもたなくなる。」

此所で私はジョンソン博士とパースイ博士の間に起つた、ちと昂奮が過ぎた場面を記録するであらう。それが、ジョンソンの眞にやさしく、善意に充ちた心情を發揮する機會を與へたのでなかつたら、私はさうすることを差控へたであらう。彼は自分が「怒りにまかせて云つた」何事が友人を幾分でも傷つけたことを知るや否や仲直りをすべく直ぐさま望んだばかりでなく十分な償ひをすべく努力をつくしたのである。

旅行に關する書物の話となつて、ジョンソンは、スカイ島のダンヴィガンでなしたと同様に、ベナントを大いに褒めそやした。パースイ博士は由緒あるパースイ家の男系相續人であることを意識して居り、且つ尊いノーサムバランド家に對して最も熱烈で最も忠實な愛着をもつてゐるので、アニック城と公爵の遊園を貶しつけた男が褒められるのを落ちついて坐つて聽いてゐるわけにいかなくつた。おまけに彼はその旅行記には一寸も感服してゐなかつたから。そこで彼は熱心にジョンソンに反對した。ジョンソン、「アニックについての論述によつてベナントは目論んだことを成しとげた——彼はあんたを大いに怒らしたから。」パースイ、「彼は庭を小ざつぱりしてゐると云つたが、それはまるで町人の花壇でもあるかのやうな云ひ表はし方だ、實際は非常に廣大な芝地と砂利道があるのに。」ジョンソン、「君自身の話から見るとベナントの云ふことは正しいのだ。それは小ざつぱりしてゐるのだ。草は短

かく刈られてゐるし砂利は平らに均らされてゐる。それぢや小さつぱりしてゐるぢやないか。廣さは差障りにはならない。一哩だつて一ヤード四方と同様に小さつぱりとあり得る。君は廣さ廣さと云ふが、わしはローストビーフ二つにブッディング二つといふやうな素町人の山盛り御馳走を思出させられてしまふ。そこには變化が無い、土地の設計に頭を働かせてない、樹木が無い。」パースイ、「彼はノーサムバランドの博物誌を述べるやうなことを云つて置きながら、近年其所に植ゑられた莫大の數に上る樹木については一寸も注意を拂つてゐない。」ジョンソン、「それは君、博物誌とは何んの關係も無いよ、それは人文誌だよ。櫛の木（譯者註、櫛の木の博物誌を書く人間はイズリントンで何頭の牛が乳を搾られるかなどとは云はぬものだ。公園で搾られようがイズリントンで搾られようが牛に變りはない。）パースイ、「ベナントの敘述はなつてない、ロモンド湖に沿うて行く飛脚の方がもつとらまく敘述するでせう。」ジョンソン、「わしは彼の敘述は大へんうまいと思ふ。」パースイ、「私は彼より後に旅行しました。」ジョンソン、「わしも彼より後に旅行した。」パースイ、「しかし、あなた、あなたは近眼です、あなたは私ほど善くは見えません。」私はパースイ博士が思ひ切つたことを云ふのに驚いた、ジョンソン博士はその時は何にも云はなかつた。しかし、可燃性の分子が蓄積して今にも爆發しさらな状態になつてゐた。少したつてパースイ博士は又ベナントを貶すやうなことを何か云つた。ジョンソン、（鋭い語調で）「これは偏狭な心の憤りだ、——彼が

ノーサムバランドですべての物を見出さなかつたからと云つて難癖をつける。」パースイ、（打撃を感じながら）「お好きなだけ亂暴なことをおつしやい。」ジョンソン、「黙りたまへ、君！ 亂暴などと云ひたまふな。考へて見たまへ、君の方から（鬱憤を排けさせよう）とあせつて息を弾ませながら）わしのことを近眼だと云つたぢやないか。われ／＼は禮讓は打ち切つたのだ。われ／＼は好きなだけ亂暴にすることになつたのだ。」パースイ、「私の名譽にかけて云ひますが、私は無禮をしようといふ氣は無かつたのです。」ジョンソン、「わしの方ではさうでなかつた。わしは君の方で無禮をしたと思つたので、ことさら無禮にしたのだ。」パースイ博士は立つて彼のそばに馳せ寄り、彼の手を取つて懇ろに自分の氣持が誤解されたのであることを保證した。そこで忽ち仲直りが成立した。ジョンソン、「やあ君、わしは君がベナントの首を吊るのに文句は云はんよ。」パースイ、（前の話題に歸りながら）「ベナントは客をもてなす廣間に招くために胃が吊るしてないと云つて不足を云つてゐます。然るに私は胃を吊るす習慣になつてゐるなんて聞いたことがありません。」ジョンソン、「彼を吊るし上げたまへ、吊るし上げたまへ。」ポズウェル、（この冗談に相槌を打ちながら）「胃の代りに彼のしやりから、べを吊るしなさい、そして、彼はあなたの敵なんだから、あなたのオーディン（譯者註、北歐神話の主神たる戦の神）の廣間で、そのしやりから、べを杯にしてエール酒を飲んだらいいでせう。それこそほんとうに古風でせう。それこそ『北歐古代の遺物』（譯者註、パースイ博士が贈した書物の）が實現するわけです。」ジョンソン、「彼はホイッグ黨だよ、君。憐れむべき犬だ。」

（單に政治上の意見の相異からそんな亂暴な言葉を用ひたことをわれと笑ひながら、）しかし彼はわしが讀んだうちでは一ばん良い旅行家だ。彼は他の誰よりも一層多くのことを觀察してゐる。」

われ／＼は嵐の後の静けさを持つた、そして晩までおみこしを据ゑて夜食をとり、愉しく賑やかであつた。しかしパーセイ博士は、自分は先刻の出来事について大いに心安からず思つてゐると私に語つた。そのわけは、この席にノーサムブランド公爵家と知り合ひの一紳士が居つて、この人の前で彼は自分がジョンソン博士とどんなに懇意にしてゐるかを示してもつと眞録を見せたかつたのだが、あのやうなことがあつてはその人は逆に彼に不利な印象を植ゑつけられて去るかも知れないからである。彼から、この事をジョンソン博士に云つてくれと頼まれたので後刻私はさうした。それに對するジョンソンの言葉はかうであつた、「とかく策略はかういふことになる。彼があゝの紳士の前で立派に見られたがつてゐることをわれに知らせて置いたなら、彼は始めから終りまで第一に奉られたらうに。」彼は言葉を盡してパーセイ博士を褒めた。私は云つた、「では、例の事件の不利な報告を先生が有効に取消せる手段を私が提議してかまひませんか？ 私がこの日の不運な論争のことについて先生に手紙を書きませう、そして先生が、その返事として今おつしやつたことをお書き願ひたいのです、そしてパーセイ卿（譯者註、ノーサムブランド家の當主）が近日バオリ將軍方でわれ／＼と共に正餐すること

になつてゐますから、私とその御手紙を閣下の前で讀み上げる機會をとらへませう。」かくてこの友情的な計らひがパーセイ博士の知ることなしに實行された。ジョンソンの手紙はパーセイ博士の疑ふべからざる長所を最も見榮えのする觀點に置いた。そして私はバオリ將軍方で、パーセイ卿が關心を有してゐる人物に對するジョンソン博士の温情のあらはれとしてそれを持ち出すことによつて、卿がその書簡の内容を聞くように計らつたのである。かくしてパーセイ博士が善く思はれたいと念願してゐた向きにひよつとすると生じたかも知れないすべての不利な印象は一掃された。その翌日私はパーセイ博士と朝食を共にしつつ、私の企てたこととそれが首尾よく遂げられたことを話した。彼はそれに對して熱烈な言葉で私に感謝し、彼を褒めたジョンソン博士の手紙——私はその寫しを彼に與へた——を大いに喜んだ。彼は云つた、「私には歐洲のすべての大學からの學位よりもこの方が有難い。それは私のみならず、私の子供、私の孫の寶になります。」ジョンソン博士は後日私に、例の手紙の寫しをパーセイ博士に與へたかと訊いた。私が、與へたと云ふと怒つて、それを取り戻すやうに頻りに云ふので私はそのとほりにした。……

四月十三日（月曜日）、私はジョンソンと共にラングトン氏方で正餐した、其所には當時はチェスターの監督であり現在はロンドンのそれであるポーターウス博士及びステイントン博士も居合せた。彼は最初は大へん沈黙勝ちの氣分にあつた。正餐の前には彼は子供たちの一人に「美しい赤ん坊だ。」と云つただけであつた。ラングトンは後刻、正餐前のチヨンス

ンの會話を語ることができると云つて私に面白いことを聞かせてくれた。即ちジョンソンはホルレボウ著のデンマーク語から譯した『アイスランドの博物誌』の一章を完全に誦誦することができると云つたのだ。ところが、その章の全體といふのが正に左の通りであつたのだ。

「第七十二章 蛇について

鳥の全體を通じて蛇は見あたらない。」

四月十五日（水曜日）、私はジョンソン博士とデイリー氏方で正餐したが、その時私は元氣に充ち／＼てゐた。私は午前中大分長い間有能にして雄辯なる印度歴史家オーム氏と共にあつたからである。氏はジョンソンに對して大なる感服を表明した。曰く、「私はジョンソンが語る主題が何であるかは構はない、しかし、私は他の誰よりも彼が語るのを聴くことを一層好む。彼はわれ／＼に新しい思想を與へるか、新しい色づけを與へるか、どつちかをする。彼がもつと物惜しみのない報酬を與へられなかつたことは、國家の恥辱だ。私が假りにデューヂ三世であり、そしてアメリカについて彼が考へたが如く考へたとしたら、私はジョンソンにその『課税は壓制に非ず』だけに對しても年三百磅を與へたであらうに。」私はこの話を繰り返したところ、オームの如き人物からさう褒められてジョンソンは大いに喜んだ。本日デイリー氏方には器用なクエーカー教徒の婦人ノールズ夫人、リッチフィールドの女

詩人シーワード嬢、^{レタレンド} 醫師メーオー博士、^{レタレンド} ベッドフォード公爵の私教師たる^{レタレンド} 醫師ベレスフォード博士が集つた。正餐の前にジョンソン博士はチャールズ・シェリダン氏の『スエーデンに於ける最近の革命の記事』を掴み、貪り喰らふやうに猛烈な勢で讀んでゐるやうであつた。どうもそれが彼の勉強の仕方らしかつた。ノールズ夫人は云つた、「あの方は誰よりも善く本の讀み方を心得てゐます。彼は眞つ直ぐに書物の本質に達します、彼はその心臓をえぐり出します。」彼はテーブル・クロスにそれを包んで食事の間中自分の膝の上に載せて置いた、一つの樂しみを終つたら直ぐに他の樂しみに移らうと慾ぼつて。その有様は——卑俗な喩へを用ひることを許されるならば——犬が、自分に投げられた何か他の物を食ふ間、骨を足でかかへてとつて置くのに似てゐた。

食通を以つて任じたジョンソンが「いつも御馳走がある」と認めた食卓だけあつて料理の話が自然もち上つたが、彼はかう云つた、「わしは今までに書かれたどれよりもまさつた料理の本を書くことができる。それは理論的原則についての書物でなければならぬ。調劑術は近年ずつと單純になつた。料理術もさうすることができよう。今では五つの成分を混ぜてできる處法が昔は五十もの成分を要した。同様に料理術に於いても成分の性質がよく知られたなら、ずつと少ない數で間に合ふだらう。それから悪い肉を良くするといふわけにはいかぬから、どれが一ばん良い屠肉であるか、一ばん良い牛肉であるか、一ばん良い肉片であるかを教へ、若い鳥の肉をどう選ぶべきか、いろ／＼の野菜のしゆん、そしてそれから、どう炙

り、責、そして混ぜ合はすべきかを教へようと思ふ。」デイリー、「グラス夫人の『料理術』は一ばん良い本ですが、ヒル博士が書いたものです。出版業者の半分はそれを知つてゐます。」ジョンソン、「さうかね。それは料理術といふ問題が學者によつて扱はれたらどんなに一層うまくできるかを示してゐるのだ。わしはその本がヒル博士によつて書かれたのかどうかを疑ふよ。グラス夫人の『料理術』はわしも覗いたことがあるが、あの中で、硝石とサル・ブルネラは違つた物質のやうに扱はれてゐる。然るにサル・ブルネラは炭火の上で焼かれた硝石に過ぎない、そしてヒルがそれを知らない筈は無い。とは云へ、さういふ書物の大部分は抜き書きから成つてゐるものだから、この誤りも不注意に採り入れられたのかも知れない。だが、諸君はどんな料理術の本をわしを作るか刮目して見てゐたまへー わしはデイリー氏と版權について談判しよう。」シーワード嬢、「それこそハーキュリーズが紡ぎ竿をもつやうなものでせう。」ジョンソン、「いや、さうでない。女は紡ぐのは大へん上手にできる、しかし女は良い料理術の本をこしらへることはできない。」

ノールズ夫人は男は女よりも一層多くの自由を許されてゐると云つて不平がつて見せた。ジョンソン、「なに、女だつて望んで然るべき自由はすべて享有してまますよ。われ／＼が労働と危険とはすつかり引き受け、女がすべての利益を受けてゐる。われ／＼は海に船出し、家を建てる——要するに女の歡心を買ふためにあらゆることをする。」ノールズ夫人、「博

士は機智に富んだ議論をなさいます。が、成程、とは思はれません。たとへば、家を建てる場合を考へて見ませう。左官屋のおかみさんは、もし酔つばらつてゐるのを見つかつたらおしまひです。左官屋の方は何度でも好きなだけ酔つばらつても世間ではそれで通してくれます。それどころか、おかみさんや子供たちを飢ゑさせることさへできるのです。」ジョンソン、「もし左官屋が酔つばらつて妻子を飢ゑさすやうな場合には教區は彼に妻子の扶助の保證をつけるやう強制するだらうといふことをあんたは考へなくてははいけません。われ／＼は悪を抑制するのに相異なる手段をもつてゐるのです。男には足蹴曝し臺、女には水漬け腰掛け、野獸には檻といふ工合に。もしわれ／＼が婦人からわれ／＼自身以上の完全さを要求するとなれば、それだけ婦人に敬意を拂つてゐるわけだ。それに女は男と同じやうな誘惑は受けない。彼女は常に風儀正しい仲間の中でくらすことができる。男の方は誰彼のおかげもなく世間に立ち難じらなければならぬ。女が間違つた事をしでかさうといふ氣が無ければ、それから安全に守られてゐるといふことは一寸も束縛ではない。わしはテムズ河に這入つていく自由をもつてゐる。が、もしわしがそれを試みるならば、わしの友人たちはわしを『瘋癲院』に拘束するだらう。そしてわしは彼等に感謝すべきなのだ。」ノールズ夫人、「でもやつぱり、博士、女より男の方に一層多くの氣儘が許されてゐるのは辛いことだといふ氣がして仕方ありません。それは男性に優越を與へることになります。どうして男にさういふ權利があるのか腑に落ちません。」ジョンソン、「どつちかが優越を得なければならぬのは明

かなことです。シェータスピアの云つてゐるとは、二人で馬に乗れば一人はらしろにならなければならぬわけです。」ディリー、「ノールズ夫人は、歌籠に乗つて兩側に一人づつ行くことにしようといふのでせう。」ジョンソン、「さういふことをすれば馬は二人共振り落すだらう。」ノールズ夫人、「とにかく、あの世では両性が平等になるやうに望みますわ。」ボズウェル、「それはちと望みが大き過ぎますね。その分ぶんでいくとわれ／＼は天使と同列になることを望んでいいわけですね。私は未來の世界に於いてわれ／＼が幸福になれるやうと望みます。けれどもわれ／＼はすべての人間が同じ程度に幸福になるものと豫期してはいけません。みんながそれ／＼の器量に應じて幸福になれば足れりとすべきです。實直な車引きはサー・アイザック・ニュートンと同様天國に行くでせう。が、同様に善人だとは云へ、二人は同じ程度の幸福をもつことにはならないでせう。」ジョンソン、「多分君の云ふ通りだらう。」

.....

メイヨー博士はソーム・デニンジの『キリスト教の内的證據の考察』についてのジョンソンの意見を訊いた。——ジョンソン、「わしは結構な本だと思ふ。但しあまり神學的ではない。それから、この問題についてあまり眞剣になるのは沽券にかかはるとでもいつたやうに氣樂なぞんざいさを衒つたやうな所が見える。」ボズウェル、「彼は、自分の本があまり生眞面目な論文を讀みたがらぬかも知れない高踏的な連中に受けがよくなるやうにとわざと

さらしたのかも知れません。現代は一般に輕はづみの風潮があります。近頃は袋假髪をした醫者もあるのだから、陽氣な——少くとも今までほどは外見がおごそかでない僧職者がゐてもよくはないでせうか？」ジョンソン、「デニンジは君の云ふやうなつもりなのかも知れない。」ボズウェル、「あんたは彼の本がお好きでいいわけだ、ノールズさん。その本はあんたが友が主張してゐるとは、勇氣はキリスト教徒の美德に非ずと云つてゐるのだから。」ノールズ夫人、「ほんとに、その點では氣に入つて居りますわ。ですが、彼が、友情はキリスト教徒の美德に非ず、と云つてゐるには賛成できません。」ジョンソン、「嚴密に云へば、彼の云つてゐることは正しい。すべて友情といふものは他人をないがしろにし、或ひは、ことによると他人を不利に陥れて、一人の友人の利益を圖ることだ。だから昔のギリシア人は云つた、幾人もの友人をもつ者は、一人の友人をもたぬ」と。ところで、キリスト教は普遍的の仁惠を勧め、すべての人をわれ／＼の兄弟と考へるやうに勧める。それは古代の哲學者等によつて述べられた友情の美德には反するものである。あんたがたの宗派は屹度これに賛成でせう、あんたがたはすべての人間を友と呼んでゐるのだから。」ノールズ夫人、「私もはすべての人に善をなすやうに、しかし、特に『信仰』の家に屬する者に對して、さうするやうに命ぜられて居ります。」ジョンソン、「しかしね、『信仰』の家は随分廣いものだ。」ノールズ夫人、「でも博士、私どもの救ひ主は十二人の使徒をもつてゐましたが、その中彼が愛した一人が居りました。ヨハネは『イエスの愛したる弟子』と呼ばれて居ります。」デ

ジョンソン、(眼を慈しみ深く輝かせながら)「これはいい、あんたは大へん良いことを云ひました。」ボズウェル、「うまいことを引用したものですね、先生、先生はこのことに気がおつきになつたことがありますか？」ジョンソン、「いや、なかつた。」

この心地よい話題から、どうした工合でか、又何故か知らないが、急に話題が移つて彼は猛烈な非難攻撃者となつた。即ち彼は云つた、「わしはすべての人類を愛する氣だ、但しアメリカ人は除く。」そして彼の燃え立ち易い怒りは物すごい炎を吐いた。彼は「威嚇と殺戮の息吹きを發した。」アメリカ人を「悪漢——追ひ剥ぎ——海賊」だと呼んで。そして、彼等を「懐き亡ぼし」たいものだと呼んだ。シーワード嬢は彼を、おだやかな、しかし、終始變らぬ呆れ顔で眺めてゐるが、かう云つた、「われ／＼は常にわれ／＼が傷つけ害した人々に對して最も激怒する、といふことがあります、これはその一例です。」——彼はこの微妙なそして辛辣な咎めだてに尙更いきり立つた。そして又もや猛烈な罵倒の言葉を怒鳴りだしたが、その聲たるや大西洋の彼岸まで聞こえはしないかと思はれるばかりであつた。この嵐の間ちゆう、私は彼の激怒の火を歎きながら大きな不安のうちに坐つてゐた。が、徐々に私は彼の注意を他の話題に轉じた。

女流文學者某嬢(「ハナ・モア」の話が出る)と彼は云つた、「わしはレノルツ嬢に頼んで、わしのことをあまり持ち上げないやうに願ふ、と彼女に通じてもらはざるを得なかつた。」

誰かが此の時云つた、「彼女はギャリックを持ち上げてゐます。」ジョンソン、「彼女がギャリックを持ち上げるのはもつともだ。——二つの理由からして。第一、彼女は、この三十年來ギャリックを褒め上げて來た世間のやつたことをしてゐるのだし、第二、彼女はそのためギャリックから報酬を獲てゐる。どうして彼女がわしを持ち上げるわけがあらうか？ わしは彼女のために何にもしてやれない。彼女は褒め言葉を一層有利な市場に持つて行くがよいのだ。(それからノールズ夫人の方に向いて)、今晚あんたはわしのことを持ち上げつづけてゐるが、今度はボズウェルを少し持ち上げてもらひたいものだ。あんたがわし程に彼の長所を知つてゐたなら、随分彼をもてはやしたことだらうに。彼は世界中で一ばん良い旅行の道連れです。」

誰かが、律師メーソン氏がマレー氏を告訴した事件のことをもち出した。後者が『グレー詩集』の中に、アン女王の法令によつてメーソン氏が今なほ獨占所有權をもつてゐるところの僅かに五十行を挿入したといふので。そして、メーソン氏は、代償の條件を提出して貰ひたいと要求されたにも拘らず、飽くまで告訴に及んだのだ、といふことを語つた。ジョンソンはメーソン氏の遣り方に對して強い言葉で不満を表明した。が、さういふことは敢へて驚くに足らないことを云ひ表すつもりでかう附け加へた、「メーソンはホイッグだからね。」ノールズ夫人、(はつきり聞き取れないで)、「何ですつて！ 體裁家ですつて？」ジョンソン、「もつと悪いんですよ、ホイッグ黨！ だが、彼は兩方を兼ねてゐる。」

私は死ぬことを考へると恐しくなると云つた。ノールズ夫人、「いいえ、あなたは生命の門であるところのものを恐れてはなりません。」ジョンソン、「嘘ばたに立ち上がり、眞面目でおごそかな、そして幾分陰鬱な様子でからだを揺すりながら」「誰でも理性ある人間は不安な危惧なしに死ぬことはできない。」ノールズ夫人、「聖書は、正しき者は己が死に希望をもつべし」とわれ／＼に告げてゐます。」ジョンソン、「左様、即ち絶望する勿れといふわけです。が、考へて御覽なさい、正しき者の救済の希望は、それによつてわれ／＼の救ひ主の取りなしがわれ／＼に與へられると約束された條件——従順の上に、従順が守られなかつた場合にはその補足としての悔い改めの上に、築かれてゐなければならぬ。しかし、自分の従順は、他人として見た場合、或ひは自分としても嚴密に吟味した場合に、これで宜しいと見做し得るとか、自分の悔い改めはそれを悔い改める必要がないものだとか、さういふ幅つたことが云へる者がどこに有らうか？ 自分の従順と悔い改めは救済をかち得るであらうと確信できる者は一人もゐない。」ノールズ夫人、「しかし魂に對して神が受け容れたまふといふ御告げがなされることもありませう。」ジョンソン、「成るほど、あるかも知れない。が、わしは、人が死の床に於いて自分は救はれると確信すると云つたからとて別に感服しないだらう。人は神が受け容れたまふといふ御告げを自分になさつたといふことを自信できない、況んや他人をしてそれを信ぜしめることは尙更できない。」ボズウェル、「ではわれわれは、死が恐るべきものであることを認めるに甘んずる他ないわけですね。」ジョンソン、

ン、「さうだ。わしはそれを恐ろしくないと見做し得るやうな境地に近づいたことはない。」ノールズ夫人、「恵み深い神の光に頼り切つて喜ばしい安心をたのしむものの如く」「聖ポロは、われは既に信仰の善き戦ひをたたかひ、わが道のりを盡くしたり。今より後は生命の冠わがために備へあり」と云つてゐるではありませんか？」ジョンソン、「左様、しかしこれは靈感を受けた人のことだ、超自然的の取り計らひによつて同心せしめられた人のことだ。」ボズウェル、「前途に望めば死は恐ろしい、が、事實に於いてはわれ／＼は人々が安樂に死ぬのを見出します。」ジョンソン、「いや、大概の人はこの問題をあまり考へたことがないのだ、だから、いろ／＼なことを云ふことができない、だから彼等は安樂に死んで行くのだらうと想像されるのだ。彼等は大概今死ぬとは確かに信じないのだ。さう信じた者も悪びれずに振舞はうと決心する、丁度絞罪に處せられる人間がさうするやうに。だからと云つて絞罪にされるのはやつぱり厭なのだ。」シーワード嬢、「死の恐怖の諸様式の中で明かに不合理なものが一つありますね、それは壞滅に對する恐れです、それは夢のない快よい眠りに過ぎないのに。」ジョンソン、「それは快よくもなければ眠りでもない、それは無だ。ところで單なる生存は、無よりは遙かによいもので、人は生存しなくなるよりは寧ろ苦痛に於いてさへ生存することを擇ぶものだ。」ボズウェル、「もし壞滅が無ならば、苦痛に於いて生存するといふことは之と比較され得べき状態ではなく積極的な悪となります、それをわれわれが擇ぶといふことは考へられませんか。この點失禮ながら私は反對です。又、それは、偉大

なると共に善良なる至高者はわれ／＼の現在この世に於ける悩みに對して將來償ひを與へたまふであらうといふ論據の上にも建てられた來世の希望を減ずることになりませう。何故ならば、われ／＼が現在受けてゐる苦やうな生存が比較的に見て善いものならば、それが最早や與へられなくなつたとしても不平を云ふ筋合ひは有りませう。が、もしわれ／＼の唯一の生存状態がこの世に於いてあるものならば、われ／＼の欲望に比較してわれ／＼の享受するところが甚だ不満足であるといふことについて不平を云ふべき理由が多少ありさうです。」

ジョンソン、「シーワード嬢は、壊滅——それは無である——と、それに對する危惧——それは恐ろしいものである——とを混同してゐるのだ。壊滅の恐ろしさはそれに對する危惧にある。」

ノールズ夫人は、クエーカー教への新改宗者として、ジョンソン博士がよく知つて居り、大いに愛情を示してゐた——嬢のことを述べ、嬢は常に對して常に大なる尊敬を抱き今も尙それを維持してゐると云つた。同時にノールズ夫人はこの機會に、「この愛すべき若い婦人は、彼女が英國教會を去つて一層單純な信仰に歸つたことについて彼が怒つてゐることを知つて悲しんでゐる」由を彼に傳へた。そして最も懇ろに言葉を尽くして、誠實に良心の問題であるところのものに對して彼の適切な寛容を願つた。ジョンソン、(大いに怒つた顔め面をして)「彼女は憎むべき娘つ子だ。彼女は宗旨を變へるのが自分の義務だといふもつとも

な信念を抱き得る筈はない。宗旨といふものはすべての問題の中で最も重要なもので、最も慎重に、そして手に入れられるかぎりの援助を受けて研究されるべきものだ。彼女は、コペルニクス在地動説とプロレミーの天動説の相違を知らないと同様、自分の棄てた教會と新たに參加した宗旨のことを知らないのだ。」ノールズ夫人、「彼女は新約聖書をわが前にもつてゐました。」ジョンソン、「彼女には新約聖書はわからない。世界中で一ばん難解な書物で一生涯の研究が必要なのだ。」ノールズ夫人、「根本的なことについてははつきりしてゐます。」ジョンソン、「議論の存する點はさうはいかない。異教徒は容易に改宗できる、彼等は棄て去るべき何物ももたないのだから。しかしわれ／＼は餘程強い信念があるのでなければ、その中に育てあげられて來た宗教を棄てるべきではない。それは自分に與へられた宗教——攝理がその中に自分を置いたとも云ふべき宗教だ。その宗教の中で良心的に生きるならば安全であり得るだらう。しかし、自分で宗教を選ぶ場合に間違つてゐたら、その間違ひは實に危険だ。」ノールズ夫人、「では、私どもは絶對的信仰によらねばならないのですか？」ジョンソン、「われ／＼の知識の最大部分は絶對的信仰です。宗教について云へば、われわれは孔子の弟子やマホメット教徒が自分の立場についてもつ言ひ分を悉く聞いたわけではあるまい。」それから彼は又もや怒りを發し、かの若い改宗者を辛辣極まる言葉を用ひて攻撃した。そのため兩名の婦人は大いに衝撃を受けたやうであつた。

われ／＼は可成り晩くまで一しよにとどまつた。時々爆發があつたに拘らず、概して云へ

ばわれ／＼は皆ジョンソンを喜んだ。私はこの時彼を暑い西印度の氣候になぞらへた。其所には、輝く太陽、速やかな草木の成長、繁つた樹の葉、甘い果實があるが、その同じ熱が時時雷、稲光り、地震を激しく催すのである。

四月十七日、キリスト受難金曜日なので私はいつもの通りジョンソンの許に伺つた。朝食の折、この最も嚴かな斷食の日にお茶にミルクを入れないのが彼の禁慾的な行の一部であつたに拘らず、デムーリン夫人が不用意にそれを注いでしまつたところ、彼は別にそれを斥けることはしなかつた。私は或る人々に見受けられる、奇妙な、心の不決斷と人生の有りふれた出來事に對する意氣地無さについて語つた。ジョンソン、「君、わしには自分の事を他人にやつて貰ふ癖がある。」ボズウェル、「おや！先生にさういふ弱點がお有りなのですか？」ジョンソン、「さうなんだ。が、わしはいつも後になつて、自分でやつた方がうまくできたらうと思ふのだ。」

私は彼にからいふ話をした。——大へん贅澤で放漫なやりくりのため収入を遙かに越えた暮らしをしてゐると見られてゐる或る紳士の家庭で、夫人がマンゴの漬け物の切り方について小言を云つたので、私は折を見てその値段を訊ねたところ、僅かにニシルリングであることが判つた。だからそこでは随分些細な儉約が行はれたわけだ。——ジョンソン、「君、それは眼界の狭い、誤つた儉約だ。篩の目を一つだけ塞ぐやうなものだ。」

.....

私は、私の友人デムブスターがこの問題について私に宛てた手紙で云つた通り、彼の「スコットランド西部諸島旅行記」の大なる部分は彼がロンドンを出發する前から彼の心にあつたのだ、といふのは確かに眞實であると云つた。ジョンソン、「左様、論題は前からあつた。旅行記の善し悪しは、人が前以つて心の中にもつてゐるところのもの、彼が何を観るべきかを知つてゐること、一つの生活様式を他のそれと對照し得る能力——の多少に比例するものだ。印度の富を持ち歸らんとする者は印度の富を携へ往かざるべからず」といふスペインの諺のとほりだ。旅行もそのとほりで、知識を持ち歸らうといふからには知識を携へて往かねばならん。」ボズウェル、「その諺は、取引をするためには澤山仕込んで往かなければならぬといふ意味でせうね。」ジョンソン、「さうだ。」

楽しい日であつた。われ／＼が聖クレメント寺院に向つて歩いて往つた時私は又もや、フリート街は世界中で一番愉快な所だと云つた。私は云つた、「私の氣持ちはフリート街はギリシアのテムベよりたのしい所です。」ジョンソン、「左様、が、マル島と比較した方がいゝ。」

聖クレメント寺院にはこの日非常に多くの參詣者があつた。ジョンソン博士はそれを見るのは愉快だと云つた。

ここで私はジョンソンの生涯中で最も珍しい出來事の一つについて可成り詳しい敘述をすることとなる。彼自身それについて此の目次のやうな控へを書いて置いた、——「寺院か

らの歸途、千七百二十九年以來會はなかつた昔の大學時代の學友エドワーズによつて呼びかけられた。彼は余を覚えてゐて、余にエドワーズなる者を覚えてゐるか、と訊ねた。余は最初その名を想ひ出し得なかつたが、共に歩いてゐるうちに徐々に記憶を呼び戻し、あるエール酒店で二人の間に交されたことのある會話を物語つた。余はこの交際をつづけよう*。

*『新編と譯註』第一六四頁

このめぐり合ひはブッチャー・ローで起つた。灰色の服を着、巻髪の多い假髪を被つた、人品卑しからざる年輩の紳士エドワーズ氏は、ジョンソンと知つて馴れ／＼しい自信を以つて呼びかけた。ジョンソンは見知らぬ人に對するやうな、丁寧な鹿爪らしさで挨拶を返したが、エドワーズが、四十九年前共にベムブルック大學に在學したことを彼に想ひ出させると彼は忽ち大いに喜んだ態で、何處にお住まひかと尋ね、又ポールト・コートのの自宅に来て下さらば嬉しいと云つた。エドワーズ、「ああ、あなた二人とも年寄りになつてしまひましたね。」ジョンソン、(年寄りになつたことを考へるのを日頃から嫌つてゐたので)「お互ひに意氣沮喪させるのはよさうぢやないか。」エドワーズ、「だが、博士、あんたは丈夫で元氣なやうですね。その御様子を見て私は嬉しい。新聞ではあんたのことを大分氣が重いと書いてありましたからね。」ジョンソン、「なに、新聞はわれ／＼老人についてはいつも嘘を書くのだ。」

二人とも四十年もロンドンに住みながら行き會はずにゐた大學友だちの間に交されるとい

ふやうな珍しい會話をもつと／＼そばで聴きたかつたので、私はエドワーズ氏に耳打ちし、ジョンソン博士は歸宅するのだから、このままついて行かれたらよいでせうと云つた。そこでエドワーズはわれ／＼と一しよに歩き、私は話を途絶えさせぬやうに頻りに骨を折つた。エドワーズ氏はジョンソン博士に向つて、自分は長らく大審院の辯護士として開業してゐたが、今ではハートフォードシア州のステイヴニッチの直ぐ近くで約六十エーカーばかりの小さな農場で田舎住まひをして居り、大概一週間に二回ロンドン(バーナーズ・イン六番地へ)にやつて來ると語つた。ジョンソンは何か自分の物思ひに耽つてゐるやうに見受けられたので、エドワーズ氏は私の方に話しかけ田舎住まひの楽しみをいろ／＼と述べた。ポズウェル、「私にはどうもそれが解せないのです。あなたのもつて居るお楽しみは半時間もしたら種切れになりさうに思はれます。」エドワーズ、「おや？ あなたは希望が實現されるのを愛しないのですか？ 私は私の草や穀物や樹が育つのを見まもつてゐるのです。例へば、今でも私はこの霜が私の果樹を傷めやしなかつたかどうか氣にかけてゐるのです。」ジョンソン、「われ／＼は彼が聴いてゐると思はなかつたのに」「そら、あんたは自分が希望と共に心配をもつてゐることが判つたらう。」——人が事物の半面のみを見る際に、彼は實によく全體を看とつた。

三人がジョンソン博士の家に着き、書齋に落ちつくと、對話は心ゆくばかりに進んだ。エドワーズ、「私は大學の頃あんたがわれ／＼に prodigious (物す／＼) といふ言葉を使はせ

なかつたのを覚えてみますよ。あの頃からもう（を私の方を向いて）この人は言葉遣ひがやかましくて、われ／＼はみんなこの人を恐れたものです。」ジョンソン、（エドワーズに向ひ）「長年辯護士を業としてゐるところから見ると、あんたは金持ちにちがひないと思ふ。」エドワーズ、「いゝえ。私は相當金がいりました。ですが、私には幾人も貧乏な身内が居たので、それに大分やつてしまひました。」ジョンソン、「あんたはその言葉の最も價値ある意味に於いて金持ちだつたわけだ。」エドワーズ、「ですが、私は金持ちとして死にさうもありません。」ジョンソン、「いや、全くのところ、金持ちとして死ぬより金持ちとして生きる方がまさつてゐる。」エドワーズ、「私は大學で引きつづいて研究すればよかつたと思つてゐる。」ジョンソン、「何故さう望むのかね？」エドワーズ、「さうすれば私が経験したよりもつと安樂な生活ができたらうと思ふから。私は牧師さんにもなつて、ブロッサムや、ああいふ連中のやうに裕福な生活をし氣樂にくらしたことだらう。」ジョンソン、「牧師の生活、良心的な役者のそれは氣樂なものではないよ。わしはいつも牧師のことを、自分が支へかねるほど大きい家族を抱へてゐる父親だと考へてゐる。わしは靈魂の救済よりは大審院の訴訟を引き受けた方がまじだと思ふ。いやいや、わしは牧師の生活を氣樂な生活だと羨みはしない、又、それを氣樂な生活にしてゐる牧師を羨ましいとは思はない。」

* ジョンソンは後日私に云つた、「君、彼等はわしをわしの學識の故に尊敬したのだ、但し、それは比較的すぐれてゐただけだ。君、世の中にかに學識が乏しいかは驚くべきだ。」

この時彼は全くだしぬけに立ち上がつて叫んだ、「おお！エドワーズ君！あんたのことを想ひ出した證據を云はう。わしたちがベムブルックの門の近くのエール酒店で一しよに酒を飲んだことを覚えてますか？あの時あんたは、われ等の救ひ主が水を酒に變へたことについて詩を作る課題を受けたイートンの少年が

▲水ハ神ヲ羞デラヒ見テ赤クナリヌ▼

といふたつた一行を提出して大いに感心された話をわしにした。わしは君に、わが國の王の一人で、その息子である同じく優れた王子により、後を繼がれた方に對する頌徳の詩である、キヤムデンの『かたみ』中にある、別の立派な一行を引用した――

▲我ハ驚異ヲ歌フ、陽ハ没セルニ夜ハ之ニ繼ガズ▼

エドワーズ、「ジョンソン博士、あなたは哲人です。私も一時は哲人たらうと試みたこともありました。しかし、どういふわけだか私にはわからんが、いつも陽氣な氣分が邪魔をするのです。」――バーク氏、サー・ジョシュア・レノルツ、コートネー氏、マローン氏、それから實際、私がこの話をしたすぐれた人々はそれを大へん結構な性質だといふ意見であつた。實のところ、哲學といふものは、宗教もさうだが、むづかしく嚴しいもの、少くとも非常に嚴肅ですべての陽氣さを排斥するものといふ風に、あまりに一般的に考へられてゐるのだ。

エドワーズ、「博士、私は二度結婚しましたよ。察するに、あんたは家内をもつといふことはどんなものか御存じ無いでせう。」ジョンソン、「わしは家内をもつといふことがど

んなものだか知つてゐるよ、そして（嚴かな、情けのこもつた、震へ聲で）家内を失ふのがどんなものだか知つた。——それは殆どわしの心を摧いた。」

エドワーズ、「あんたはどんな生活をしてるのですか？ 私のことを云へば、私はちやんとした食事をせずにはゐられません。それから良い葡萄酒を一ぱいやります。どうもそれが私には必要です。」ヂョンスン、「わしは今では酒はやりません。若い時分には飲んだ、それから長年の間一寸も飲まなかつた。その次に數年の間盛んに飲んだものです。」エドワーズ、「斗酒尙辭せずだつたのでせう、屹度。」ヂョンスン、「わしはそれから重い病氣にかかり、ふつつり酒を止めた。その後はもう飲み始めない。わしはどんな食物を食はうが、どんな天候であらうが、何等違つた影響をからだに感じたことはない。いろ／＼と違つた影響を感じる人もあるやうだが、わしはそんなことはない。規則的な食事についての話なら、わしは日曜日の正餐から火曜日の正餐まで断食したことがあるが別に苦にならなかつた。わしは飢ゑにしたがつて食ふのが一ばん良いと信ずる。しかし、實務についてゐる人、家族を有してゐる人は、世間並みの食事をしなければなるまい。わしは風來坊だ。この都を去つてグランド・カイロに飛んで往つたからとて、此所で居ないと騒ぐ者もなければあそこで居たと云ふ者もない。」エドワーズ、「あなたは夜食を食へませんか？」ヂョンスン、「食べない。」エドワーズ、「私は今では夜食のことを、寢床に行くために是非とも通らなければならぬ關所といつた風に感じてゐます。」

＊ ことによるとこの言葉は私自身が言ひ出したのだつたかも知れない。但しそれはいふにもエドワーズの云ひさうな言葉ではある。

ヂョンスン、「エドワーズさん、あんたは辯護士だ。辯護士は人生を實際的に知つてゐる。讀書人は常にさういふ人々と話をしなければいけない。さういふ人々は彼に缺けてゐるものをもつてゐる。」エドワーズ、「私は年をとりました。もう六十五です。」ヂョンスン、「わしは次の誕生日で六十八歳だ。さあ、あんた、水をお飲みなさい、そして百まで生きようとしたさい。」

エドワーズ氏は、全財産をベムブルック大學に遺した紳士のことを話した。ヂョンスン、「全財産を大學に遺すことがいいかどうかは、事情次第だ。わしなら大學に遺した財産の利子を親類又は友人にその存命中だけ與へることにするね。恒久的組織である大學にとつてはその金を今貰ふも二十年後に貰ふも同じことだ、わしはわしの親類又は友人をしてその金の恩恵を感じしめることを願ふね。」

この會見はヂョンスンが最も人情にあつく好意に充ちてゐる人であると思つてゐる私の意見を裏書きするものであつた。彼とは随分肌合を異にする、昔の大學の學友に對する彼のねんごろでおだやかな態度、その人の農場までわざ／＼訪問に出かけようと言ふところなどは老齡の人間には稀に見る親愛の情を示すものであつた。彼は云つた、「二人ともロンドンに四十年も住んでゐて、二人とも街をよく出歩く人間だのに一回も會はなかつたとは何と珍しい

ことだらう！」エドワーズ氏は辭去するにあつて、又も自分が老いこんだことを自覺すると述べ、ジョンソンの顔をじつと見つめ、かり云つた、「ヤング博士の詩の句に

△おお、わが同年者等よ！ 御身等自身の殘骸よ△

といふのがありますよ。」ジョンソンはそれが全然氣に入らず、我慢ならぬ態で首を振つた。エドワーズはジョンソン博士によつてこのやうに待遇される名譽を得て頗る満足した様子で歩き去つた。彼が往つてしまふや、私はジョンソンに、あの人は弱い人に過ぎないと思ふと云つた。ジョンソン、「成るほどさうだらう。ここに經驗を獲ることなしに生涯を暮らしてしまつた人がゐる。が、わしはもつと利口な人間で、思つたことを中々言はない者よりはあの人と對座したいと思ふ。彼は言はうと思ふことを何時でも心置きなく言ふ。」けれどもジョンソン博士自身は彼がそんなに口を極めて褒めた、心置きなさを決してもつてゐなかつた。ジョンソンが褒めたのは至極もつともなことで、暫くでもあれ、全くの沈黙が一座を領した時、或ひは、それと同じか、又はもつと思ひことに、會話が絶えざる努力によつて辛うじて持續される時の、退屈な空虚の居たたまらない空氣を經驗したことの無い者があらうか？

ジョンソンは曾つて私に言つた、「トム・タイアーズはわしのことを一ばんうまく云ひ表してゐる、彼はかり云つた、△先生は幽靈に似てゐます、話しかけられるまではお話しにならないから。」

先刻エドワーズ氏は私だけに向つて、ジョンソン博士は神學者・醫師・辯護士の如き職業につかれるとよかつた、と云つた。私は彼がこのことについてどう思ふかと思つてその言葉をジョンソンに傳へた。ジョンソン、「わしはさういふ職業についた方がよかつたらうに。わしは法律家になるべきだつた。」ボズウェル、「私はその方がよかつたらうとは思ひません、さうだつたらわれ／＼は『英語辭典』をもつことができなかったでせう。」ジョンソン、「しかし、その代り裁判判決録ができたらう。」ボズウェル、「それはさうですが、『辭典』を書くことのできる人は他には現れなかつたでせう。名判官は澤山現れてゐます。假りに先生が大法官となつたとしてごらん下さい。先生はいかなる大法官が曾つてなしたよりも、又將來なすであらうよりもつと博大深遠な心から、又美しい表現を以つて意見を吐かれたこととせう。しかし、事件は先生がなさるに劣らず慎重に判決されてゐるだらうと私は信じます。」ジョンソン、「さうだ。所有權も同様に確立されてゐる。」

しかしジョンソンは心のうちに氣高い野心をたゞよはせてゐた。そして疑ひもなく、彼の超絶した能力がこの偉大にして自由なる國に於いて國家最高の名譽によつて酬いられる場合の可能性を屢々空想したことであらう。サー・ウィリアム・スコットは私にかりいふ話をした。——自分はオックスフォード大學總長であつた故リッチフィールド卿が死去した折に、ジョンソンにかり云つたものであつた、「あなたが法律で身を立てなかつたのは何といふ惜

しいこととせう。あなたは大英國の大法官となり、貴族たるの名譽を得られたかも知れない。そして今ではあなたの生れ故郷の町たるリッチフィールドの爵位名が絶えてゐるから、あなたがそれをお買ひになつたかも知れない。」ジョンソンはさう云はれると大いに煩悶した模様で、怒りを帯びた口調で叫んだ、「もう時機既に去つた今時分、そんなことを云ひ出して、何故わしのことを苦しめようとするのか？」

しかし彼は他人の繁榮をかこちはしなかつた。故トマス・リーランド博士がコートネー氏に語つた話によると、エドマンド・バーク氏がビーコンスフィールド近傍にある自分の立派な屋敷と土地をジョンソンに示した時、彼は冷靜に「余ハ勿論羨マズ、寧ロ歎賞ス」*Non equidem invidio; miror magis* と云ふたさうである。

私はジョンソンが同様の羨望を感じはしなかつたかといふ疑ひを多少もつてゐる。何故ならば彼はほど現世の良き物を愛した者はなかつたから、そして彼は自分がそれを現實にもつたより極かにより多くもつ値打ちがあることを自覺せざるを得なかつたから。……

しかしジョンソンほど文學の品位に對して高い観方をした人——或ひは、それに對して當然拂ふべきだと彼が考へた尊敬を彼ほど斷乎として維持しようとした人はゐない。實社會に於ける一般的な彼の行動ぶりの他に、この點について、幾つか特色ある實例を述べることにしよう。

彼はサー・デ・シユア・レノルヅにから語つた。——曾つて彼が大勢の書齋商と正餐を共

にした時のこと、部屋が小さかつたので彼の坐つてゐた食卓の上座が燠爐のすぐ近くにあつたが、彼はその席を去つて他の書齋商をして自分より上席に坐らせる氣にならず、熱くて閉口したが到頭我慢してしまつた、と。

ゴールドスマスは例の奇抜なとぼけ方で、ある日種々雑多の人の集つた席でキャムデン卿について不平を洩らした、「僕はクレア卿の田舎の屋敷で彼に會つたが、あの人は僕が普通人でもあるやう一向僕に注意を拂はなかつた。」一座の者は大いに笑つたが、ジョンソンは立つて彼の友人を辯護した。彼は云つた、「いや／＼諸君、ゴールドスマス博士の云ひ分はもつともだ。貴族たる者はゴールドスマスの如き人に對しては進んで敬意を表すべきなのだ。わしはキャムデン卿が彼を無視したといふ事は大いに卿の徳を傷つけるものだと思ふ。」

彼は又、より興味あるものであるかも知れないが左程重大でない才能をもつてゐる人間に對して、もつと高等な知的素質にのみ與へらるべきものだとの彼の考へる尊敬が與へられるのを我慢して聽いてゐることができなかつた。私は彼にかういふ話をした——ある朝、私がギャリックの許に朝食を共にしに往つたところ、キャムデン卿と親交があるのを大へん自慢にしてゐるギャリックは私に呼びかけた、「ねえ君、——ええと、君は——その角のところでもちつぽけな法律家に會はなかつたかね？」——「いいえ、一體それは何んのことですか？」——「なにね、」とギャリックは無頓着を装ひながら、しかし心では爪先き立ちをしてゐる様子で云つた、「キャムデン卿がたつた今歸つたところなのさ。われ／＼二人

「で長いこと歩いたところなのだ。」——デョンスン、「ふむ、ギャリックは、もつともなことを云ふ。役者なんかとそんなに親しくつき合ふなんてキヤムデン卿はちつぽけた法律家さ。」

サー・デョシユア・レノルツは、デョンスンはギャリックのことを自分の所有物の如く考へてゐると云つたが眞を穿つてゐる。彼は何びとにも彼の面前でギャリックのことを貶すことも褒めることも許さず必ずそれに反対した。

.....

われ／＼は午後再びセント・クレメント寺院に行き、歸つてからウィリアムズ嬢の部屋でお茶やコーヒーを飲んだ。デムーリン夫人がお茶のテーブルの接待をした。私は彼が受難金曜日には彼の『ウォラト傳』の校正刷りさへ目にふれないのを觀察した。

印刷業者アレン氏は、既に印刷を終つて間もなく出版されることになつてゐる、農業に關する書物をもたらしした。これは大へん風變りの著作で、著者は耕したり種を蒔いたりその他の農作法について説くと共に、その他の難多な問題について自分自身の意見を混ぜ入れてゐる。彼は馬鹿げた、不敬虔な男であるらしく、その書物の中に無智と高ぶりを同時に示す、宗教に對する嘲弄を多く挟んだ。デョンスン博士は私が幾つかの節を朗讀することを許した。その一つには、自分は日曜日にも働かうと決心し、そしてそれを實行したが、幾分弱々しい良心の苛責を感じたと告白してあり、次のやうな奇抜な感想を洩らしてゐる——「余はキリスト教といふ荒野に生れたものだから、未だにその茨や棘が身にまつはりついてゐる。」

デョンスン博士はこの滑稽な喩へに吹きだしたが、一方この男の不敬虔に對して大いに怒つた。彼は云つた、「だが、批評家等は彼をして自ら首を絞らしめるだらう。」けれども彼はからも云つた、「昔は收穫の季節には日曜でも働いていいといふ特別の許しを受けることもできた。」實際、もしすべての教役者が、彼等が當然あるべきものであり、又その多くが實際ある通りのものであつたなら、宗教上の儀式を守ることに於て、この種の權能を教會に與へるといふことは賢明であり安全であらう。

四月十四日（土曜日）、私は彼と共にお茶を飲んだ。彼はキャンタベリーの故ダンカム氏を氣持のよい人であると褒めた。「彼はよくわしのところに來たものだ。わしの方ではあまり彼を求めはしなかつた。實際わしは誰に對してもこつちからあまり交はりを求めることはしなかつた。」ボズウェル、「オレリー卿との交はりはお求めになつたことと思ひます。」デョンスン、「いいや、わしは迎へが有つた時の他は彼の所に往かなかつた。」ボズウェル、「リックチャードソンは？」デョンスン、「これは出かけた、が、わしはデョーデ・サルマナザールをばん求めた。わしはよく出かけて行つて市部のエール酒店で彼とおみこしを据ゑたものだ。」

私は、彼が才能ある人との交はりを求めた、も一つの例を發見したのを述べることを喜びとする。デーンズ・バリングトン判事が『法令に關する考察』といふ名著を發表すると間もなくデョンスンはこの人物學問共にすぐれた紳士を訪れた。そして自分の名を告げてから丁

寧に云つた、「私はあなたの御著書を大きな喜びを以つて讀みました、そしてあなたともつとお近づきになりたいと存じたのです。」かういふ風にして、ジョンソンの存命中お互ひの敬意を以つて續けられた交際がはじまつたのである。

最近出た治安妨害犯人に關して彼は云つた、「當局は彼を梟し桔槔かせにかければよいのだ、さうして恥辱となるやうな罰を與へてやるのだ。」私は梟し桔槔は必ずしも恥辱を與へないと云つた。そしてそれによつて不名譽を受けなかつたと私には思はれる一紳士の例を擧げた。ジョンソン、「いや、彼は不名譽を蒙つた。あれにかけられた後は彼はふだんのやうに大口をたたいてのさばり歩くことができなくなつた。人々は梟し桔槔に立たされた人間を食事に招くことは欲しない。」

パースイ博士方でわれ／＼と正餐を共にした紳士が這入つて來た。ジョンソンはえらい禮幕でアメリカ人を罵倒した。私は彼等に味方して何んとか云ひ、又、先生がこの問題について述べられる時はいつも私は遺憾に感ずると附け加へた。彼はその時は何とも云はなかつたが大いに憤慨したものと見えた。黒雲に電氣が蓄積されつつあつて、それが後に雷となつて落ちかかつたのである。——われ／＼はロンドンに於いて自分の財産を浪費しつゝある一紳士の噂をした。私は云つた、「われ／＼は彼をそこから追ひ出さなければいけない。それには彼の友人がみんな彼と喧嘩をしてしまへばよい、さうすれば直き居たたさなくなるならう。」ジョンソン、「いや、それよりむしろ等は君を彼のところに差し向けるとしよう。もし

君に來られて、逃げ出さなかつたら、他にしようが無い。」これは恐ろしくむごい言葉で、そんなことを云ふべき理由は見あたらなかつた。後になつて私は何んであんなひどいことをおつしやつたのかと彼に訊いて見た。ジョンソン、「なぜつて、君、アメリカ人のことが君がわしを怒らしたからさ。」ボズウェル、「でも、それではなぜその場で復讐なさらなかつたのですか？」ジョンソン、「笑ひながら」「その手段がなかつたからさ。武器が手に這入るまでは打ちかかるわけにいかない。」これは正直なそして面白い告白であつた。

彼はこの晩、非常に優雅に設備された彼の應接間を私に見せた。そして云つた、「スレール夫人は、わしが君と君の奥さんとにわしの家泊るやうにと云つた話をしたら嘲つた。わしはわしの家だつて彼女の家に劣らず立派に君がたを泊らされると彼女に云はざるを得なかつた。富の傲慢といふものはどこかにはみ出すものだね。」ボズウェル、「彼女は富の傲慢と才能に對する己惚れを兩方とも少しづつ持ち合せてゐますね。」ジョンソン、「富の傲慢は有つてけならぬものだ。しかし才能に對する己惚れといふものは幾分根據がある。勿論それは御自身が居られます。」ジョンソン、「なに、わしはトリックを弄さない、眞をかけない、だけさ。」ボズウェル、「さうです。先生は六尺の大兵さいはやくです、そしておかがみにならないだけです。」

私たちは大家たいいひの家族が時としては非常な數の人員にのぼることについて語つた。私は現在

のエグリントン伯爵の父の家庭には百人もあるといふ話をした。ジョンソン博士が信じない様子なので私は勘定をはじめた。「一寸考へて見ませう、——殿様と奥方で二人。」ジョンソン、「駄目だ、二人づつ數へた日には長くてしようがない。」ボズウェル、「よろしい、それでは令息二人令嬢七人、それぐに一人づつお附きの者を加へて二十人になります。それでも五分の一になります。」ジョンソン、「全くその通りだ。二十には割合簡單に達する、しかしそれから先はさう容易ではないよ。われぐは五呎までは可成りわけなく育つ、しかし七呎まで伸びるのはさう容易ではないものだ。」

四月二十日（月曜日）、私は朝のうちに彼を自宅に見出した。二人は、下手な遣り繰りのために次第に困窮に陥りはしないかと氣づかされる或る紳士（ラングトン）の噂をした。ジョンソン、「財産を浪費するのは眼に見えぬ一千の方法によるもので、蒸發のやうなものだ。流れなら堰き止められるのだが。君は彼に忠告しなければいかん。それはほんとに不幸だ。彼が賭け事師だつたんなら、勝つ見込みもあると云へよう。商賣で破産したといふなら儲けたかも知れないわけだ。然るに彼は金を使ふほどの氣働きもなく、さうかつて儉約しやうといふ決心もないのだ。彼はそれによつて享樂するに足る程の金使ひもしない。彼は浪費の罪を犯し、吝嗇の不幸を味はつてゐる。決闘で殺されるのならば随分さういふ殺され方もある。しかし、ただ横たはつて死ぬといふのは、——傷口を灼きふさぐとか、或ひはそれを

縫ふだけの我慢がないので次第に出血して死に到る、といふのは悲しむべきことだ。」私は、この場合、そして實に殆どあらゆる場合に彼が示した想像の豊富と用語の選擇に感服して暫く言葉をと切らした。現在ドローモアの監督たるバースイ博士は巧みに云つてゐる、「ジョンソンの會話は力強く明瞭で、すべての血管や筋肉がはつきり鮮かに示されてゐる古代の彫刻に比べられる。普通の會話は下手くそな人形に似てゐる。」

四月二十五日（土曜日）、私は彼と共にサー・ジョシュア・レノルツ方で學殖ゆたかなマズグレーヴ博士、歴史家の息子であるアイルランドのリーランド辯護士、チャムリー夫人、その他數名の婦人と正餐をとつた。新しく現れた詩『くはだて』がマズグレーヴ博士によつて一同に向つて朗讀された。ジョンソン、「力が無い。その中に澤山出て來る有名な人の名前をのけたら、それは何物でもなくなつてしまふだらう。名前が詩人を引きずつてゐるので詩人が名前を引きずつてゐるのではない。」マズグレーヴ、「その時々のことを歌つた詩はいつも面白いものです。」ジョンソン、「同様に昨日絞罪に處せられた罪人たちの話も面白いものだ。」

彼は尙語つた、「『デモステネス・テラー』と呼ばれた人は（デモステネスを編纂したから）わしが知つてゐるかぎり一ばんだんまりの男で全く土偶のやうな人間であつた。わしは會つて彼も加つてゐる正餐に列したことがあつたが、はじめから終りまでを通じて彼の誇した言葉は『リッチャード』といふのだけであつた。どうして『リッチャード』とだけ云へた

ものか、中々想像に苦しむものだ。實はかりいふわけだ、ダグラス博士がザカリー・クレイ博士のことを話してゐたが、リッチャード・グレー博士が書いた何かをザカリーが書いたもののやりに云つた。そこでその誤りを正すためにテラーは（その氣取つた重々しい語勢と頷きかたを眞似しながら）「リッチャード」と云つたわけさ。」

チャムリー夫人は調子に乗つてジョンソンに向つて誇張的なお世辭の言葉を盛んに浴せかけた。彼女はジョンソンを昔から知つてゐて大へん心易い仲であつた。彼は忽ちその場の空気を氣どつて幾分ロマンスの中の主人公の口吻で答へた、「奥さん、あなたはわしに消ゆることなき月桂の冠をいただかせます。」

私たちはある婦人のアイルランドについての詩について語つた。レノルツ嬢、「先生はそれを御覽になりましたの？」ジョンソン、「いや、見ませんよ。わしは彼女の娘の一人がホレースから譯したものは見た。彼女が見せたのです。」レノルツ嬢、「どんな出来でした？」ジョンソン、「左様、若い娘さんの詩としては上等でした。——といふのは、秀れたものと比較すればゼロだが、それを書いた人としては上等だといふことです。わしはさういふやり方で詩を示されて不快を感じた。」レノルツ嬢、「けれどもそれが上等ならなぜ心から褒めてお上げにならないのでせう？」ジョンソン、「それはね、それを見せつけられた時のわしの不機嫌が未だ収まらなかつたからです。考へてごらん、見せられる前なら悪からうと良

からうと勝手です。誰だつて他人を、眞實を云つて人の感情を害するか、眞實でないことを云つて自分自身の氣持を悪くするかどうかを免れないやうな破目に陥らす權利はもつてゐない。」ボズウェル、「自分の書いたものを大家に見せ、その人の好き、又は眞實をきつばのがちよいと有ります。」ジョンソン、「ほんたうだ。だから、著者によつてその作品をどう思ふかと尋ねられた人は拷問にかけられたわけで、眞實を云はねばならぬわけはない。従つて、その云ふことは彼の意見だとは考へられない。とは云へ、とに角彼はさう云つたのでそれを取消すわけにはいかない。そこでこの著者は尻尾に空き鏝をくつつけられて皆から追ひ廻されるやうな目に遭ふと、私はジョンソン、又はレノルツ、又はマスグレーヴ、又は誰か他の善い批評家が推薦しなかつたらそれを出版はしなかつたらう」と云ひ抜けることができる。だが、儲けを目あてにしてゐる場合、その人に作品を出版するかと忠告すべきかどうかは頗るむづかしい良心上の問題だと思ふ。何故ならその人は「あなたが、ああ云はなかつたら私は金が得られたらう」と云ふかも知れないから。ところで此方も確かなこと、はわからない、自分だけの意見で公衆はまるつきり別な考へ方をするかも知れないのだから。サー・ジョシュア・レノルツ、「さういふ場合には二通りの判断をもたなければならぬ、一つは作品の眞の價値に對するもので、もう一つはその時に何が一般の嗜好に投ずるかに對するものです。」ジョンソン、「しかし、どつちについても確かなことは云へないのだ。だが

あわしは、止めさせるやうな意見を吐くことはよつぽど考へるね。ゴールドスマスの喜劇は二つとも一旦は跳ねつけられた。最初の作はギャリックにより、二番目の作はコールマンによつて。コールマンは、拜み倒されて、いや、云はば力づくでやつとそれを上場するやうに説き伏せられたのだ。彼の『ウェイクフィールドの牧師』に到つてはわし自身も大いに成功しようとは思はなかつた。それは彼の『旅人』より前に書かれ書店に賣られた、が、出版はその後だつた。書店の主人はそんなにわづかしか望みをかけてゐなかつたのだ、あれが『旅人』の出た後で賣られたのだつたら彼は二倍の稿料を得たことであらう——もつとも六十ギニーはさう悪くない値段だが。書店主はそれを賣り捌く時には、『旅人』によつて得られたゴールドスマスの名聲の利益を受けた、ゴールドスマスの方は原稿を賣る際にその利益を受けることができなかつたが。サー・ジョシュア・レノルズ、『乞食のオペラ』は文學的作品に對して人々がどんなに意見を異にするものであるかの證據を示してゐる。パークはそれに取柄がないと考へてゐます。ジョンソン、「それは或る劇場では斷はられた。が、わしは、その書き振りが別に大して優れてゐるからといふのでなく、目新しさとその作にみながつてゐる元氣と華かさの故に、それが成功すると考へたであらう。さういふ特色は常に看客の注意を惹きつけ彼等を愉快な氣分にして歸すものだから。」

.....
 慾心は或る種の性格には生れつきのものであるといふ説が出た。ジョンソン、「吝嗇家に

生れついた人はゐない、何となれば何人も生れながらに所有してはゐないのだから。すべての人は *cupidus* —— 物を得ようと欲してゐる、が、*avarus* —— 物を失ふまいと欲してはゐない。ボズウェル、「私は老シエリダン氏が甚だ巧妙に、完全な吝嗇家——物を溜めようとすといふ一念に凝りかたまつた者は幸福な人間であると主張するのを聞いたことがあります。」ジョンソン、「それは世間全體に對して異を立てるものだ、——世間は慾を張つた人間を『吝嗇家』と呼んでゐる、さういふ人間は『みじめ』だからだ。いやいや、金銭を使ひもし金銭を溜めもする人間が一ばん幸福なのだ、彼は兩方面のたのしみを味はふのだから。」

.....
 彼は云つた、「人が自分自身のことを語るのは穩當であり得ない、但し、『私はリッチモンドに行つた。』といふやうな單純な事實を語るのなら差支へない、又は、『私の身長は六呎あります。』といふやうな計量できることならよろしい。彼はリッチモンドに行つたといふことを確かに知つてゐるし、自分の身長が六呎あることも確かに知つてゐる、しかし、自分が賢いとか、何かその他の長所をもつてゐるとかいふことは確かに知り得ないのだ。それから自分自身を悪く云ふといふのもすべて遠廻はしの稱讚である。それは自分がいかに多くを棄て得るかを示すためのものである。それは自己稱讚のすべての不快さと虚偽のすべての恥辱とを兼ね具へてゐる。」ボズウェル、「時として、それは自己の缺點が看破されたのを強く意識することから發することもありませう。當人は他人が自分を押し倒すだらうといふこと

を知つてゐて、わざと自分からやんわり寢てしまつた方が得策だと考へるのです。」

四月二十八日（火曜日）、彼は此の日バオリ將軍方で正餐する約束になつてゐた。前に述べたとほり、私はこの人の家で常に上品な接待を受け、家庭的な氣安さと快適とを感じたのである。私はジョンソンを訪れ、連れ立つて貸馬車を驅つた。われ／＼は先づヘッジ・レーンの奥で降り、彼は手紙を置くために遣入つて往つた。その手紙は、彼の云ふところによると苦境にある貧しい男に善い知らせをもたらすものだからである。私はこの件について立入つて問ひ訊さなかつた。彼も時折、ボリンブルック夫人がポーブを鮮かに評して云つた、「彼はキャバツや蕪膏の（如き些事についての）政略家であつた」といふ言葉に似通つたところがあつた。彼が「わしは今日グロヴナー・スクエアで正餐する。」といふやうなことを云へば公爵と食事することを意味するのも知れなかつた。又、時には「今日はロンドンの反對のはづれで正餐する。」といふやうなことも云つた。或ひは「非常に地位の高い紳士が昨日わしを訪れた。」などとも云つた。かういふ風に彼は物事を人の想像するに任せることを好んだ。「スベテ知ラレザルコトハ偉大ニ思ハレガチナリ。」彼の友人中で私ほど思ふままに、そして私ほど醜、雲をとり除き神祕を明かにすることを敢へてした者は他に無いと私は信ずる。われ／＼はセント・チェームズ街のセント・チェームズ・ブレースの角にある有名なおもちや屋ワグマンの店で又停まつた。彼は前以てその場所を教へられたのだが、はつきりは教へられなかつたらしい。——暫く探し廻り、始めは仲々見つからなかつたのだから。

その時彼は云つた、「ただ角の店と教へるのは人をおもちやにするものだ。」彼はこれをおもちやといふ言葉の洒落にしたつもりらしかつた。彼がそんな冗談を云つて見る氣になつたのを私が見たのはこれが最初であつた。彼は暫く店の中にあつた後、私に馬車から出て来るやう迎へによこした。彼のしてゐた締め金が小さ過ぎるので一對の銀製のそれを選ぶのを手つだつてくれといふのであつた。この服裝の變化は恐らくスレール夫人の進言にもとづくものらしかつた。夫人とつき合ふやうになつてから彼の風采外貌は大いに改善された。彼は一層良い服を買つた。そして彼が決して變へることをしなかつた暗い色は金屬のボタンによつて引き立てられた。假髪もずつと良くなつた。彼等のフランス旅行中、彼はペリ製のハイカラな出來の假髪をあてがはれた。この銀の締め金を選ぶ仕事はなか／＼技巧を要した。彼はかり云ふのであつた、「わしは今流行してゐる馬鹿でかいものは御免だ、それから一對で一ギニー以上は出したくない。」それがこの仕事の原則であつた。しばらくあれこれと見た後、適當な品があてがはれた。馬車を驅つてゐる間に私は彼がしゃべりたい氣分にあるのを見出し隙かさず機會を捉へた。ボズウェル、「私は今朝リップドレーの店に参りましたが、『ジョンソンの言葉』といふ文集が大へんよく賣れたといふ話を聞かされました。』ジョンソン、『それだのに『ヘブリディーズ諸島周遊日記』は大して賣れない。』ボズウェル、『不思議です。』ジョンソン、『ほんとうだ。あの本ではわしは世間が未だ知らなかつたことをたくさん語つて置いたのに。』」

ボズウェル、「今朝私はエルド氏とチョコレートを飲みましたが、驚いたことには彼が、ス
 タッフ・オドシア州のホイッグ(譯者註、この州ではトリー黨の勢力が圧倒的であつた)であることを發
 見しました、——さういふものが存在するとは思ひがけませんでした。」ジョンソン、「どこ
 の國にも悪黨はゐるよ。」ボズウェル、「エルドは、トリー黨といふのは宣誓拒絶僧徒
(譯者註、一六八八年の名譽革命後ウイリアム三世と皇后メリーに服従の宣誓を拒む)とお祖母さんの間に出來た子だと云つてゐます。」
 ジョンソン、「わしはいつも、最初のホイッグ黨は悪魔だと云つてゐる。」ボズウェル、「確かにさ
 りです。悪魔は從屬制度を我慢できなかつたのです。彼は權力に反抗した最初の者です——
天國にありて仕ふるは地獄に於いて君臨するに如かず」(譯者註、ミルトン「失樂園」第一卷二六三行)
 といふわけですからね。」

バオリ將軍方にはサー・デッシュア・レンホルツ、ラングトン氏、ロムバルディのゲラルディ
 侯爵、スポッティスウッドの法律事務辦理士ジョン・スポッティスウッド氏(子息の方)が
 來てゐた。此の頃、英國が侵入を蒙るかも知れぬといふ恐怖が頻りに傳はつた。それを除く
 ためにスポッティスウッド氏は、最近ダンケルクから歸つて來たフレーザー氏が、フランス
 側はわれ／＼に對して同じ恐怖を抱いてゐる、と云つた話をした。ジョンソン、「かういふ
 工合にお互の臆病がわれ／＼を平和に保つのだ。もし人類の半分が勇敢で半分が臆病者だつ
 たら、勇敢なる者は絶えず臆病者を打ち負かしつつあるだらう。全體が勇敢であつたら非常
 に不安な生活をおくることだらう。彼等は絶え間なく闘つてゐるだらうから。けれどもみん

なが臆病者だからわれ／＼は大へんうまくやつていける。」

83
 一七七八年

われ／＼は酒を飲むことについて語つた。ジョンソン、「わしは獨りぼつちの時だけ酒を
 要求する。その時は屢々それが欲しくなり屢々それを飲んだ。」スポッティスウッド、「へ
 ーえ、友だち代りにですか？」ジョンソン、「わし自身から逃れるために、わし自身を追ひ
 やるために。酒は大きな快樂を與へる、そしてすべての快樂はそれ自身善いものだ。それは
 弊害によつて帳消しされない限りは善いものだ。人が酒を禁ずべき強い理由を有することも
 あり得る、その理由が酒を飲む快樂より一層大なることもある。酒は人を自身自身に對して
 一層満足せしめる。わしはそれが彼を他人にとつて一層満足を與へるものにするとは云はぬ。
 時にはさうなることもある。ただ危険は、人が自分自身に對しては一層満足に思へてくるの
 に、他人にとつてはだん／＼多く不満を與へるやうになるかも知れぬといふ點に在る。酒は
 人に何物をも加へない。それは彼に知識も加へなければ機智も加へない。それはただ人を元
 氣づけ、彼をして一座に對する晴がましさを抑へつけてゐたものを曝け出させる。それはた
 だ、氷の中に閉ぢこめられてゐたものを動き出させるだけだ。が、そのことは善いことでも
 有り得るし、悪いことでも有り得る。」スポッティスウッド、「では先生、酒は函を開く鍵
 のやうなものですな。但しこの函は充ちてゐることもあり空つぽのこともある。」ジョンソ
 ン、「いいや君、會話が鍵なのだ。酒は函をこちあけて壞はすことのある錠前あけだ。人は
 酒なしで酒が興へるあの自信と敏活とをもち得るやうわが心を修練すべきだ。」ボズウェル、

酒に抵抗する際に出會ふ大きな困難は好意にもとづくものです。例へば、善良な、立派な人間から自分の家の酒蔵に二十年間貯へて置いた酒をひとつ飲んで頂きたいと云はれたやうな場合です。」デ・ンスン、「すべてさういふ好意云々といふやうな考へは、自分のことを他人に對して、自分が實際あるよりも一層重要な人物だと想像することから生ずるものだ。相手は自分が酒を飲まうが飲むまいが一寸も意に介しないのだ。」サー・デ・シユア・レノルツ、「暫くは意に介しますよ。」デ・ンスン、「暫く——一分間は意に介しても次の一分間には忘れてしまふ。それから善良な立派な人と云つたが、どうして君は彼が善良で立派だといふことがわかるね？ 善良で立派な人は他人に酒を飲むやうに強ひはしないよ。酒蔵に二十年間貯へた酒云々については——十人のうち三人は、何とか云はなければならぬのでさう云ふのだし、三人は二十年貯へて置いたなどと嘘をついてゐるのだし、三人は飲まれては寧ろ困るので、ただ一人ぐらゐは恐らくほんとに飲んで貰ひたがつてゐるのだらう。わしは自分の相手を喜ばすのは何事かであることを認める、そして人は自分と樂しみを共にする者を常に喜ぶものだ。が、酒を飲むことから生ずる大きな個人的快樂を放棄するに到つた人間は他の考慮などは敢へて構はぬものだ。酒を飲むことによつて他人を喜ばすことは、何等の善悪も伴はない場合に限つて何ほどか價值のあることなのだ。とは云へ、わしは立派な人間の氣を悪くするのは遺憾に感ずるだらう——

へいかになだらかに流るとも一人の立派なる人をわが敵となす傾きある詩歌は呪はれて

あれ」

ボズウエル、「さういふ泉——いや水は呪はれあれ、ですわね。」デ・ンスン、「だが、われわれが酒を飲むとか、その他何事でもあれ、自分が加はつた一座の意を迎へるやうなことをしなければならぬとしたら何と辛いことだらうぢやないか。」ラングトン、「その分で行けば巾着切りの仲間にも加はらなければならぬことになる。」デ・ンスン、「さうだ。だが、われわれは酒に對して認めるところは認めなければならぬ。」それが有してゐる力は認めねばならぬ。人をして自分に對して満足せしめるといふのは、ほんとうに、大したことなのだ——

へモシワレラ國々ヲ欲スルナラバ、モシ互ニ生キルヲ欲スルナラバ」

私自身も此の頃はデ・ンサンの勸めによつて試験的に水だけを飲んでゐた。デ・ンスン、「ボズウエルはサー・デ・シユアより勇敢な論客だ、彼は酒の助けをかりないで酒のために辯じてゐる、サー・デ・シユアはその助けをかりてゐる。」サー・デ・シユア・レノルツ、「けれども、相手を喜ばさうといふのは強力な動機です。」デ・ンスン、「水だけ飲んでゐる彼は酒を飲んだ者はみんな酔つてゐると見做し」「わしはもう君と議論しない。君はだいたい過ぎましたよ。」サー・デ・シユア、「私があなたにそんな言葉を吐くやうにし向けたとすればさうなんでせう。」デ・ンスン、「神妙に、そして確かに顔を赤らめたやうに私は見受けた」「いや、怒らないでもらひたい、君の氣に障るやうなことを云ふつもりはなかつたのだ。」サー・デ・シユア、「はじめは私は酒の味がいやだつたのです。しかし、他の人並

有名なラッド夫人の話が出た。ジョンソン、「十五年前だつたらわしは彼女に會ひに往つたらう。」スポットイスウッド、「彼女が今より十五歳若いからですか？」ジョンソン、「さうではない、近頃はあらゆることを新聞に出すといふ悪い癖ができたからだ。」

四月二十九日(水曜日)、私は彼と、アラン・ラムゼー氏方で正餐を共にした。そこにはピニング卿、歴史家のロバートソン博士、サー・ジョシア・レノルツ、及び提督未亡人で現在のファルマス子爵の母堂たるボスコリーエン夫人が見えた。この夫人を稱揚することが私として僭越でないならば、私は今までに知り合ふ光榮を得たあらゆる婦人のうちで彼女の態度は最も氣持のよいものであり、その會話は最も立派なものであると申したい。ジョンソンが来る前にわれ／＼はだいぶ彼の噂をした。ラムゼーは、自分はいつも彼が大へん鄭重な人間であると思受けてゐる、そして心から大きな尊敬を以つて彼に對してゐると云つた。私は、自分は彼を崇拜してゐると云つた。ロバートソン、「だが、あなたがたの或る者は彼をそんなふよ。彼を崇拜するのはよくない。誰でも人を崇拜なんかするものではない。」ボズウェル、「でも、私は崇拜せざるを得ない。彼はそれ程他の人よりすぐれてゐるのです。」ロバートソン、「批評と、それから座談の機智に於いては彼は疑ひもなくすぐれてゐる。しかし他の點では他人よりすぐれてはゐない。彼は何でも信じる、そして英國教會に關係したことから最も細かい事柄でも躍起になつて辯護しようとする。」ボズウェル、「嘘は云ひません、

博士、あなたはその點で大へん間違つてゐますよ。差し向ひで靜かに語りあつて見れば、彼の物の考へ方は極めて自由ですよ。」ロバートソン、「彼と私はいつても大へんなごやかなのだ。私が彼と初めて會つたのは或る晩のことで場所はストレーアンの所だつた。丁度彼はアダム・スミスと口喧嘩をしたところで、彼があまり詰いことを云ふのでストレーアンはスミスの去つた後で彼をたしなめ、もうぢき私が來ることになつてゐるが私に對しても同じやうな振舞をしはしないかと思ふと心配だと彼に告げた。ジョンソンは云つた「いや、いや、そんなことはない。ロバートソンとわしはうまく行くと保證する。」さういふわけで、その晩ぢうなことは私に對してやさしく氣嫌がよく丁寧であつた。そしてその後會ふたびごとに同じことであつた。だから私は、(と笑ひながら)彼から良い待遇を受けるのは大いにスミスのお蔭があるのだとよく話すのだ。」ボズウェル、「彼の推理力は強力です、それから彼は人の性格を描く特殊な術をもつてゐます、それは善い肖像画を描くことと同様、なか／＼得難いものです。」サー・ジョシア・レノルツ、「この點では彼は疑ひもなく大したものだ。しかし彼は自分の描く性格を目立たしめるために誇張をする、そして善い方も悪い方も、人々がほんともつてゐる以上をもたせてしまふ。」

われ／＼がそんなに氣輕に噂しあつてゐた本人があらはれるや否や、われ／＼は學校に校長先生が這入つて來たやうにみんな靜かになつてしまつた。そして匆々にいろ／＼と御馳走の並んでゐる食卓に坐りこんだ。さういふ御馳走は彼を好い機嫌にするのに少なからず役立

つたのである。

ロバートスン博士は或る貴族「クライヴ卿」の性格についていろ／＼と述べた。その人はこの世に生れ出た人のうちで最も強い心をもつた人の一人であること、人中に出た時彼の知的活力を呼び起こす事柄が無い間は全く無精げに坐つてゐるが、一旦何か重要な問題、例へばフランスの侵入に對していかにこの國を防禦すべきかといふやうな問題がはじめられると忽ち奮ひ立つて最も力強い能力と活氣とを以つて彼の非凡な才智を示すといふことを述べた。ジョンソン、「しかしこの人はわれとわが咽喉をかき切つた。眞に強くすこやかな心は大きな事も小さな事も同じやうに取り入れることのできる心だ。ところでわしは、プロシヤ國王「フレデリック大王」はこれ／＼の年に仕入れたこれ／＼の酒を一と壺もつて來い、それは酒藏のこれ／＼の隅に置いてある。」と云ふと聞いてゐる。わしは、人は偉大な事に對しては偉大でささやかな事に對しては氣が利いてゐるといふ風にあらまほしいと思ふナ。」彼は後刻われ／＼だけになつた時から云つた、「ロバートスンは馬鹿にロマンティックな氣分になつて、知りもしない人間のことを語つた。しかしわしはプロシヤ國王をもち出して彼をぶつ倒してやつた。」私は云つた、「さうでしたわ、先生は彼の頭に一本壺をぶつけなさいました。」

.....

翌四月三十日（木曜日）、私は彼が獨りで在宅してゐるのを見出した。ジョンソン、「どうだね、ラムゼーはわれ／＼に素晴らしい正登を與へたぢやないか。わしはラムゼーが好きだ。ラムゼーの話以上に教訓と知識と優雅さとを含んでゐる會話は見出されないよ。」ボズウェル、「ラムゼーについて感心することはいつも相變らず若々しいことです。」ジョンソン、「さう、それは感心すべきことだ。わしはわしの會話に老人らしいところが一寸もないといふ、この點を自慢にしてゐるのだ。わしは今六十八だが、さういふところは二十八の時同様に見られない。」ボズウェル、「しかし先生、老年といふものも知りたいとお思ひになりませんか？ 老年になつたことのない者は人生の全體を知つてゐるとは云へません。老年もその一つの部分ですからね。」ジョンソン、「一體君の云つてゐることはどういふ意味なんだね？」ボズウェル、「私はスフィンクスの云つたこと（譯者註、ギリシア神話でスフィンクスが、初めといふ謎をかけたところテーベ王エディプスが人問と解いた）を指してゐるのです——朝あり、晝あり、晩あることをです。私は朝や晝ばかりでなく晩をも知りたいたいです。」ジョンソン、「何んだつて？ 老年の不幸はどんな感じがするものか知りたいのだつて？ 君は痛風をもちたいのか？ 老衰をもちたいのか？」——彼が熱して來るのを見て私はそれ以上議論したくなかつた。しかし私は私の説が正しいと信じてゐた。私は然るべき歳月を経たならばネスター（譯者註、ギリシアの老將）に人々のうちの長老になりたい。そして、二十八歳の者の會話と六十八歳の者のそれには幾分の相違があるべきだ。嚴肅な繪は派手であつてはならぬ。世には落ちついた、おごそか

な、おだやかな老年が有る。ジョンソン、「スレール夫人のお母さんは大へんわしを喜ばせたことを云つた。或る牧師が自分の住んでゐる田舎に社交が無いことを嘆じて云つた、（譯者註、スレール夫人の母を指す）みんなは仔牝牛の話ばかりしてゐます。」とソールズベリー夫人（譯者註、スレール夫人の母を指す）は云つた、（譯者註、スレール夫人の母を指す）でも、ジョンソンさんだつたら仔牝牛の話ができるやうお學びになりませうよ。」その意味は、わしはいかなる境遇に置かれても何とからまくやつて往く人間だといふのだ。」彼は附け加へた、「わしは自分のことを大へん鄭重な人だと思つてゐる。」

五月二日（土曜日）、私は彼とサー・ジョシュア・レノルツ方で正餐を共にしたが、それは大へん大きな集りで會話も盛んに行はれた。が、どういふ事情からか思ひ出せないが、私はその時の記録を少しももつてゐない。但し、何んでもその時はジョンソン黨の人でない者も幾人か居て、その爲に彼はいつも程重んぜられなかつたので不機嫌になつた。そして私が何か彼を怒らすやうな仕打ちをしたと思ひこんで大へん亂暴な攻撃を私に加へたので私もむしやくしやして腹が立つた。かういふ連中に、彼は最も仲のよい友人に對しても横暴で酷い扱ひをするといふ想像を増大せしむる機會を與へたからである。私は大いに感情を害し、膝りを傷つけられたので一週間も彼から遠ざかつた。そして運好く出會つて仲直りをする事ができなかつたら、恐らくもつとずつと長い間遠のいてゐたか、或ひはそのまゝ彼に會はずに私はスコットランドに歸つてしまつたことだらう。交友關係といふものはさういふ不幸な運命に立ち到りがちなものである。

五月八日（金曜日）、私はラングトン氏方で彼と正餐を共にした。私は控へ目に沈黙してゐたが、彼はそれを認めたらしく、又その理由を思ひ出したかと思はれた。正餐の後、ラングトン氏が部屋から呼び出されてわれ／＼だけになつた時彼は私の方に椅子を近寄せ、氣嫌を取るやうな丁寧な口調で云つた、「やあ、その後どうですかね？」ボズウェル、「先生はこの前サー・ジョシュア・レノルツの所で、私の氣持を大へん亂すやうな振舞をなさいました。御承知の通り私は誰にも劣らず先生のことを敬愛致してゐますし、先生のためなら世界の涯まで往くことも厭はないのです。その私をそんな風に——」彼は私が彼の言はうとしたことを遮つたと主張したが、私はそんなことはなかつたと保證し、尙つづけた——「ですが、どうして先生のことにも私のことも愛さない連中の前で私にあんな扱ひ方をなさるのでありますか？」ジョンソン、「いや、わしが悪かつた。君の氣の済むやうどんな事でもして償ひをしよう。」ボズウェル、「私は今日サー・ジョシュアが、先生は時々私のことを手玉に取るよ云つたので彼にかう云つたのです、（譯者註、スレール夫人の母を指す）僕はあの人か友人ばかりの席でなら、何回僕を投げ上げやうがどんなに高く投げやうがかまはぬ、柔い地面に落ちるのだからだ。しかし石の上に着ちるのは厭だね——敵がある場合はそれと同じことなのだ。」——これは自分でも相當うまい諭へだと思つてゐるのです。」ジョンソン、「それはわしが今迄に聞いたうちで最もうまい諭への一つだよ。」

眞實のところ、どんな場合にも彼が加へた傷には、誰か他人の手からの惡意ある注入によ

つて刺戟されない限りは何の毒も無いのであつた。われ／＼は忽ち以前と同様に打ち解け、私たちの友人の一人の馬鹿げた、しかし罪の無い癖を一しよに大いに笑つた。ボズウェル、
 ●「先生は、人のことをその面前で笑ふのは常にいけないことだと思ひですか？」ジョンソン、「それは君、相手と事によりけりだ。相手がつまらぬ人間で事柄がつまらぬことなら差支へなからう。何にも價值あるものを彼から奪ふわけぢやないから。」

.....
 ラングトン氏が、アディソンの逸話として、彼が自分の筆の力と辯舌の力とを區別して「私は懐ろには九ベンスしか持つてゐない、しかし千磅を銀行から引き出すことができる。」と云つた話を繰り返した。ジョンソン、「彼はその云ひ分を即席に云つたのぢやないのだ。前以つてさう云はうと準備して置いたのだ。」ラングトン、「私の方を振り向きながら」「穿つた觀察だね。泥棒をつかまへるには泥棒を使へだね。」

.....
 五月九日（土曜日）、われ／＼は昔の慣らしに従つて二人だけで「マイター」で食事しようといふ目的を果した。かういつた場合、ウィリアムズ嬢に對するささやかながら深切な心遣ひの例があるのでそれを書き洩らしてはなるまい。彼女を獨りで食事するやうに残して出かける前に、彼は彼女に鶏肉や脾臓の料理又はその他の一寸した御馳走で好みのものを言はせ、後で料理店からすつかり料理して手落ちなく届けさせるやうにしたのである。

.....
 五月十二日（火曜日）、私はマーチモント伯爵邸に伺候し、ジョンソン博士がその傳記を書かうとかかつてゐるポープに關する知識を閣下が博士にお頒ち下さるかどうか伺つた。ジョンソンはこの貴族から何等か深切を受けようといふやうな希望は敢へて抱いてゐなかつた。即ち、私がポープに關して彼にいろ／＼話してあげることが出来る人の一人としてマーチモント卿の名前を挙げると、彼はかう云つた、「あの人は、わしには何にも話してくれまい。」私は伯爵とお近付きになるの光榮を有したので、ジョンソンからの依頼は無いが、私獨りの考へで願ひして見たのである。閣下は最も鄭重で深切なる態度をお示しになり、ポープについて想ひ出せることは残らず話さうと約束され、懇切にも次のやうに云はれた、「ジョンソン博士に、私が彼を大いに尊敬して居り、私でできることならどの様にしてなりとその尊敬を實地に示す氣があることを傳へて下さい。私は明日市部シチベに行くことになつてゐるが歸りに彼の家を訪れて見よう。」しかし閣下はかう質問された、「彼は『詩人傳』を公平な立場で書くだらうか？ 彼は『ホイッグ黨』と『トリー黨』をはじめて辭典に入れた人だ。ところであなたは『國產稅』についての彼の定義をどうお思ひですか？ あなたは『漏洩』トランスパイラするといふ言葉に對する彼の毛嫌ひの由來を御存じか？」さう云つて二つ折り版の『辭典』を取り下ろして、その言葉の第二の意義についてかういふ非難が加へてあるのを示した——
 「『秘密が洩れて露れること、近頃必要も無いのにフランスから新たにもたらされたる意義。』

とある。實は、チャコバイト黨を去つたボリンブルック卿がはじめてこの言葉を使つたので、それを貶しつけなければ氣が濟まなかつたのです。それを不必要だといふからには、彼はどらういふ言葉を代りに使つたらいいか示すべきでせう。」私は後日ジョンソンにこの質問を發した。彼は云つた、「それは、^{外に洩れる}さ。」ボズウェル、「それでは言葉が二つになりません。」ジョンソン、「そんなことを云つたらきりが無い。そんなら老年に對してだつて一つの言葉を出せと主張していいわけだ。」ボズウェル、「よろしい、^{セネクトゥス}」(譯者註、その意味のラテ)です。」ジョンソン、「いいや、他の國語にそれがあつたらとて、英語でも一つのことを表はすのには一つの言葉がなければならぬと主張するのは國語を變へてしまふことを意味する。」

私はこの機會を利用して伯爵からポープ及びボリンブルック卿に關するいろいろな話を聞くことを得た。そして私はそれを書き留めて置いた。

私はマーチモント卿にジョンソンの『ポープ傳』を校閲なさるが宜しいと勧めた。卿は云はれた、「あなたは私を危険な立場に置かうとするのですね。彼が書籍商オズボーンを殴り倒したことは御承知でせう。」

ジョンソン自身好みの著作である『詩人傳』のために材料及び立派な援助を手に入れてあげようとした私の自發的援助が成功したので得意になつた私は、目下ジョンソンが泊つてゐるストレッタムのスレール氏方に馳せつけ、明日彼に在宅して貰はうとした。そこで正餐の

後、彼がこの吉報を最も上機嫌で受け容れさうな頃合を見はからつて私は勢こんで云つた、

「先生、私は今日先生のために一と働きしました。私はマーチモント卿に會つて來ました。

卿は先生に對して自分が大なる尊敬を抱いてゐるといふこと、明日午後一時に先生を訪れてポープについて知つてゐることをすつかりお話ししようといふことを、私から先生へお傳へしてくれと云はれました。」——こゝで私は言葉を途切らした、彼がこの知らせで喜び、私の奔走を多とし、貴顯からのかういふ申し出を早速受けることだらうと十分豫期しながら。ところが、私があんまり喜び過ぎた様子を示して彼の不機嫌を買つたものか、或ひは私が彼のことを無理にマーチモント卿に頼みこみ、彼をあまりに卑下したのではないかといふ疑念を催したためか、或ひは又、運の悪い不機嫌の發作以上の何物かが有つたのか、私には判らないが、いづれにもせよ、驚いたことに結果はかうであつた、——ジョンソン、「わしは明日ロンドンに歸らない。わしはポープについて知りたいとは思はない。」スレール夫人、「私と同様に驚き、すこし怒つて」先生、ボズウェルさんは、先生が『ポープ傳』を書かうとしてゐらつしやるから屹度彼についてお知りになりたいたらうと思つてなされたことと私は思ひますわ。」ジョンソン、「知りたい！それはさうですよ。知識が雨のやうに天から降つて來たら、わしは手をさし出すよ。しかしわざ／＼それを求める面倒はとりたくない。」この場合彼と議論しても甲斐が無かつた。暫くたつて彼は云つた、「マーチモント卿がわしを訪ね、それからわしがマーチモント卿を訪れることにしよう。」スレール夫人は彼の譯の

判らぬ氣紛れを心許無がつた。そして私に、もし私がマーチモント卿と彼との會見を實現するやう配慮しなかつたら、それは決して行はれないだらう、さうしたら甚だ残念であると云つた。私は伯爵宛てに、ジョンソン博士は明日ロンドンに歸るわけに參らず、しかし何れ彼の方からお伺ひするの光榮を有するであらうといふことを述べた一札をジョンソンの家に置いておくやうに送つた。私は、この偉大にして善良なる人が體質に瀆んだ或る病的なものからして時折りそれと闘ふことになつた、あの不幸な氣分の一例としてこの事件をはつきり記して置く。讀者諸君のうち最も人を非難する傾きのある人は、自分が劇しい齒の痛みをもつとか、向ふ脛をひどく打つたとかいふ場合に何か質問を受けたと想像して見たまへ、正直な人ならば、ジョンソンが時折りいら／＼した氣分——それはたしかに堪らないものであることを私は保證する——にある時に與へた返答ぶりを意外としないであらう。しかし、彼は自分が企てたいかなる著作に對しても些かたりとも投げやりであるとか、又は彼が一般にこのやうに癩癩もちであるとか、いふやうな間違つた推測を下してはならない。後でわかる通り次の年彼はマーチモント卿の邸宅で卿と甚だ愉快な會見をもつたのである。而して此の日の午後も間もなく彼は不機嫌を忘れてしまひ、ふだんと同じやうに話しはじめたのである。

離婚の話となつて私はオセロ(譯者註、シエークスピアの悲劇「オセロ」の主人公)の説は差支へないかどうか訊いた——

「盗まれた者が盗まれたと感じない場合彼に知らずな、さうすれば結局盗まれないこ

とになる。」

ジョンソン博士とスレール夫人は共に之に反對した。ジョンソン、「からいふ傷害を知らないであるのを欲するかどうか、誰にでも訊いて見るがいい。」ボズウェル、「先生は友人に告げて彼を不幸にしますか？」ジョンソン、「多分わしはさうしないだらう。しかしそれは自分の立場を考へた用心からであらう。人は自分の父親には告げるだらう。」ボズウェル、「ええ。贖者の子に家の財産の分け前にあづかられては困りますからね。」スレール夫人、「兄弟にも告げるでせう。」ボズウェル、「兄には確かに告げます。」ジョンソン、「友人が娼婦を娶るのを防ぐためには、女の醜聞を彼に告げるだらう。又、同じ理由から、友人が結婚してゐる場合には欺瞞の結果を防ぐために彼の妻の不貞を告げるといふことになる。友人に告げないことは信頼を裏切ることになる。」ボズウェル、「あなたは——氏に告げますか？」(美しい女と結婚してゐるが、さういふ悲しむべき恥辱を蒙る懼れは全然無い或る紳士の名を挙げたのだ。)ジョンソン、「いや、告げない。無駄だからだ。彼はひどく物臭だから議會に出かけて往つて離婚の手つづきを置まないだらう。」

彼はわれ／＼の友人の一人について云つた、「彼は楽しみもしないで、破産に陥らうとしてゐる。賭博で負ける者や、法廷で金を使ひはたす者は、自分の身代をより太く(私はこの言葉を確かにおぼえてゐる、彼はよくそれを使つた。)しようとして減らしてしまふのだ。だが、吝嗇の泥沼を歩いて往つて破産の深淵に到るのは悲しいことだ。費澤の花園を歩いて

往くのだったらいゝがね。」

ストレッタムの食堂の壁に貼られた多くの版畫の一つにホッガースの『近代的夜半の會話』(譯者註、十一人の)があつた。私はこの狂ほしい一群のうち一きは目立つ牧師フォードについて彼がどういふことを知つてゐるかと思つた。ジョンソン、「彼はわしの知り合ひであり、わしの母の甥にあたる親戚であつた。彼は田舎で扶持附の僧職を買つた、但し聖職賣買といふやうな意味のものではなかつた。わしは田舎で彼に會つたことがあるだけだつた。彼は非常な才能を具へた人であり、又大へん演奏者であると思つてゐた。しかし不信心者だとは聞いたことが無い。」ボズウェル、「その人の幽霊が出たといふ噂が有つたのぢやありませんか？」ジョンソン、「さう信ぜられた。——フォードが其所で死んだ浴堂ハヤムスの給仕人が暫くよそに往つてゐたがフォードが死んだとは知らずに歸つて來た。彼が地下室に降りて往つた時フォードに出あつた——といふ話なのだ。もう一遍降りた時又もや出あつた。上にあがつてから彼は家の者の誰彼に一體フォードはあそこで何をしてゐるのだらうと訊いた。みんなフォードは死んだと告げた。給仕人は熱を出し暫く寢込んだ。恢復すると彼は數名の婦人等へフォードからの言傳てをつたへねばならないと云ひ出した。どういふ言傳てか、誰々につたへるのか、は云へないと云つた。彼は出かけた、彼は跡をつけられたがセント・ポール寺院附近のどこかで見失はれた。彼は戻つて來た。そして、言傳てをつたへたと云ひ、女たちは△それではわたしたちはみんな破滅だわ」と叫んだと云つた。ベレット博士は信じ易い

たちの人ではないが、この話の眞偽を調べた結果は、打消しがたい證據があると云つた。わしの家内は浴堂ハヤムスに往つた。(其所は人が一ぱい飲みに行く所である。)彼女はこのフォードの話について聞きこむつもりで出向いたものとわしは思ふ。最初其所の人々は話したがらなかつた。しかし結局話を聞いた後、彼女はそれがほんたうであると納得して歸つて來た。確かにその男は熱を出した。そしてこの幻は熱のはじまりであつたのかも知れない。しかし、もし女たちへの言傳てとそれを受けた時の彼女等の振舞が話の通りに眞實なら、そこには超自然的な或物が有る。それは彼の言葉にかかつてゐる、その言葉の如何によつて決せられるのだ。」

一七七八年

101

ボズウェル、「禮節は生れついたものではありませんか？」ジョンソン、「何とも云へない、——生れつきのままの人といふのは存在しないからね。しかしわしは、人は教へられれば教へられるほど一層禮節ある者になると思ふね。フランス人は粗野な、しつけの無い、教へられざる民だ。フランスの或る婦人は床に唾を吐いて足でこすりつけたよ。わしがフランスに往つて爲になつたのは、我が國を一層満足に思ふことを學んだことだ。十九歳から二十四歳といふ年頃には殆ど何をやつても旅行なんかするより爲になる。旅行を、全然の虚無——何にもしないことと較べると、それは確かにより優つてゐる。しかしその數年の間に勉學するとしたら善い者はどんなに一層大きな進歩をすることだらう。成るほど、若い者が

道樂で女を追ひ廻したり悪友とつき合はなければ居られないのなら、外國でさういふことをした方が得だ。歸つたら、さういふ關係を一切断ち、本國で別人の生活をはじめて人格を作りあげ、新たに友人知己を求めることが出来るから。旅行をした人間の話題に旅行したといふことが、いかに僅かしか寄與してゐないことか！ ポークレアを見てみたまへ！」ボズウェル、「——卿はどうでせう？」ジョンソン、「わしは彼が自分の見聞を語るのには一度しか聞いたことが無い。それは、エジプトのピラミッドの一つに大きな蛇がゐたといふ話だ。」ボズウェル、「實は私も同じ話を聞かされたのです、それであの人のことを思ひ出したのでした。」

私は田舎の生活について語つた。ジョンソン、「わしが田舎に住むのだつたら、わしは人望を得ようと専心努めることはしないよ。わしはもつとよい生活をしよう、もつと幸福に。わしはわしの時間を自分の自由にして置くよ。」ボズウェル、「ですが先生、われ／＼の文學的な友人すべてから遠く離れるのは淋しいことぢやありませんか？」ジョンソン、「君はやがて、今はそんなに君を喜ばせる、かういふ會話がもう澤山になるよ。」

彼は服従の熱心な味方であつたから、上流の風儀を攻撃する世俗の口吻を常に押へようとつとめた。彼は云つた、「上流の人々は一ばん立派だ。身分高い婦人百人をとつて見れば、他の婦人百人に較べて一層善い妻であり、一層善い母であり、自分の子供たちのために自身の快樂を一層喜んで犠牲にするのを見出すだらう。ロンドン市の商賣人の婦人（商賣人の妻

をわしは指すのだ）で千磅から千五百磅までぐらゐの収入をもつてゐるのが世の中で一ばん悪い人種だ。さるで無智で、身持ちの悪いのをハイカラだと心得てゐる。百姓にも随分やぐざがゐると思ふ。貴族で人を欺くのは少ない。もし彼等がさういふことをすればそれを恥ぢる。百姓は人を欺いて恥づかしいとも思はない。彼等は欺瞞を事とする上に、更に貴族等の肉慾的悪業をも兼ね具へてゐる。百姓の間には貴族の間に於けるに劣らないほどの私通と不義が有る。」ボズウェル、「けれども、世の中の通念は、身分ある婦人の品行は下層の婦人より悪いとしてゐるやうですな。」ジョンソン、「さうだ、身分ある婦人一人の不しだらには下層の婦人幾人ものそれより一層やかましく騒がれる。それから、身分ある婦人に對する町の婦人の反感を考へなければならぬ。さういふ反感からして身分ある婦人はどんなことでもする、馬丁を寢床につれこむ、といふやうなことまで信ぜられるに到るのだ。いや／＼われしを見る限りでは、地位が高く裕福な婦人ほど教養もあるし、徳操も高い。」

彼は云つた、「チャタム卿は獨裁者であつた。彼は國家を動かす力をもつてゐた。今では少しも力が無い、すべての紀律が弛緩してゐる。」ボズウェル、「良くなる見込みは無いでせうか？」ジョンソン、「それはある、われ／＼がこの弛緩に飽きた時だ。さうなるとロンドン市は又先任順に市長を任命することにならう。」ボズウェル、「でもそれでは良い市長を得るのも悪い市長を得るのも偶然に任せることになりませんか？」ジョンソン、「さう

だ、だが、競争の害悪は、現れ得る最悪の市長のそれよりも甚だしい。おまけに、島合の民衆の選擇が當を得るだらうと考へるのは偶然が當を得るだらうと考へるより、一寸も一層もつともなことはない。」

五月十九日（火曜日）、この晩私はスコットランドに向け出發することになった。

.....

われ／＼はこの偉大にして善良なる人の深切な骨折りにはまことに敬服の他はない。殊に彼が不健康のためにどんなに悩まされてゐたか、又彼の家庭が彼が慈悲深くも自分の家の屋根の下に收容してやつた者共の絶えまないいざこざによつていかに不愉快にされてゐたかを考へて見れば尙更のことである。彼は時としては私が彼の婦人の同居人たちを戯れに彼の後宮と呼ぶのを許した。彼はスレール夫人に與へた手紙の一つの中で、彼女等及び正直なレジュットについてかう書いてゐる、「ウィリアムズはすべての者を嫌つてゐます。レジュットはデムーリンを嫌つて居り、ウィリアムズを愛してゐません。デムーリンは兩人共を嫌つてゐます。ポルは皆のうち誰一人をも愛してゐません。」

●カーマイケル傳

千七百七十九年にはジョンソンは、記憶にもせよ判断力にもせよ想像力にもせよ、すべての機能に於て、その精神の活力が少しも減退してゐないことの明かな證據を世界に示した。即ち此の年ロンドンの書店主等によつて刊行された彼の最も卓越せる英國諸詩人の傳記的批評

的序説の最初の四巻が現れたのである。残りの諸巻は千七百八十年に現れた。.....その後幾日かの間に私は數回彼と共にあつたが、私がいそがしかつたせいかわつたせいかわつたせいかわつた。彼は彼の『詩人傳』のことで攻撃されることを豫期してゐると云つた。彼は云つた、「だが、わしは注意を拂はれないよりは攻撃された方がうれしい。著作者に對して爲し得る最悪のことはその著作について沈黙することだ。都市に對して加へられる攻撃は辛いことだ。しかし兵糧攻めは猶更困る。攻撃は不成功に終るかも知れぬ。寄せ手は敵を殺すよりも一層多く殺されるかも知れぬ。しかし都市を兵糧攻めするとすれば、間違ひなく勝利が獲られる。」

私は、われ／＼の或る友人が非常に相杆格する主張と性格とを持つた諸人物と交際してゐることを述べて、彼が非常に普遍的な人物で全く世間人であると言つた。ジョンソン、「なるほど。しかし人は世間人であるあまりに世間に於て何物でもなくなるといふことも有り得る。わしはゴールドスミスの『ウェークフィールドの牧師』中に次の一節——彼は愚かにも後にそれを削つてしまつたが——があつたのを記憶してゐる、——『私は何物にも熱心になれない人を好きになれません』といふのだ。』ボズウェル、「それはいい文句です。」ジョンソン、「さうだ。もう一つ彼が除いてしまつた佳い文句が有つた、『私は若い頃には人にえらく思はれたいために、しよつちう新しい説を唱へ出したものでした。けれども私はやがてそれを

止めにしました。なぜなら、大概の場合新しいことは間違つてゐるのを発見したからです。といふのだ。」私は自分が良く思つてゐない人々と同席するのを好まない、と私が云つたのに對し、ジョンソン、「だが君は君の擇り好みをあまりに甘やかしてはいけない。さもないと君は生涯、二人差向ひの人間になつてしまふよ。」

この春のロンドンに於る滞在中は、私はジョンソンの言葉を保存することに於て不思議に怠慢であつたことを見出す。幸福にも彼の叡智と機智とを聞く機會をもつた孰れの時期にも増してさうであつた。今となつてはどうしようも無いことだ。私は手許にあるだけの斷片を提供することで満足しなければならぬ。とは云へ、私はいかに多くが失はれたかを考へて恥づかしくもあり、悔やしくもある。此の年は不作であつたといふわけではなく、ただ取り入れにあつて私が十分注意深くなかつたのだ。従つて或る場合には二三の離れ離れの斷片を示すことができるだけだ。

Juniusと署名された有名な手紙(譯者註、一七六九年より七二年に亘り英國の新聞Public Advertiserに載せられた政論で國王ジョージ三世や政府を痛烈に攻撃した)の作者が巧妙にも隠し終はさせてゐることについて彼は云つた、「わしはパークがジュニアスであると信じてゐるところだつた。わしはパーク以外からいふ手紙が書ける者を知らなかつたから。しかしパークは自發的にわしに對してそれを否定した。わしの方で彼に、君がその作者ではないかと訊いたとしたならば事情は別になる。匿名で發表したものに對してさう質問された人間はそれを否定する權利があると考へるかも知れない。」

彼は舊友のシェリダン氏が、支拂不能の債務者に關するアイルランドの議會法に於いて特に彼のために例外を與へられたといふことは、彼の國に於いて尋常ならざる尊重を加へられたものだと言つた。彼は云つた、「かういふ風に立法院によつて公けの考慮と深切との對象として擇び出されるといふのは非凡な價値のある證據である。」

三月二十九日(月曜日)、ストレッタムに於いて、朝食の際彼は、父親といふものは結婚について自分の息女たちの好みを支配する權利はない、と主張した。

三月三十一日(水曜日)、私は彼を訪問し、私が滅多に犯したことのない耽溺、即ち徹夜してカルタ遊びに過ごしたことを告白し、われながら後から考へると感服できないといふと、烈しい小言はなくて彼はおだやかに云つた、「實さい、われ／＼には後から考へて感服できることがいかに少いことだらう。」

四月一日(木曜日)、彼はデヴォンシア公爵の一人を「頑強なる義理堅さ」の故に褒めた。彼は又云つた、「ロンドンに或る人々にとつては何でもない。しかしその人のたのしみが知的である者にとつてはロンドンに如くものは無い。それからロンドンに於けるほど節約が都合よく行はれる所も他には無い。同じ金で他の何處に於けるより一層多くの物が得られる。婦人でさへさうだ。」小さな土地では身しよにやり繰りがつかぬ。裏表なく同じ姿でゐなければならぬ。ところが此所では、「婦人は臺所に肉は無くても、調度のととのつた部屋に納まり優雅な衣裳を引つかけることができる。」

● 九〇頁抄録

私は彼が友人に向つて手紙や口頭で、いかにも事も無げにそして冷静に、幸福は他の場所ではロンドンに於けるほどたやすくは見出しがたいなどと考へないやうに説き勧めてゐる事實を思ひ合せて可笑しかつた。彼自身はいかなる時でも、ロンドンが比較的と言へば地上の天國であることを知つてゐるのに、眞實のところ、洞察と注意と経験とからしてロンドンの有利さを十分に知つた人々によつて、享樂の種類の多い點ばかりでなく安樂の點から言つてもそれが他のすべての場所に優れてゐることは哲理的歡びを以て感ぜられるであらう。其所では人目や詰らぬ咎め立てに煩はされることなく生活が過ごされるといふことは、狭い環境のうるさい抑制を知つてゐる人間には何とも有難がらずには居れぬ事情である。パーク氏はきちんとした篤實な日常習慣の持ち主だから大概の人間よりは人目にこだはる必要は無ささうなものだが、曾つて私の聞いてゐるところで甚だ快活に云つた、「僕はプリストルを代表するの光榮を有するが、どうもあそこに住む氣はしないね。僕は太へんお行儀良くしなくちやなるまいからね。」ロンドンでは人は時には素晴らしい社交界に立ちまざり、時には儉ましく引き籠もつてゐても誰も何とも言はない。此所——唯此所に於いてのみ、我が家は眞に我が城であつて、そこでは人は欲する時にはいつでも、他の侵入から完全に安全であり得る。私はこの事が或る日メネル氏によつていかにも巧みに私に語られたのを決して忘れな

いであらう。彼曰く、「ロンドンの一番有利な點は人が何時でも自分の穴にそんなに近くあるといふことだ。」

彼は彼の舊知己の一人について云つた、「あの男は旅行同伴の家庭教師に非常に適してゐる。フランス語には堪能だ。操守もある。そして若い紳士が彼の舉止態度に感染する危険も無いだらう。それは恐ろしく悪いから避けられるに違ひないから。その點では彼は酔つぱらつたヘロツト(譯者註、スバルタの奴隷階級で飲酒の戒めとしてそれをわざと泥酔させて公衆に示した)の役割を演ずるだらう。」

ジョンソンが同じ人物についてから評したとある紳士が私に告げた、「君、あの男は、わしが曾つて知つた何びとにもまして最も願ひせる理解をもつてゐる。」

四月二日(金曜日)、受苦日だったので例のごとく私は朝彼を訪れた。二人は何時とは知らず、非常に立派な人物である、われ／＼の友人の一人の缺點に對していろ／＼と嘲笑をばじめたのに氣がついて、私は打切りにしやうといふつもりで、あの非常に敬虔な書物、『舌の統御』からの何か善い誠めを引用した。此の日、聖クレメント・デーンズの教區長バローズ博士によつてわれ／＼に説かれた説教の主題が、最後の日に於てはわれ／＼が「肉に於いて爲された行ひ」に對して決濟しなければならぬことが確實であるといふことだつたこと、そしてもう／＼の罪を問はるべき行爲の中に博士が悪口を算へたことも随分不思議な偶然であつた。二人が教會から出た群集の中をの／＼と歩いてゐた時、ジョンソンは私の脇を突つつき、「君は説教に氣を付けたかね？」と云つた。「はい、先生、あれはわれ／＼に打つてつけでした。」と私は云つた。しかし彼は防勢の立場を取つた。「だが君、嘲笑の感能がわれ

われに與へられてゐる、そしてそれは正當に用ひられてよいはずだ。「舌の統御の著者」はわれ／＼にすべての人間を同じやうに扱はせようとしてゐる。」

朝と晩との禮拜の合間に、彼は信心の勤行に自らを没頭させようとした。そして彼がその『祈禱と冥想』中で記してゐるとは、私が彼を妨げないやうに『パスカル冥想録』を私に與へた。私は畏敬の念を以てその書物を保存してゐる。彼が私にそれを贈呈したことは彼の自筆でそれに記されてある。そして私はその中に眞に神の慰藉を見出した。二人は午後之又教會に出かけた。

四月三日（土曜日）、私は夜、彼を訪ねたが、彼はウィリアムズ嬢の部屋で、彼女及び、後刻彼が二代目サウスウェル卿の庶子であると共に告げた人と共に坐つてゐた。食卓は、相客のためには牡蠣や黒麥酒、彼のためにはお茶といふ雑多な取合せを以つて盛られ異様な外觀を呈してゐた。私は、自身クリスチャンである或る優れた醫者が全般的の宗教的寛容のために辯じ、何びとでも他人が自分と意見を異にすることによつて少しでも傷つけられることは有り得ない、と主張するのを聞いた話をした。ジョンソン、「君、人はたつた一人ですら信仰しない者があるといふことを知れば或る程度まで傷つけられるよ。」

復活祭當日、聖ポール寺院に於ける嚴かな禮拜の後私は彼と正餐を共にした。印刷業のレン氏もやはり彼の客であつた。彼は常と變つて沈黙がちであつた。そして私はたつた一つの奇妙な事實を除いては何にも書留めて置かなかつた。それは彼の徹底した眞實尊重の節に

かけられたことだから、人間の無神禪と思ひやり無さの極端な一例として受けとられ得よう。彼が鰻を生剥ぎにしつつかつた魚屋の前を通つてゐた時、彼はその魚屋が「おとなしく寝てゐないといふので鰻を罵る」のを聞いたのである。

四月七日（水曜日）、私は彼と共にサー・ジョン・ア・レノルツ方で正餐を共にした。どろいふ顔觸れであつたか私は書留めて置かなかつた。ジョンソンは各種の酒の性質について論じた。赤葡萄酒のことを大いに輕蔑して、薄くて「人は酔心地にされる前に溺らされてしまふ」と云つた。彼は、薄れてしまつたかも知れない記憶からでなく、その場で味はふことによつて判断して貰ひたいと、それを一杯試みるやうに説きつけられた。彼は首を振つて云つた、「取るに足らぬしろ物だ！ いや諸君、クラレットは少年の飲み物だ。ポトワインは大人の飲み物だ。しかし豪傑たらうと志す人間は（ほほゑみながら）、ブランデーを飲まねばならぬ。第一にブランデーの風味は口あたりが最も佳い、それから、ブランデーは飲酒が人のために爲し得ることを最も手取り早くしてくれる。實さい、ブランデーを飲みこなすことのできる者は寥寥たりだ。それは望まらるべくして獲られたい能力だ。然しながら（と彼は語をつづけた）、すべての快樂に於て希望といふものが相當部分を占めてゐるのだから、ブランデーによると目的の達成があまりに早く来てしまふかも知れぬ。ラロレンス酒（譯者註、一種の赤葡萄酒）は最悪だと思ふ。見た目が酒だといふだけで。それは飲んでゐる時にも、飲み終つた後でも酒ではない、舌を喜ばせもしなければ精神を鼓舞もしない。」私は彼に、

二人が初めて近づきになった頃、いかに思ふ存分に彼と私が酒を酌みかはしたかを、そして彼と共に夜更かしをした後でいかに私が頭痛がしたかを彼に思ひ出させた。彼はこの話を持ち出されるのを好まず、或ひは恐らく私が大袈裟に自慢すると思つたものか、私めがけて警句の一撃を與へようと決心した。「いいや、君。君の頭を痛くしたのは酒ではなくて、わしがある中で押しこめた分別だ。」ボズウェル、「何ですつて、先生！ 分別は頭を痛くしますか？」ジョンソン、「さうさ（とはほゑみながら）、頭がそれに馴れてゐない時にはね。」冗談の醍醐味を解する者は誰だつてこれを聞いて怒ることはできない。特に長年の親しい付き合いに於いてジョンソンから尊重と十分な理解との證據を何度となく與へられた者は。私は、ジョンソンは千磅の稱讚を私に呉れてゐるのだから、時々私から一ギニーを奪ふ權利を十分もつてゐる、とよく云つたものだ。

四月八日（木曜日）、私は彼と共にアラン・ラムゼー氏方で、グレナム卿及び幾人かの他の客と正餐を共にした。われ／＼はシェークスピアの妖婆の話をした。ジョンソン、「あれ等は彼自身の創作になる人物だ。あれ等は悪意と卑賤との複合物で何の能力をももつてゐない。イタリーの魔法使ひとは全く異なる。チェームス王は彼の『妖怪學』で、『魔法使ひは悪魔を支配する、妖婆はその召使ひである。イタリーの魔法使ひは上等なる物である。』と云つてゐる。ラムゼー、「オベラの妖婆で、ドゥルアリー・レーン劇場などに出る妖婆ではないわけ。」ジョンソンは、能力といふものは、例へば金を儲けるといふやうな、狭い世界で發

揮されることもある、と云ひ、金儲けは一局所に集中されたものとはいへ、力強い才幹がなくては誰でもできない事だと思ふ、と云つた。ラムゼー、「左様、粉張き場にかけられた強い馬のやうなもので、さういふのが善く引つ張る。」

グレナム卿は、その畔りに自分の屋敷のあるロモンド湖の美しさを讀へつつも、その氣候のことを滾し、自分はそれに堪へられないと云つた。ジョンソン、「いや閣下、さうおつしやるな。あなたは十分それに堪へられるはずだ。あなたの御先祖がたはわしが算へきれぬほど長の歲月それに堪へて來られた。」これはモントローズ家の舊家であることの立派なお世辭であつた。閣下は後日、自分は氣候のことを滾す眞似をしたのだ、さもなくて、自分がほんと思つてゐるとほり自分の土地を善いやり話すとジョンソン博士がそれを攻撃するだらうからと、私に打明けた。ジョンソンはマーガレット・マクドナルド夫人に甚だ鄭重であつた。彼は云つた、「夫人、わしがスカイ島に參つた時、マーガレット夫人の馬が躓くといけないといふので、路の上から石を取りのぞくために人々が走りまはつたと聞きました。」グレナム卿はネーブルスに居るドラモンド博士を非凡の才能を具へた人として褒め、大へん自由を愛好してゐると附言した。ジョンソン、「彼は若いですが、閣下、意味ありげなほゑみを以て卿の方を見ながら）すべての若い者は自由を好む、經驗が彼等に、自分たちは自ら想像するほど自身を支配するに適してゐないといふことを納得させるまでは。われ／＼はすべてわれ／＼自身の自由に關しては異論がない。われ／＼はできるだけ多くのそれをもた

うと欲する。しかし他人の自由に關しては異論があるのだ。何となればわれ／＼がそれを獲るに比例して他人は失はなければならぬから。われ／＼は暴民がわれ／＼を支配する自由をもつことを、まさか欲しはしまいと信ずる。何時ぞやさういふことが實際起つた時は、何びとも自分の家の窓に灯りを出さずに置く自由をもたなかつた。」ラムゼー、「結局、秩序は混亂にまさる。」ジョンソン、「結局、秩序は服従による以外獲られないわけさ。」

四月十六日（金曜日）、私は、氣違ひじみた嫉妬の愛の發作のままに、或る貴族の思ひ者たるレイ嬢を射殺した不幸なるハックマン氏の裁判を傍聴して來た。ジョンソン——私は此の日若干の相客と共に彼と正餐をしたのである——は、ありし次第についての私の物語りに、特に、天の慈悲を乞ふ彼の祈りに大いに興味をそそられた。彼は嚴かな、熱のある口調で「わしは彼が慈悲を與へられるだらうことを望む。」

此の日、ジョンソンとポークレアとの間に激しい口論がもち上がった。それは當時大いに騒がれたものであるから、私は將來の誤傳をふせぐために、詳細の記述をして置くのが良からうと思ふ。

ハックマンについての話で、ジョンソンはブラックストーン判事と同様に、ハックマンが二挺のピストルを所持してゐたのは二人の人間を殺すつもりであつた證據であると論じた。ポークレア氏は言つた、「いいえ、違ひます。自殺しようとして企てた氣の利いた人間はすべて、間違ひなく一度で場の明くやりにピストルを二挺用ひてゐるのです。——卿のゴックは一挺

のピストルで自殺を企てたが、十日間も苦しみ抜いて生きてゐました。——氏はバタをつけたマップフィンを買んだが胃が悪くなるのでそれを食ふことができず、遂にピストル自殺を決心しました。そこで彼は自殺の前、もう不消化でなやむことはないと思つて朝食にバタ付きマップフィンを三つ食べました。その人は二挺の弾込めしたピストルをもつてゐました。彼が一挺で自殺を遂げた後に、一挺が彼の傍らのテーブルの上に弾込めのまま横たはつてゐるのが見出されました。「それ見たまへ（とジョンソンは勝ち誇つた様子で云つた）、その場合ピストル一挺で十分だつたぢやないか。」ポークレアは鋭く答へた、「それはたま／＼その一挺が彼を殺したからだ。」そしてその時だつたか、ほんの少し後だつたかジョンソンの勝ち誇つた言葉が癪に障つて、「それはあんたの知らないことで、私の知つてゐることだ」と附け加へた。その場の口争ひは一旦中止された。そして暫くは食事と酒とが愉快に進行した。その時急に、そしてぶつきら棒にジョンソンが叫んだ、「ポークレア君、君はどうしてへこれはあんたの知らないことで私の知つてゐることだ。なんて無遠慮な言葉を吐いたのかね？君が知つてゐなさうでわしが知つてゐることが一つある、それは君が甚だ無禮だといふことだ。」ポークレア、「あんたがはじめに無禮だつたからです。——（いつもの事だが）」括弧にした言葉はジョンソンには聞えなかつたと私は思ふ。ここで又もや休戦となつた。ジョンソンが私に語つたところでは、彼が最初、ポークレアが言つたことに一寸も注意を拂はずに暫くの間待つてゐた理由は、彼が之を怒るべきかどうか考へてゐたからであるさうだ。し

かし彼は、自分が以前に共に會食したことがない二人の世間人、即ち一人の若い貴族と一人のすぐれた旅行家とが同席してゐるのを考へて、彼等が自分たちもポークレアがしたやうに彼に對して勝手に振舞つて差支へないと思へるといけなかつたと思ひ、そこで、今のことを不問に附すまいと決心したのである、と。尙、「自分は臆病者と見做されなかつた」と云ひ添へた。それから少しして、ハックマンの氣質が激し易いといふことが話題にのぼつた。その時ジョンソンは云つた、「彼は當然その氣質を統御すべきであつた、丁度わが友人ポークレア君が先刻さうすべきであつたとほりに。」ポークレア、「私はあんたからそれを學びませう。」ジョンソン、「君、わしが君と一緒にゐる時に、君はそれを學ぶ機會を十分にわしに與へてゐる。誰だつて侮蔑を以て扱はれたくない。」ポークレア（ジョンソンに向つて鄭重にお辭儀しながら）、「先生、あなたは二十年來私を御存じです。私が他の人はどう扱つたかはいざ知らず、あなたを侮蔑を以て扱ふなんて決して有り得ないことは御承知せう。」ジョンソン、「君は必要以上、云はでものことを云つたよ。」かうして事は終つた。そしてポークレアの四輪馬車が大へん晩くまで彼を迎へに來なかつたので、ジョンソン博士と、も一人の紳士とは他の客が去つた後も長い間彼と共に坐りこんでゐた。そして彼と私とは一週間後の土曜日にポークレア方で正餐を共にした。

この嵐が鎮まつた後に、私は彼の談論のうち以下の箇條を覚えてゐる――

「わしは何時でも少年を學問に向かはせることに賛成する。それは間違ひなく善い事だか

らだ。わしはどんな英語の本でもたま／＼彼の注意を惹いたものを先づ讀ませたい。少年と書物から楽しみを獲るやうにし向けたらそれは大した手柄だからだ。彼はその内にだん／＼善い本を手に入れるだらう。」

「マレットは彼の企てたマイルバラ公爵傳の一行だつて書かなかつたと思ふ。彼は材料を摸索した。そしてそれについて考へたが、遂に彼の精神が力竭きてしまつた。さういふ風には時々自分の計畫の中で手も足も出なくなることがあるものだよ。」

「人から反對されて、話すやうに強ひられるのは随分と不愉快なことだ。成るほど、話し映えはする、しかしそれは砥石にかけられてさうなるのだからね。」

「同時代の學識者社會で或る程度まで立てられた或る紳士（フィッツハーバート氏）について彼は言つた、「彼が獲ただけの卓越は態度の立派さによるものだ。彼は彼として止むを得ざる程度以上の學問はもたなかつた。」

四月二十四日（土曜日）、私は彼と共にポークレア氏方で、サー・デヴィン・レノルズ、デューンズ（後サー・ウィリアム）、ラングトン氏、ステイヴンズ氏、バラダイス氏、ヒックンズ氏と正餐を共にした。私はウィルクス氏が私に向つて、ギャリックのことを友人をもたぬ男であると攻撃した話をした。「わしは彼の言は正しいと思ふ。Oliver Goldsmith 彼は友人たちをもつてゐるが、友人はもつてゐなかつた。ギャリックはあまりに手廣くなつてしまつて、自分の胸の中を打明けたいと思ふやうな者は一人ももつてゐなかつた。彼は人々が

しよつ中自分を喝采しようとしてゐるのを見出した、しかも何時でも同じ事に對して。そこで彼は人生を甚だしく等しなみに見たのだ。」私はこの際巨人ゴライアスの武器を振り廻して詭辯派のやうに振舞はうと試みた——「ギャリックは、あらゆる人から自分の欲しいものを獲てゐたから友人は要らなかつたのです。友人とは何ですか？ 他の人たちがさうしてくれない時に、自分を支持し、慰めてくれるものです。友情とは御承知のごとく、人生といふ嘔氣を催す飲み薬を胸に納まらず、ための口直しの一滴です。しかし飲み薬が嘔氣を催すやうなものでなく、大へん甘いものであつたら、さういふ一滴は必要がありません。」ジョンソン、「多くの人はさういふ生き方では満足できません。わしはさうありたくないと思ふ。人々は互ひの心を較べあひ、それぞれの美德をいつくしみあへるやうな親友をもつことを欲するだらう。」一座の一人は、友人をもたない人としてチェスターフィールド卿を挙げた。ジョンソン、「ギャリックには、もしあんなに手廣くなつてしまはなかつたら、友情を作り出す素材がより多くあつた。」ボズウェル、「ギャリックは純金だが薄葉に打ち展べられてゐたのです。チェスターフィールド卿の方は金びかの金屬片でした。」ジョンソン。「ギャリックは大へん善良な男だつた、彼の時代で最も愉快な男だつた。放埒に及ぶほどの氣儘を許すと考へられてゐる職業にありながら、ちやんとした生活者であつた。そして自分で儲けた金を惜しげなく與へた男だつた。彼は世に出たはじめには金錢に對して大いにかつてゐた。半給俸の官吏の息子で、よその家で四片半使ふところをどうして四片で間に合はせるか

と苦心してゐる家庭に育つたのだ。しかし金ができると彼はたいへん大まかになつた。」私は彼の『詩人傳』の中にあるギャリックに對する彼の頌め詞に批を打つことを敢てした、「先生、あなたは彼の死が諸國民の陽氣さを翳らした、とおつしやいました。」ジョンソン、「わしはそれ以上もそれ以下も云へなかつたらう。それが眞實なのだ。翳らしたので、^消たつたのではない。彼の死はたしかに翳らした。それは嵐に似てゐた。」ボズウェル、「しかし諸國民はどうでせうか？ 彼の陽氣さは彼の自國民以外に及んでゐたでせうか？」ジョンソン、「だつて君、幾分の誇張は許されなければならぬよ。それに諸國民だつて言へないことはないよ——スコットランド人を一國民として許せば、そして陽氣さをもつてゐると許せばね——實はもつてはゐないがね。君はしかし例外だよ。さあ諸君、われは愉快であるスコットランド人が一人ゐるといふことを率直に認めよう。」ボークレア、「しかし彼は頗る不自然なスコットランド人だ。」けれども私はギャリックに對する褒め言葉が誇張的で不眞實であるとの考へを變へなかつた。彼の演技は彼の死ぬ暫く前に止められてゐた。孰れにしても、彼はアイルランドではほんの少しの間、彼の俳優生活の初期に演じただけで、スコットランドでは全然演じなかつた。私は又前出の頌揚と對照して見ると賞讃の尻つぼみと思はれるところのものに抗議した、——「しかしして諸びとの害なき樂しみの貯へを減じたりい、害なき樂しみはあまり氣が抜けてゐませんか？」ジョンソン、「いや君、害なき樂しみは最高の褒め言葉なのだよ。樂しみといふのは如何がはしい意味の言葉だ。樂し

みは一般に危険で善徳に有害だ。だから、書のないところの楽しみ、純粹で夾雜物のない楽しみを供給し得ることは人間の所有し得る最偉大の能力なのだ。」これは恐らく、爲され得る最も巧妙な辯護であつたらう。が、それでも尙、私は納得がいかなかつた。

*ギリシヤ語の意味

.....
 ジョンソンは今や昨年とは變つてポーブに關する知識を手に入れようと乘氣になつたので私を通じてマーチモント卿に、彼の『詩人』傳中此の當時出版されてゐた數卷の贈物をなし、且つ卿の許に伺候する許可を願つた。彼を二回訪問したことがあるマーチモント卿は五月一日(土曜日)を私たちを迎へる日と指定して下さつた。

その朝ジョンソンはストレッタムから私のところに来、サウスオードリー街のパオリ將軍の許でコロレットを飲んだ後、二人はカーゾン街のマーチモント卿の邸宅に伺つた。卿は圖書室の戸口でわれ／＼を迎へ、大へん鄭重にジョンソンに向つて云つた、「先生、私はあなたに對して抱いてゐる私の深い尊敬をもち出して私自身に賞讃を加へるやうなことは致しません。」「ジョンソンは甚しく鄭重であつた。凡そ二時間ばかりに亘り、その間伯爵がポーブについての逸話を物語つたその會見は私が望み得たかぎり最も愉快なものであつた。二人が外に出た時私はジョンソンに向つて、卿の懇篤ぶりを考へて、もし彼が又もや伺候しなかつたなら残念に思つたらうと云つた。彼は云つた、「君、わしは伺候しないよりは二十磅

を抛つた方がましだと思つたらう。」私はストレッタムまで彼に伴ひ、そこで食事をし、夕方町に歸つた。

.....

私の讀者諸君はジョンソン博士が彼の孤獨の時間を慰めるために案出した方法のあらゆる些細の事情が物語られることを不快とされたいであらう。彼は時には化學に、時には葡萄酒に水をやりそれを剪定することに、時には小さな實驗に自らを没頭した。さういふことを見聞きして可笑しがる者は、人にはただ些細なことによつてのみ慰められる瞬間があるものだといふことを思ふべきである*。

* 彼の手稿のままの日記の二つに次の一節があるが、それは彼の物好きな細かい注意を示してある、「千七百六十

八年七月二十六日、余は小刀を砥ぐ際誤つて爪を削いだ。元から約八分の一時、先から約四分の一時のところ、

爪の成長の速度を知らんがために計り難く、全長は約八分の五時である。

.....

十月四日(月曜日)、私は彼が起床する前に彼を訪れた。彼は私を枕元に呼び寄せ、快活な青年時代に於けるほどの潑刺さを以つて、この思ひがけない會見に對する満足の情を披露した。彼は活潑に呼ばはつた、「フランク、コーヒーをもつて來い、われ／＼は素晴らしい朝食を食はう。」

このロンドン訪問の間に私は彼と何回か會見したが、それを一々區別する必要はない。私

は私の死んだ時のための私の子供たちに對する後見人たちの選定について彼に相談した。彼は云つた、「君、後見人を何人も選定したまふな。澤山居るときはお互に他人を頼りにして仕事がお留守になる。たつた一人を選ぶことを勧めたい。自分自身の名譽のために正しいことを行ふ立派な人格の人にしたまへ。位地を利用しようといふ誘惑を感じないやうに金持ちの人が良い。才能と練達とを以つて事務を裁くに慣れて居り、従つて委任の實行が億劫に感ぜられないやうな實務家にするが良い。」

「十月十日(日曜日)」ジョンソンが晩の祈禱會へ出席すると云つてゐたので、われ／＼はストレーアン氏方を七時に辭去した。二人が歩いてゐるうちに彼は足指の痛風氣味を訴へ、かう云つた、「わしは今晩祈禱會に參るまい。明日往かう。わしは日曜に教會に往かずじまひになつた時はいつでも別の日に往かうと決心する。しかし屹度さうするとはかぎらない。」これはわれ／＼の多數の者があまりに歴々經驗してゐる敬虔な決心と怠惰との間の動搖を赤裸々に示したものであつた。

ボズウェル、「先生とお付き合ひしてゐると私は常に叡智を獲つてあります。けれども多分人は自身の性格を——自身の心の限られた力を知つた後は、quid valeant humeri「彼等何程カ荷ヒ得ル?」いかに少ししか自分が擔へないかを考へて、あまりに多くの叡智をも

たうと望まない方がよいのではないでせうか?」ジョンソン、「君、君ができるだけ賢くありたまへ。人は *alios laetue, sapiens sibi*「他人ニハ愉快ヲ自己ニハ賢ク」とありたい。

海豚らの戯るるを見て喜べど

われはわが磁石と航路に心しつ。

君は朝には書齋で賢くあり、夕には料亭で仲間と陽氣になつてよい。すべての人は、他人の思はくはあまり氣にすることなく自身の叡智と自身の善徳に心を用ひるべきだ。」

どういふ譯だか解らないが、彼はあらゆる場合にアイルランドに往くことに對して嫌惡の意を表した。私はそこを周遊しようとして彼に提議したのだ。ジョンソン、「それはわしが周遊したいと欲する最後の場所だ。」ボズウェル、「先生はダブリンを御覽になりたくはないのですか?」ジョンソン、「ないね、ダブリンは首府の劣等なものに過ぎない。」ボズウェル、

「巨人の舗道」

(譯者註、アイルランドのアントリム郡の海岸にある玄武岩の奇跡)

「一見の價値がありませんか?」ジョンソン、

「一見の價値? それはあるさ。しかし一見に往く價値は無いよ。」

しかし彼はアイルランド國民に對しては深切心を有して居り、その國のさる紳士に向かつて、抜け目のない政治家どもが屢々目論んだ「合併」の問題についてかういふ風に高邁に自己の意見を開陳した。「われ／＼と合併をしたまふな。われ／＼は君たちから奪ふためにのみ君たちと合併するであらう。もしスコットランド國民が、われ／＼が彼等から奪ひ得る何

物でも有してゐたとしたら、われ／＼は彼等から奪つたことだらう。」
われ／＼の知り合の一人で、その擧止や、金をかけてゐながら身の廻りのあらゆる物が租
雑であつた男について彼は云つた、「彼に於て卑俗なる富裕が見られる。」

格別高い才能もない外國の使節で、彼の一座にあつて長い間皆の相手にされないでゐたの
が、運好くイタリ語に譯された『漫歩者』の幾つかを讀んだことを話し出し、大いにそれ
を賞讀した。これが彼を大へん喜ばせた。彼はその標題が *Il Genio errante* (譯者註、「さまよ
ひのイタリ語」と譯されてゐると述べた。(但し私はそれがもつと滑稽に *Il Vagabondo* (譯者註、「放
浪者のイタリ語」となつてゐると聞いてゐる。)) そしてこの使節がかりいふ風に自分の趣味の證據を示
したのを見出したので、彼はこの人に對してすつかり氣を入れてしまひ、どんな單純なこと
でもこの人が口を切ると早速に叫んだ、「大使はうまいことをおつしやる——」「閣下はかう
云はれる——」。それから彼は今言はれた貧弱なことを非常に力強いやり方で擴大し豊富た
らしめたので、それが何か傾聴すべき事のやりに聞こえた。その様子が列席者一同に大へん
面白かつた。そして後日何回となく愉快な冗談の種を提供した、「大使はうまいことをおつ
しやる」といふのが、あまり大して取柄もないことが云はれた時のひやかしの喝采の言葉と
なつた。

千七百八十年、年齢七十一歳、——千七百八十年には世間は彼の『詩人傳』の完成を今か
今かと待兼ねてゐた。彼はそれに彼の怠惰が骨折りを許す程度に従事してした。

.....
五月二日に私は彼に手紙を書いて、今年の秋にどこか英國の北部でもう一遍お會ひしたい
ものだと思つた。

この時から間もなく、私はラングトン氏から手紙を受取つた、そのうちからポークレア氏
とジョンソン博士の兩方に關係ある一節を抜萃することにする。

「貴兄が受けられた、ポークレア氏の死についての悲しい報知は眞實のものです。彼の才
能は、當然さうさるべきやりに相當程度に集中されたならば、彼を一と廉の人物たらしめる
底のものであるとは私がかねがね堅く信じてゐたことです。そしてこの意見は、ある程度ま
でジョンソン博士の判断に基づいて形づくられたものですが、彼の死後、ジョンソン博士が
彼の才能について言つたことを聞くに及んで益々確實に認定されました。二三日前の晩彼は
ヴィージー方に居りましたが、多くの客のうちの一入であるオグルソープ卿はポークレア氏
の死の事についてジョンソン博士に話しかけ、「われ／＼の俱樂部は前回の會合の後に大き
な損失を致しましたね。」と申しました。すると彼は「恐らく全國民が埋め合せすることの
できぬ損失です！」と答へました。博士はそれから彼の才能について語りつづけ、特に驚く
べき無造作を以つて、非常にすぐれたことを言つてのけた點を稱揚しました。彼はかう云ふ
ことを申しました、「何かうまいことを言はうとする時、それが出かかつてゐることを表す
顔付から、もしくは、うまいことを言ひ終つた時にそれが今出たことを表す顔付きから、彼

ほど自由だつた者はゐない。」數日前スレール氏方でわれ／＼が同じ話題で話してゐた時に彼はポークレア氏の驚くべき無造作加減といふ同じ問題に言及して、「あのポークレアの才能は自分の知つてゐる何びとのそれよりも羨しくなりさうな氣のしたものである。」と申されました。

彼の誕生日（九月十八日）にジョンソンはかう記録した、「余は今や余の生涯の第七十二年目を、この年齢で普通と思はれる以上の肉體の力と、大なる精神の活力を以て、始めつつある。」しかし、やはり、彼は眠られぬ夜や、怠惰な日々や、物忘れや決心の不遵守を訴へてゐる。彼は沈痛に自ら自らを表現してゐる、「確かに余は余の全生涯を余自身の全面的不贊同を以て過ごすことは致すまい。」

この年ジョンソンに會はうといふ希望が空しくなり、彼の見事な談話を私は少しも聞くことができなかったので、私はこの空白を彼の言葉の採集を挿入して埋め合せることにしよ。それは畏友ラングトン氏の御好意によるもので、同氏の深切なる御報知は本書の多くの個所にそれぞれ既に織り込まれてゐるのである。この採集中、氏自身によつて書き留められた項目は甚だ少い（氏はさういふ習慣を持つてゐなかつたので）。氏はそれを遺憾とされる、そして、ジョンソン式の機智と叡智の豊かな果實を拾ひ集めるために同氏が有した數多くの機會

を知つてゐる人々もそれを長恨事とするものである。しかし私は氏と對談してジョンソン語録の相當の集積が氏の心の中に貯へられてゐることを知つた。で、私はそれを、發掘さへすれば費された努力を十分に酬いるヘルクラネウム（譯者註、紀元七九年グ・スヴィア火山の破裂で埋没したローマの都府、近時發掘され古文書藝術品等發見）又は古代ローマの何かの遺蹟に比した。各項の眞實性は疑ふべくもない。表現法に關しては氏の面前で書き留めた私が或る程度まで責任がある。

「自分の知性が一座の人々にはあまりに力強いと考へるらしい手加減ほど人を滑稽な立場におとし入れ勝ちなものはない。」

「彼はラングトン氏に向つて氏の御兩親が肖像を畫かせたかどりか（彼は代々の家族がさうするのを正當であると考へてゐた）を尋ね、御兩親がそれに反對された由を聞いてかう云つた、（肖像を畫かせることに對する迷信的躊躇が存するといふことは、人間の心の錯雜の中の一つをなすものではないかしら。」

「ジョン・ギルバート・クーパーはかういふ話をした、——彼の『辭典』の刊行後間もなく、ギャリックはジョンソンから世人の評判を訊かれて、いろ／＼な批評があるうちで、彼がかういふ著作の品位にふさはしくない權威を引用したといふ非難があると告げ、リッチャードソンの名を擧げた。するとジョンソンは、へいや、わしはもつと酷いことをした——デヴィッド、わしは君も引用したよ。」と云つた。」

「出費のこの話で、彼は大きな商人が金の自由の利くところからと全體から觀ての有利な結果といふ打算による大局的觀點からとの兩方で、いかに氣前よく自分の金をつかふかといふ話をした。彼は言つた、*「然るに、思ひがけなく十磅を支出しなければならぬ必要が生じた時に、随分と當惑しないやうな地方紳士は殆ど見出しがたいであらう。」*

「氣嫌の好い時は彼は驚くべき正直さと廉心坦懷を以て自分自身の書いた物について語り、最も容赦なき峻嚴さを以つてそれ等を批判さへするのであつた。或る日彼の『漫歩者』の一つを読み終つてラングトン氏は彼にこの文章をどう思ふかと訊いた。彼は首を振つて答へた、*「あまりに言葉が多過ぎる。」*別の場合、さる人が田舎の或る屋敷で彼の悲劇『アイリーニ』を一座の人に読み聞かせてゐた時、彼はその部屋を出て往つた。誰かがその理由を彼に訊いたところ、答へはかうであつた、*「いや、わしはそれよりも少しましな作品だと思つてゐた。」*

「道徳的行爲のデリケートな配慮の問題の話の序でに彼はラングトン氏に言つた、*「われわれとちがつてもつと神經の太い人々は君やわしなどが尻込みするやうな多くの事をするであらう。だが君、彼等はことによるとわれ／＼より人世に於て一層大なる善事を行ふかも知れない。しかしわれ／＼はお互ひを助け合ふことを試みよう。もし過つた槍れがあつたとしたらそれを直すことができよう。二人の人間が同じ方向に過つてゐることは多分有りさうもないことだ。」*

.....

「彼はかういふ話をした、——或る時、誰とか機智を闘はせる夢を見たが、相手の方が彼より立ち優つたやうに思はれたので大いに口惜しく感じた。彼は云つた、*「ところで、われわれはここで睡眠の影響が省察の力を弱めることを認め得る。もしわしの判斷力が依然としてゐたならば、わしは、その優越によつてわしが回まされたやうに感じた、この假想の敵對者の機智も、わしが夢の中のわしとして發言してゐたと思つた機智と同様、わしによつて供給されたのだといふことを知つてゐたらうから。」*

.....

「サー・ジョン・ア・レノルツについて彼は云つた、*「レノルツほど多くの觀察を以て人生を過ごした人間をわしは知らない。」*

.....

彼は一時、ドクルーアリー・レーン劇場の樂屋に折々出入することがあつた。そこでは彼は俳優たちに大いに持て囃され、彼等に對して非常に氣樂でひよりきんであつた。彼はクライヴ嬢の喜劇的才能に大いに感服して居り、他の何びとよりも彼女と一層多く話し込んだ。彼は云つた、*「クライヴは一緒にゐるに好い相手だ、彼女はいつでも此方の言ふことを理解する。」*彼女の方では彼について云つた、*「わたしはジョンソン博士のそばに居るのが好きです。先生はいつでもわたしを面白がられます。」*ある夜、『徵兵官』が演ぜられた時、ジョンソン博士がフアークターの作品を輕蔑するだらうといふ危懼を表明したホランド氏に向つて彼は

言つた、「君、わしはフアークアーを可成り價値のあるものを書いた男だと思ふ。」

「彼の友人ギャリックは演出の監督に非常に忙しく、そのため二人の間には、かねがねギャリック氏がさうありたいといふ熱心な希望を洩らしてゐたほど頻繁な付き合いは有り得なかつた。實のところ、同氏の昔の師匠が心中に培つてゐた、演劇の價値に對する輕蔑的嚴さの中には、氏が觀客から受けた大なる喝采の後に於て氏を懊惱せしめる何物かが有つたのかも知れない。何となればジョンソンは氏 ついて、「每晚自分に感嘆する全國民を有する者は多少とも思ひ揚るだらうといふことは随分豫期できることだ。」と言つてゐるもの、舞臺上の事柄を馬鹿氣な輕視を以つて扱ふを常とした。彼は或る晩から云つた、「わしはデーヴィッドが『驚異』に出演した時、女のかぶる乗馬用頭巾をかぶつて舞臺から降りて來るのに會つた。わしはもろに彼のそばに往つたが、どうも彼は不快に感じたらしかつた。」」

「或る時はトム・デーヴィスが美々しい衣裳を着けてゐるのを見て訊いた、「ところで、君は今晩何の役をつとめたんだね。」「ロスの侍です。」（それは御承知の通り極めてつまらぬ端役である。）ジョンソンは云つた、「やあ、豪勢だね。」」

「彼は主義として怠惰を決定的に恣にするのを許さうとしなかつた、そして常にそれに對する口實を主張せんとするあらゆる企てを斥けた。一人の友人が或る日、正餐の直ぐ後に勉學するのは衛生的でないと唱へた。ジョンソン、「やあ君、そんな想像に屈服したまふな。」」

わしは生涯の或る時期に於て、朝食と正餐との間に於て勉學するのは衛生に悪いと思ひ込んだことがあるがね。」

「ボークレア氏は或る日ジョンソン博士に向つてボープの

「謙遜なるフォスター（譯者註、著名な非國教徒の説教師、一六九七年—一七五三年）をして、もし欲するならば、

十人の大監督に優りて巧みに説教せしめよ。」

の二行を吟じた上、「何故ボープはこんなことを言つたのでせう？」と訊いた。ジョンソン、「君、かう言つて置けば誰かが口惜しがらうと思つたのだよ。」」

.....

一七八〇年

「彼のトッパム・ボークレアに對する愛情は甚だ強いもので、ボークレアが遂にその死病となつた、あの重い病氣の下に呻吟してゐた時、ジョンソンは情に迫つた震へ聲で言つた、「ボークレアが助けられるのなら、わしは地軸の涯まで歩かう。」」

「非常に重大な公共的事件に關して開かれた軍法會議についての話で、彼は合理的な判決がなされるかどうか大きな疑ひを挾んだ。そしてそれに與る人員中で生涯の間に會つて自己獨りで各種の蓋然性を勘考するために一時間でも過ぎした者は居るまいと言つた。」

「ゴールドスマスが或る日、『俱樂部』へ印刷になつた一つの「詩賦」を持ち込んだ。彼はそれを他の人々と共に、各人五志の入場料を拂つて或る公けの部屋でその作者が朗讀するのを聽いて來たのであつた。一座の一人がそれを朗讀した時にジョンソン博士は言つた、「こ

れ以上大膽な言葉とこれ以上臆病な意味とが結びつけられたものは未だ曾つてあるまいと思ふ。』

「グレイの『詩賦』の話で、彼は言った、△それ等は温床で育てられた促成の植物だ。そしてそれ等は貧弱な植物だ。それ等は要するに胡瓜に過ぎない。▽席にあつた一人の紳士は一般に詩賦を作ることを詩形中の悪い種類として貶しつゝあつたが運悪くかう言った、△それ等がほん物の胡瓜であつたら、詩賦などよりまじな物でせう。▽ジョンソン、△さうさ、君、豚にはね。▽」

「彼は學識の遡得のいろ／＼の程度を區別して、二つの場合を次のやうに言ひ表はした。エリザベス女王について彼は言った、△彼女は監督に品格を與へるに足るほどの學識をもつてゐた。▽そしてトマス・デーヴィス氏についてかう言った、△君、デーヴィスは牧師として名譽となるほどの學識をもつてゐる。▽」

「彼はディオゲネス・ラエルティウスによつて記録されたアリストテレスの言葉で、學識ある人間と無い人間との間には生きてゐる人間と死んでゐる人間との間と同じほどの相異が存する、といふのを大きな熱意を以て引用するのを常とした。」

「彼がその記憶中に重要な事柄と同様に非常に些細な詰らぬことをも留めてゐたといふことは大いに特異な事である。その一例としてかういふのが有る。——リーヅ公爵の下つ端の使備人が公爵閣下の結婚を彼ができさうな稚拙な韻文でお祝ひしようと試みたやうであつ

た。この變つた作品がジョンソンに對して歌はれると、彼はそれを諧記してしまひ、非常におどけた遣り方でよくそれを繰返したものだつた。そのうちの二節は次の通りであつた——

△リーヅの公爵、御身分たかく

若く美しき方と御一緒になれば

その御婦人は何と果報だろ

リーヅの閣下とお揃ひで。

その方は立派で綺麗な物は皆もつたら

絹と縞子との極上を召されるだろ

御馬車に乗つて御散歩遊ばし

聖ゼームス廣場にお屋敷をもたれるだろ。

ジョンソンのやうな重みと品格の人物が詩に於けるそのやうな稚拙な試みを繰返すのを聞くのは非常な面白さをそそつた。が、彼は眞面目になつて、彼が朗誦した最後の一節について、それは富が興へるすべての利點を殆ど網羅してゐると言つた。」

「ある身分の高い外國人は、大英博物館を案内して貰つた時、多くの愚問を連發して人を惱ませた。彼は言つた、△それ、そこに英國人と佛蘭西人との相違がある。佛蘭西人はその事柄について何か知つて居らうが知るまいが、しよつ中しやべらなくては氣が濟まない。英

國人は言ふべきことが無い時は、無言で居るに満足してゐる。」

「彼の外國人に對する不當な輕侮は實際極端であつた。ある晩、「オールド・スローター」珈琲店で、幾人もの外國人が些細な事について聲高に語つてゐた時、彼は言つた、「あれを見るに老メネルの云つた——吾輩の見るかぎりでは外國人は馬鹿者ぞろひだ——といふ言葉は嘘ではないわ。」

「彼は、自分がひどい齒痛に苦しんでゐた時一人の佛蘭西人がかう話しかけた、と話した。——「ああ、あなたは太へん御勉強なさいますね。」と。」

「彼はよく、人はわれ／＼の目から見てもその會話に何等特別に心性の力が認められなくても、一つの職業に於て大いに卓越してゐることもあるものだと言つた。彼は言つた、「左の方へは實に少ししか目の届かない人間が右の方へならそんなに遠くまで見渡せるといふことは不思議に思へる。パークはその日常の會話が世間で彼が有してゐる一般的名譽にそむかない唯一の人間だ。何でも勝手な話題をとつて見ても彼はそれに應ずる準備がある。」

「彼は不注意を甚だ猛烈に扱き下ろすのを常としたけれども、自分では曾つて五ギニーを藏ひ込む面倒を厭うて隠して置いたが、その場所を忘れてしまひ探し出すことができなくなつたと白狀した。」

「一紳士がその兄弟をジョンソン博士に紹介したが、博士の注意を彼に惹きつけようと望むあまりに、かう言つた、「暫く御一緒になつてゐるうちに、先生は私の兄弟が大へん面白くなるのを見出だされるでせう。」ジョンソンは言つた、「宜しい、わしは待つてゐるよ。」

「ラングトン氏と彼がロチェスターにゐた時、フリーメーソンの葬列を見に往つたが、何かおごそかな音楽がフレンチ・ホーンで奏せられた。すると彼は、「わしが樂音によつて感動させられたのはこれが初めてだ。」と云ひ、「自分に與へられた感銘は憂鬱な種類のものだ」と附け加へた。ラングトン氏がその効果は結構なものであると云ふと、ジョンソン、「左様、もしそれが健康的な感情を受け入れるに都合よくするやう、心を和げるのならば、それは善いものだらう。しかしそれ自身としては憂鬱なものだから、悪いものだ。」

「ゴールドスマスは久しく、將來何時か自分の境遇がもつと氣樂になつたらば、東洋に獨特な何かの技術の知識を及ぶかぎり獲得し、そしてその技術を英國に紹介するといふ目的でアレッポに往つて見たいといふ夢のやうな企畫を抱いてゐた。この事がジョンソン博士もゐる席で話題に上ると彼は言つた、「人もあらうにゴールドスマスはさういふ風な研究に出かけるには最も不適當な男だ。何故なら、彼はわれ／＼が既に所有してゐることき技術に全く無知であるから、従つて何がわれ／＼の機械的知識の現在の蓄積への新たな獲得物になるのか判らないだらうからだ。彼はロンドンのどの街にも見かける双物研ぎ車を持つて歸り、

第三百八十三號に於ける、サー・ロッチャー・ドゥ・カヴァーリーと彼とがスプリング遊園に赴くところでこの悪態の一例を示してゐる。チヨンスンは曾つてこの種類の口喧嘩に於て素晴らしく成功したことがあつた。一人の男が彼を何か野鄙なからかひ方で攻撃したので、チヨンスンばかり言つてそれに應戦した、「おい、お前のかかあは故買だ、——淫賣屋の看板にかくれてナ。」ある晩、彼とパーク氏とラングトン氏とが一緒に落ち合つた時、アテネのタイモン（譯者註、第五世紀のアテネ人で「人間嫌ひ」として知られてゐる。抄寫劇の主人公。）の見事な罵倒が話題となつた序でにチヨンスンのこの例が引合ひに出され少くとも同等ぐらゐの傑作だと考へられた。

「チヨンスンが常日頃からパーク氏に非凡の才能を許してゐたごとく、パーク氏の方でもチヨンスンの驚くべき力量を十分に認識してゐた。ラングトン氏はこの兩名と一と晩を過ごした時のことを記憶してゐるが、その時パーク氏はその博い知識と豊かな表現を以つて解説したにちがひないやうな話題に何度も繰返して這入りかけた。ところがその度毎にチヨンスンが會話を攪つてしまつたが彼は實に堂々たる出来ばえでそれを捌いてのけた。パーク氏とラングトン氏が家路へと歩いた時に、パーク氏はチヨンスンは今晚大出来であつたと言つた。ラングトン氏も相槌を打つたが、自分はもう一人の人（パーク氏を意味してゐるのを明かに解らせながら）からもつと多くを聞いたかつたと附け加へた。するとパーク氏は言つた、「いやいや、僕は彼のためにベルを鳴らしただけで十分なのだ。」

「パークレアが彼に向つて、彼等の友人の一人が金銭を算へるのが下手であることを話す

と、チヨンスンは言つた、「やあ君、わしは金を算へることは御同様に下手だ。だが、その理由は簡單だ。わしは算へるべき金を非常に少ししかもつたことがないからだ。」

「彼は態とらしさを嫌悪してゐた。老ラングトン氏の噂で彼は君、あの様な紳士は滅多に見あたらない。文學の蘊蓄はあれ程あり、神學に於ける造詣はあれ程あり、模範的の生活はあれ程である。」と言つた上、かう附け加へた、「それに君、あの人は氣取つた振舞をしないし、身振り手振りをしないし、些細な場合に感嘆を迸らさない。彼は決して大袈裟な歡迎ぶりを示して人に抱きついたりしない。」

「どれかの心によつて認識された物として以外は何物も存在はない、といふパークレー博士の巧妙なる學説を支持するのが適當であると考へてゐる一人の紳士と一座した時のこと、その紳士が辭去しようとするときチヨンスンは言つた、「どうか君、往つてしまはなれどくれたまへ。なぜなら、われ／＼はことによると君のことを考へるのを忘れるかも知れない、さうなると君が存在しなくなるだらうから。」

「ゴールドスマスは或る日テムブルに於てチヨンスンの訪問を受けた時、彼の部屋の襦子を少々極まり悪げに辯解した、「僕は直きにもつと上等の部屋に移るはずだ。」チヨンスンは、彼ほどの才能の人物はそんな差別を氣にすることから超然たるべきことを仄めかして、彼を制止すると同時に見事なお世辭を呈した、「いや君、そんなこと、氣に懸けたまふな。」

Nil te quaesiveris extra 他「何物ヲモ君ハ要セザランだ。」

を利かなかつた。デ・ソーン博士はその際、これを大いに痛快がつてゐたやうだ。

「或る時、誰かが、サー・デ・ソニア・レノルツに對する馬鹿氣な悪口の手紙で、その中ではデ・ソーン自身もお相伴に槍玉に上つてゐるのが載つてゐる新聞を取り出した時、彼は言つた、*「さうかわれ／＼に始めから終りまで大聲で讀んで聞かせたまへ。」*聞き終ると彼は、おどけた眞面目さを以つて、そして特に誰の方に目を向けるといふことなしに、呼ばはつた、*「これだけの諷刺を浴びて、われ／＼は未だ息の根があるかな？」*」

「ゴールドスミス博士について彼は言つた、*「手にペンを持たない時の彼よりもつと愚かな者はゐないし、持つた時の彼より賢い者はゐない。」*」

「*「確かに、（と彼は言つた）もし人が自己の不幸を語るならば、その不幸中には彼にとつて不愉快でない何物かがあるのだ。純粹な不幸以外に何物も無い場合にはそれを語るはずが無いのだから。」*」

「多くの人は或る點に於て狂氣であるが、それを他人に認められることなく世の中を渡つてゆく。例へば、一人の人間が、自分は文字通り間斷なく祈りつづけなければならぬ、と想像する狂氣に囚へられたとする——若しこの狂氣が逆に動いてその人間が、祈ることは一切罪である、と考へたとすれば、それが他人に氣づかれずに續くといふことは随分有り得る

ことである。」

「*「たつた一人の人間の稱讚も大なる重要性をもつ。」*この言葉を彼は極めて眞剣に、彼の死ぬ極く間近の時、イングランドの北部の或る人から彼に宛てた手紙を讀むやうに私に頼んだ場合に言つた。私がその手紙を讀み終り、彼がその内容はどういふものかと尋ねた時、私はそれが大へん長いものであるから一々委しく述べることは彼を煩れさすかと恐れたので、只大づかみにそれは大いに彼を稱讚したものであることを彼に告げた。——すると彼は右のやうな所感を述べたのである。」

「彼は満足の態でバレットイが彼に告げたことを話した。即ち、バレットイが英語を勉強してゐた時に、『スペクテーター』中のすぐれた一篇——尊敬すべき非國教派の牧師、トーン・トンのグロウダ氏によつて書かれた四篇のうちのの一つ——に出遭ひ、それに漲る天才と精神力を見て、我が國を訪れようといふ好奇心を大いに鼓舞された、といふ話である。もしわが國の著作家等の軽い定期刊行物向きの文章がこれ程ならば、もつと重要な場合に於ける彼等の作物は實に驚くべきものがあるに違ひないと考へたからである。」

「彼は曾つてサー・デ・ソニア・レノルツ方で、街上の乞食は、良い身なりをしてゐても女よりは、たとへその風體に金持ちらしい様子が見受けられなくても、男の方から施しを求めたがるものである、と言つた。そしてその理由を、女性に見出だされる金錢に關する一層

大なる程度の注意深さに歸した。尙言葉を進め、一般に彼女等が有する、自己の境遇を向上する機會は男性たちが有するそれよりも遙かに少ないと云ひ、たま／＼男ばかりから成り立つてゐた一座を見渡しながら、かう附け加へた、△此所にゐるわれ／＼のうちで、その氣になりさへすればもつと金持ちになれると思つてゐない者は一人も無い。

千七百八十一年、年齢七十二歳、——千七百八十一年にはジョンソンはつひに彼の『詩人傳』を完成したが、それについて彼は次のやうに記してゐる、「三月の幾日頃かに自分は『詩人傳』を書き上げたが、自分は之を例の通り、愚圖々々と、しかも大急ぎで、澁々と、しかも精力と急速とを以つて仕事をして書き上げた。」これに先立つ一つの覚え書に於て彼はそれについて云つてゐる、「敬虔の念の向上に資するがごとき遣り方にて書かれてゐると希望する。」

『新編と感想』第一六〇頁

同書、第一七四頁

これはすべてのジョンソン博士の著述中で多分最も一般的に、そして最も大なる喜びを以て讀まれるであらうところの作品である。言語學と傳記とは彼の好みの攻究題目であり、彼と最も親しく生きた人々は、彼が、適當な機會があれば、あらゆる場合に、英國の詩人たちの各種の功績について、又彼等の性格の機微や、彼等がそれを彩飾するに貢獻した世の中に

於る彼等の遍歴の間の出來事について縷々語るのを楽しんだことを知つてゐる。彼の心はさういふ種類の知識に充ち満ちて居り、それが彼の記憶中で甚だ善く整頓されてゐたので、此の方面で彼が企てたことを實施するに當つては、彼の腹の中のものゝを紙の上に展べ、先づ各詩人の生涯を示し、次いでその天才と諸作品との批評的吟味を附加すれば、殆ど足りたのであつた。しかし、書き始めると、主題が次第に膨脹して、最初に目論んだやうな數頁に過ぎない各詩人への序言の代りに、彼はあらゆる點で周到で豊富で興味津々たる各詩人觀を作り出した。

私は二月に彼に手紙を書き「自由」と「必然」との難問題の再燃によつて惱まされて來たことを訴へ、且つ近いうちにロンドンで彼に再會することを望んでゐると認めた。

「ジェームス・ボズウェル様

拜啓 小生は貴君がすべてかういふ不幸といふ虚偽を卒業されたものと望んでゐました。貴君は「自由」や「必然」に何の關りがありますか？ 或ひはそれについて沈黙を守り得る程度を越えた何があるのですか？ 小生が當地で貴君に再會することを衷心より喜ぶであらうことを疑つてはいけません。何となれば小生は貴君の不幸を氣取ることを除いてはあらゆる部分を愛するからであります。

小生は遂に『詩人傳』を完了致し、一と山の草稿をすべて順序もなく貴君のために取つて置いてあります。従つてそれを整理することは長い間貴君を興がらせるでせう。わが親愛なるボズイよ、来たまへ、そしてわれ／＼はできるだけだけ歡を盡しませう。又「マイター」に往かり、そして昔の思ひ出を語らう。貴君の親愛なる

千七百八十一年三月十四日 サム・ジョンソン

三月十九日（月曜日）、私はロンドンに到着し、二十日（火曜日）にフリート街で彼が歩いてゐるのに——或ひはむしろ動いて往くのに出遭つた。なぜさういふかと言へば、彼の死の殆ど直後に發行された短い彼の傳記の中で彼の變つた歩きぶりが、かういふ風に非常に適切にそして鮮かに敘述されてあるからである。——「彼が街を歩く時には、首を絶えず揺らせることや、それに伴つて胴體を動かすことによつて、彼は足とは關係なく、その動作によつて進むやりに見えた。」彼がさういふ流儀で歩いた時に人の目を眩らせたことが屢々であつたことは容易に信ぜられるであらう。しかし彼のやうな頑丈な男をからかふことは安全ではなかつた。ラングトン氏は或る日、彼が發作的の放心状態にあつた時、突然の衝動で、一人の荷擔ぎ人の背中から荷物を撥ねのけ、しかも自分が何をしたのかを自覺することなく、どん／＼前方に歩いて往くのを見たことがある。荷擔ぎ人は大いに怒つたが、ちつと立ち止まり、甚だ真劍に相手の偉大な體軀を見守つてゐたが、結局穩かに過すのが最も賢明な策

だと觀念して、再び自分の荷物を擔ぎ上げた。

久しい間隔たつてゐた後のわれ／＼の街の上での邂逅は二人共にとつて嬉しい驚きであつた。彼は私と共に脇に逸れてフォールコン袋町に入り、私の家族のことを深切に問ひ尋ねたが、二人が違ふ道を急いでゐた際だつたので、私は翌日彼を訪ねることを約束した。彼は朝から外出する約束があると言つた。「朝早くですか？」と私は言つた。ジョンソン、「いや君、ロンドンの朝は太陽と共に往くわけではない。」

私は次の晩彼の所に伺つたが、彼は私のために保存して置いた彼の『詩人傳』の原稿の大部分を私にくれた。

私は彼の友人スレール氏を訪ねたが、目下病氣が大分悪く、スレール夫人の懇請によるものと私は想像するが、グルーヴナー・スクエアの一家屋に移轉してゐるのを見出した。私は彼が傷ましく面變りしてゐるのを見て氣の毒に感じた。

彼は私に、ジョンソン博士は最近再び酒を飲み始めたから、今回はそれを見る喜びを私が得るであらうと告げた。私がこの話をジョンソンにすると彼は言つた、「わしはこの頃時々飲むが、社交の席では飲まない。スレール方で彼と共に過した最初の晩、私は彼が大量の酒をグラスに注ぎ、ぐい／＼それを飲み乾すのを見た。彼の性格と舉止とに關するあらゆるものは力強く猛烈であつた。そこには決して中庸がなかつた。幾日も彼は食絶ちをした。四年も酒を禁じた。しかし一旦食ふとなると、貪るやうに食ふのであつた。酒を飲むとさういふ鯨

飲するのであつた。彼は禁慾を實施することができたが節慾はできなかつた。
スレール夫人と私はシェークスピアとミルトンと孰れが最も歎賞すべき男性の姿を描いたか*について議論した。私はシェークスピアの側に立ちスレール夫人はミルトンに與した。公平に兩者の言ひ分を聴いた後ジョンソンは私の意見に軍配を擧げた。

*シェークスピアは、ハムレットをして彼の父親をかう敘述せしめてゐる。——
いかなるあてなきがこの眉間に宿つたかを御覽あれ

日の神ハイピリオンの捲毛、ジョージ大神そのままの額

おびやかし命令するマース軍神に似し眼

天に口づけする峯の上に降り立ちし

使ひ神マキエリーそのままの立ち姿

世界に向つてこれこそまことの男性と

すべての神々が顔はめ印を押すかと思はるる

實にもめでたき組み合せ、姿かたちなり

ミルトンは我等の最初の親なるアダムをかういふ風に描いてゐる——

彼のうるはしく大いなる額と氣高き眼は

絶対の支配を宣せり。ハイアシンサス(譯者註、ギリシア)

のそれのごとき捲き毛は

彼の分かれし前髪より男々しく房々と垂れたれど

その幅廣き肩の下には至らず

一七八一年
私は彼にマーレーの副監督についての、パーク氏の洒落の一つを告げた。それは僕はファインズ Fines (譯者註、羊齒の意) の副監督區といふのが氣に喰はないね、いかにも不毛の地を思はせる名稱だからね。」といふのだ。私は言つた、「ヒース博士 Dr. Heath (譯者註、ヒースは) がそこに就任したら恰度いいでせう。」ジョンソンは笑つた、そして同じ種類の洒落をかりそめに弄ぶ氣分になつて、「モス博士 Dr. Moss (譯者註、モスには苔、沼、泥炭地の意あり) ではどうかね」と言つた。彼は言つた、「モンタギュー夫人はわしを除け物にした。ところで、世の中には此方では随分除け物にしたいと思つてゐても、先方によつて此方が除け物にされたくはない人々があるものだね。」彼は確かに婦人との交際を誇りとしてゐた、そして氣が向きさへすれば婦人たちに對して自分自らを大へん愉快なものにすることができた。サー・デビッド・シユア・レノルツはその點で私と同意見であつた。ギボン氏は例の嘲笑的態度でそれに異論を挾んだ。それは恐らくジョンソンが彼の醜貌を幾分の嫌厭を以て語つたことがあるのを含んでのことらしかつた。そんなことは思想人たる者が拘泥しなくてよささうに思はれるのだが。マーレー副監督は機智に富んだ言をなした、「狼狩りの猛犬を狎のやうな愛撫用の犬に變へたとすると婦人には自慢になるのだらう。」

149
選挙委員會に列席した國會議員の任務についての彼の觀念は甚だ高いものであつた。それ等の委員會の一つに列した一紳士が、ある票決の當否が會議で吟味されてゐた間、時間の一

部分を新聞を讀むことに過ごし後は眠つてしまつた、そして議長からさういふ振舞を詰られた時にその辯解として、平然と「この件については本議員は既に決心がついてゐる。」と答へた、——といふ話を聞かされて、ジョンソンは憤然たる輕蔑を以て言つた、「もしその男がそれについての討議を傾聴することなしに一つの議案について決心をするやうな、さういふ惡漢ならば、それをぬけ／＼と口に出すやうな馬鹿であつてはならないのだ。」ダッドリー・ロング（後のノース）氏は言つた、「博士はその男が惡漢であると同時に馬鹿であることを可成りはつきりと言ひ表はされたと思ふ。」

ジョンソンの教門制度に對する深い尊敬は、監督たちから最高度の謹慎を期待せしめた。彼は彼等が料亭に赴くことをさへ憤つて言つた、「監督は飲み屋には用が無いはずだ。實さ、料亭に往くことは彼にとつて不道德ではない。そして又グルーヴナー廣場で獨樂に鞭をあてて廻しても彼にとつて不道德ではないであらう。が、そんなことをしたら、わしは子供たちが彼に飛びかかつて鞭を彼の方にあてることを望む。行狀には段階がある。道徳——穩當——適正、がそれだ。監督たるものは此等のうちいづれをも破つてはならないのだ。監督は若い男が商賣女を連れ出すのに出くはすやうな家に赴くべきではない。」ボズウェル、「しかし先生、すべての料亭が女を入れるわけではありません。」ジョンソン、「確かに、どこの料亭でもちやんとした身なりの男とちやんとした身なりの女ならば入れるだらう。彼等は多分、毎晩店の戸口の邊りの街上をうろろしてゐるのを見かけてゐる女は入れないだらう。」

しかしちやんとした身なりの男はちやんとした身なりの女をロンドンのどの料亭へでも連れて往ける。料亭は酒肴を賣る、そしてそれを飲み食ひすることのできる何びとにでも賣るであらう。君のやうな、そんなことを言つたら呉服屋は如何がはしい女には絹を賣らないといふことになる。」

彼は又監督たちが無禮講の集會に赴くこと——、少くとも、彼等の存在が尊敬を受けなくなるほどそこに長坐することに不賛成を唱へた。彼は特に或る一人の監督のことについて話した。スレール夫人「ほほほ——の監督さんなどは無禮講の席では何とも思はれてゐませんわ。」ボズウェル、「監督は、自分がつきりした性格をもたず、何の重要性も認められないやうな立場に自らを置く時には、自己の聖なる階級の品位を失墜するものです。」ジョンソン、「奥さん、ボズウェル君は此の上なく適確にそれを言表しましたよ。」

ジョンソンが特別の謹慎と行狀の上品さを要求したのは教會の歴々の位置に在る者のみではなかつた。正當なことだが、彼は、牧師たる者は聖壇に於て奉仕し、人々の心を未來の國の長き慮りで感銘せしめる聖なる勤めのために特に選ばれた者として世間並の人々よりは幾分より眞面目であり、適度に應揚な態度を有すべきであると考へた。より高い動機は暫く措いて、自分たちの職業の品格を適當に自覺することは、彼等をして無差別の社交に於て彼等の特殊な立場を失はしめることを常に防ぐであらう。而してさういつた社交を好む者共が、それによつて歡心を獲得と彼等が思つてゐる人々の眼から觀て如何に自分たちの價値を下げ

るかを知つたならば、彼等は大いに慚悔に堪へぬことであらう。

ジョンソンと彼の友人のポークレアは曾つて共々に幾人かの牧師連中と相會してゐたが、連中は世俗の人々の縮まりのない陽氣さを示すことによつて感心されることだらうと思つた。そしてそれは、かういふ場合によくあることであるが、騒がしい亂に及んだ。興がることだらうと彼等が豫期してゐた當のジョンソンはしばらく生眞面目に黙りこんで坐つてゐたが、やがてポークレアを顧みて決して囁き聲とは言へない聲で言つた、「牧師たちのこの浮かれぶりは随分と厭やらしい。」

牧師の服装でさへもふさはしいものであるべきで、牧師階級の外見を避けようといふ氣取つた企てくらの輕蔑すべきものは他に有り得ない。さういふ企ては悲慘であると同時に無効でもある。今はロンドンの監督になつてゐるポークレア博士はチェスターの監督區を司どつた時のすぐれた教告に於てこの問題について正當に批判を下してゐる。そして或る僧職の洒落れ男について彼は「たゞ半端のハイカラであり得る」と言つた。

.....

三月三十日（金曜日）、私はサー・ジョシエ・レノルツ方で、チャールズ・モンテ伯爵サー・アンズリー・スチュアート・ポート・エリオットのエリオット氏、パーク氏、マーレー副監督、ラングトン氏と正餐を共にした。最も愉快な一日であつたが、その日の一部始終が保存して置かれなかつたのは残念であつた。しかしそこまで何もかも理想的にいくのを望む

のは無理である。

.....

エリオット氏は、ユーンウォールの漁夫が飲む彼の國特有な變つた酒の話をした。彼等はそれを「マホガニー」と呼んでゐる。それは三分の二がチンで三分の一が糖蜜で兩者がよく掻き混ぜられてきてゐる。私はそれを少し作つて貰ひたいと所望したところ、エリオット氏は手際よく作つてくれた。私は大へん良い飲み物だと思つた。そしてそれがスコットランドの山岳地方でアソル・ポリッヂと呼ぶところのウイスキーと蜂蜜の混合物と好一對であると言つた。ジョンソンは言つた、「その方がユーンウォールのより良い酒にちがひない、何故ならその成分が二つとも一層上等だから。」彼は又言つた、「マホガニーは近頃の名にちがひない、何故ならマホガニーと呼ばれる木材がわが國に知られるやうになつたのはさう昔のことではないから。」私は彼の酒の等級付け——少年にはクラレット、成人にはポートワイン、豪傑にはブランデーといふ——の話をした。パーク氏は言つた、「では私はクラレットを飲むとしよう。私は少年になりたい。少年時代の苦勞のない喜びを味はひたい。」ジョンソン、「それが獲られるなら、わしだつてクラレットを飲むのだが。だが、さうはいかぬ。それは少年を成人にもしなければ、成人を少年にもしない。それが多少とも利いて來るまでには、腹がだぶ／＼になつてしまふ。」

私は思ひ切つて、ジョンソン博士がヴェストリスに就いて舞踊を稽古してゐるといふ新聞

にあらはれた笑ふべき記事の話をもち出した。チャールモント伯爵は彼を挑發して語らせよ
うと欲して、それがほんとはどうか彼に質問しようといふことを囁き聲で提議した。
閣下は「私が訊きませうか？」と言つた。われ／＼は大多数でその試みを支持した。ここに
於て閣下は非常に眞面目にそして鄭重な口調で言つた、「もし、先生、先生がヴェストリス
についてお習ひになつてゐるといふのはほんとですか？」これは相當な冒険であつて、この
企圖をなすにはアイルランド義勇軍の將軍たるの大膽を必要とした。ジョンソンは最初はび
つくりして幾らか熱して答へた、「閣下はどうしてそんな馬鹿々々しい質問を發せられるの
ですか？」しかし直ちに氣を取り直して、一杯食はされるのを、或ひは食はされたやうに見
えるのを嫌つてか、又は本當の好機嫌からか判らないが、その冗談にばつを合せた、「いや、
しかし、誰かがその記事に答へてそれを打消したとしたらば、わしはそれに應じてかう言は
らう。それを打消した者はヴェストリスにとつてもわしにとつても友人味方ではない、と。そ
の譯は、何故にジョンソン博士たる者は彼の能力の上に少しばかり肉體的の輕捷さを加へて
はならないのか？ ソクラテスは老年になつて舞踊を學んだし、カトーは老年に及んでギリ
シア語を學んだ。更に一步を進めて、このジョンソンは地上に舞踏することに満足しないで、
綱の上に舞踏するかも知れない、又人は象に綱の上で踊らせるといふことをやり出すかも知
れないと説いてもよい。或る貴族は『空ろの樹の中の戀』といふ脚本を書いた。彼はそれが
不出来であることを悟つてすべての發賣冊子を買占めて焼却しようと思つた。マイルバラ公

爵夫人は一冊をとつて置いた。そして或る選舉の際彼が彼女の敵側になつた時、彼女はその
脚本の新版を印刷させ、巻頭の口繪として綱の上で踊つてゐる象の繪を掲げた。この貴族閣
下の喜劇の書き振りは象が綱の上で踊ると同程度に不細工であることを示すためにさうした
のだ。」

四月一日(日曜日)、私は彼と共にスレール氏方でサー・フィリップ・チェニングス・ク
ラーク及びパーキンス氏と正餐を共にした。パーキンス氏は年俸五百磅でスレール氏の醸造
所の監督にあたつてゐるのだ。サー・フィリップは相當の年輩で、由緒ある家柄の紳士とい
つた風があつた。彼は自分の白髪を相當に大きい袋の中に包んで居り、縫取りのあるチョッ
キの上に黒のピロッドの上衣を着け、ふんだんにレースの裝縁をつけてゐた。スレール夫人
はそれを時代遅れだと言つてゐたが、私はその故にこそ一層床しく、一層保守黨風であると思
つた。けれどもサー・フィリップは當時議會で反對黨に屬してゐた。ジョンソンは言つた、
「やあ君、古風な裝縁と近代的な主義とは調和しないね。」サー・フィリップはアメリカ戰
争への反對を有能に且つ平靜に辯護したが、私も彼に與した。彼は國民の多數は内閣に反對
してゐると言つた。ジョンソン、「このわしも内閣に反對だ。但し、わしが反對するのは、
反對黨側で内閣があまりにやり過ぎると思つてゐる點が未だく足らな過ぎるからだ。わし
が大臣だつたら、もし何びとかがわしに反對して指一本でも動かしたら、わしは彼を追ひ出
すであらう。何となれば、誰彼に勝手に與へることが政府の權限内に在る物は、政府の支持

者に與へらるべきだからだ。もし人が自己の地位を失ふといふ犠牲を賭して反對をするのでなかつたら、その者の反對は純正ではないだらうし、その者は何等眞剣な苦痛も感じないだらう。而して現在の反對黨は他人が持つてゐるものを獲ようとする競争たるに過ぎない。サー・ロバート・ウォルポールはわしがやらうと思ふ通りのことをやつた。アメリカ戦争に至つては國民中の物の解つた層は内閣に賛成だ。理解することのできる者の多數はそれに賛成してゐる。ただ聞くだけができる連中の多數はそれに反對してゐる。そして、ただ聞くことだけができる連中は理解することのできる連中より一層數が多いから、そして反對黨は常に最も聲高だから、烏合の民衆の大多數は反對黨に奔る。」

この誇々の議論はわれ／＼を興がらせた。しかし、私の考へでは、眞實のところ、最もよく理解できた人々はアメリカ戦争に反對であつたと思ふ。この問題が冷靜に考察されるやうになつた今日、殆どすべての人々がさうであるやうに。

スレール夫人は、商賣によつて年に四千磅の財産を築き上げたが、人中で話ができないので全く鬱めである一紳士の話をした。彼は自分でも嫌つて居り、又先方が自分を輕蔑してゐるのも知つて居る某氏に背上で自分の境涯を聊たずにはゐられないほど鬱めであつた。彼は言つた、「私はこの上なく不幸な人間だ。私は人と話しをするやうに招かれる。私は話しに往く。ところが悲しいかな！私には話がないのだ。」ジョンソン、「人は通常異つた幾つ

かの方面で成功することはできない。この紳士は一年に四千磅といふ財産を得るために、その間に於いて話すことを學び得たはずの時間を費したのだ。そして今や彼は話すことができなないのだ。」パーキンス氏は奇抜な、そしておどけた言をなした、「もしその人が彼の年四千磅を山師として築き上げたのだつたら、財産を築き上げると同時に話術も學べたでせうに。」

スレール氏は此の日は大へん物倦げに見受けられた。私は月曜の晩に再び彼に會つたが、その時には今どうかうといふ危険があるとも思はれなかつた。ところが四日（水曜日）朝早くに彼は息が絶えた。ジョンソンは屋敷に居合せて、その時の模様をかう語つてゐる、「わしは彼の脈搏の殆ど最後の動きに觸れた、そして、十五年間といふもの、尊敬と好意とを以て以外には未だ會つてわしにふり向けられなかつたその顔の見納めをした。」たま／＼此の日「文學俱樂部」の「召集」があつた。しかしジョンソンは次の短翰を書いて自分の缺席を謝した――

「ジョンソン氏は、サー・デュー・レノルヅ、及びその他の紳士諸君が、今朝スレール氏が死去されたる趣を承知されたる時、彼が召集に應ぜざることを諒とせらるべきことを信ず。――水曜日。」

●「祈禱と感想」第一九二頁

スレール氏の死去はジョンソンにとつて甚だ重大なる損失であつた。彼は後日に起こつた

すべてのことを豫知はしなかつたけれども、スレール氏の家庭が彼に與へた慰樂は今や大部分途絶えるであらうといふことを十分に承知してゐた。しかし彼は未亡人と子供たちに對して、それが喜び迎へられたかぎりには深切な注意を示しつつつづけた。そして彼は非常な眞剣さを以て故人の遺言執行者の一人としての役目を引受けた。今までの境遇からして彼は人生の眞の實務には殆ど没交渉であつたので、この役目の重大性は彼にとつて並々ならず由々しき事に思へた。「俱樂部」員たる彼の友人たちは、スレール氏が彼のために彼の生存期間に對してたつぷりした支給をして置いてくれたかも知れぬと望んでゐた。スレール氏は男の子を残さず、財産は莫大なものであつたから、さういふ取扱はからひをしたら大いに彼の名譽となつたことであらうし、ジョンソン博士の年齢を考へて見ればそれも長い期間のものでは有り得ないのだ。然るに彼は、彼の遺言執行人の各人に與へられたる遺贈たる僅か二百磅を博士に遺したのであつた。私は、ジョンソンが彼の新しい役目のことを、殊に、結局賣られることに決定した釀造所の事業について、得意になつて語るのを聞いて多少はほろほろと感ぜざるを得なかつた。ルーカン卿は、もし嚴密に事實通りではないとしても確かに性格的な非常に面白い話を傳へてゐる。スレールの釀造所の賣却が進行中、ジョンソンは國産稅取立役人といつた格好で角製のインキ壺とペンをボタン穴に挿して飛び廻つてゐるのが見受けられた。そして、彼は處分さるべき財産の價格をほんとのところどの位に踏んでゐるかと思はれて、かり答へた、「われ／＼はここで一と束ねのポイラーや槽を賣るんぢやない、貪慾の夢も及

ばぬほどの金持ちになる可能性を賣るのだ。」

.....

四月十二日(木曜日)、に私は彼と共にさる監督の許で正餐を共にしたが、そこにはサー・ジョシユア・レノルツ、バレンチャー氏、他に數名の客があつた。彼はその前日にも別の監督の許で正餐を共にしてゐた。不幸にして私はわれ／＼が正餐を共にした監督の許に於ける彼の會話は少しも記録して置かなかつた。しかし私は、受難週間に於て二度も外で正餐したことに對する彼の巧妙な辯解を保存してある。さういふことをこの畏き週間に於てすることは、彼が『漫步者』に嚴かな文章を載せた頃なら決して自らに許さないやうな放漫であると私は信ずる。以前よりずつと交際が多くなり、もつと贅澤な生活を樂しむやうになつたので、彼は快樂に對する、より強い愛好を馴致し従つて彼の宗教的勤行に於いて以前ほど嚴格でなくなつたものと私には思へた。彼はさうは認めようとせず、巧みな詭辯によつて次のやうに理窟をつけた、「いや君、監督がこの週間に客を集めるといふのは、世に所謂ふさはしいことではないさ。だが、かういふことを考へなくてはいけない、放漫は悪いことだ、しかし、頑固もやはり悪いことだ。そしてわれ／＼の全般的人格は受難週間に監督と正餐を共にすることによつてよりも頑固さによつて一層傷つけられるかも知れない。そこには非議の手がかりが生ずるかも知れない。彼は受難週間に監督と正餐を共にすることを拒絶したが三回も日曜日に教會を缺席した。」といふやうなことが言はれるかも知れない。」ボズウェル、「なる

ほど、なるほど。しかし先生、人が一貫して非の打ちどころの無い行状だったら、この週間には監督と正餐することを拒絶し、彼の手本によつて悪い習はしを奨励することを避けた方が一層善くはないでせうか？」ジョンソン、「だが君、君は、彼のところに往くことによつてよりも、彼の招きを拒絶するといふその不同意で監督たる者の權威を滅殺することによつて一層多くの害を生じはしないかといふことを考ふべきだ。」

「リッチフィールドなるルーシー・ポーター嬢へ

拜啓。人生には煩ひが多い。私は最近親愛なる友人スレートルを失つた。私は彼に幸あらんことを望んでゐる。しかし私には大なる損失であつた。その他の點では私は可成り工合がよろしい。私の健康は若干の注意を必要とする。しかしその注意は效驗なきものではない。私が健康を書した時は、それは屢々私自身の咎であると思はれる。

春は急速に進みつつある。それは全世界が活氣づけられ力づけられる季節であるから、あなたも私も共にその恵みに與ることを希望する。私の望みはリッチフィールドを見ることだ。しかし我が友の遺言執行者たることを託されたので身體が空くかどうかどうか判らない。しかし何とか都合したいと思つてゐる。われ／＼はもう久しい間會はないのだから。そして今後非常に何度も會へるといふ期待はいかに覺束ないかは、日々時々の人の死亡によつて教へられてゐる。死が害悪ではなくなるやうに生きるやう、われ／＼は努めよう。近いうちに手紙を下

さい。あなたの手紙は私に大きな喜びを與へるでせう。……

ロンドン、千七百八十一年四月十二日　サム・ジョンソン

四月十三日（金曜日）、は、善金曜日だったので、私は例のとほり彼と聖クレメント教會に往つた。そこで私は彼の昔の大學友だちのエドワーズに再び會つたが、私はそれにかう言つた、「ジョンソン博士とあなたは教會でばかりお會ひになるやうですね。」彼は言つた、「これが會ふのに一ばん善い場所ですよ、天國を除いては。そしてそこでも二人は會ふだらうと私は望んでますよ。」ジョンソン博士は、彼等の思ひがけない再會の後、エドワーズと彼との間には極めて僅かしか交渉がなかつたと私に告げた。「しかし、（ほほゑみながら彼は言つた）、或る時彼はわしに會つてから言つた、（わたしはあんたが『漫歩者』といふ名の大へん結構な書物をお書きになつたといふ話を聞きました。）わしは彼が何もかも御存じなくてこの世を去るのを好まなかつたので、彼に一揃ひを送つた。」

ペレンチャー氏は今日彼を訪ねたが、頗る愉快であつた。われ／＼は、町中にある一軒の家に於ける夜の談話俱樂部の話をした。われ／＼は皆その會員であつたが、それについてジョンソンは語つた、「あれはいけない。あそこでは何にも出さない。お茶もコーヒーもレモネードも他のものも何一つ出ない。ほんとのところ、君、人は這入つた時と全く同じこととでそこから出て来るやうな場所に往くことを好まぬものだ。」私はただ議論のための議論と

して、學識才能ある人々は感覺を満足させる些々たる物の助けを藉りなくても、非常に良い知的な集會をもつことができる」と主張しよりと試みた。ペレンチャーはジョンソンに和して、これ等のものが無くしてはどんな會合でも退屈で味氣ないものになる、自分は、それ故、すべてのささやかな茶菓をもつことを欲する、いや、若干の冷肉と臨戸棚にひと壇の酒をもつのも悪くはない、といふことを述べた。ジョンソンは勝ち誇つたやうに私に言つた、「君、ペレンチャー君は世間を知つてゐるよ。誰だつて何の面倒もなしにうまいものを持つて來られれば悪い氣はしないよ。わしは或る時スレール夫人に、あなたはカルタ會を開くのは好まれないのだから、極上の菓子をふんだんに出すべきだ、さうすれば客が澤山來てくれることは受合だ、と言つたことがある。」私はこの問題については我が畏友に同意した。何となれば、神は人間を複合的動物に作り給ひ、肉體を元氣つける何物も無難ところでは心も萎靡してしまふからである。

四月十五日（月曜日）、復活祭……

われ／＼の正餐の仲間はウィリアムズ嬢、デムーリン夫人、レヴェット氏、印刷業のアレン氏、律師ジョン・ウエズレー氏の姉妹で姿形も舉動もそれに似てゐると見受けられるホル夫人から成つてゐた。ジョンソンは此の日初めて、彼が十四年前に買ひ求めたのだと私に語つた幾つかの立派な銀の盆を取り出した。正しく今日は特別の日なのである。私はアレンが、寓話にある、堂々たる牡牛に似せようと息ばつて自分の身體を脹らませる小さな蛙の

やうに、絶えずジョンソン張りに語らうと努力するのを見て少なからず可笑しく感じた。

……

彼は珍しくない事として——私は未だ聞いたことがないのだが——呼ばれるといふ現象の話をした。それは、人間の器官が發する如何なる音聲も達する可能性を遙かに超えた遠距離にある知人の聲によつて自分の名前が呼ばれるのを聞くことである。「嘘を言はぬ男と信頼できる、わしの知人はかういふ話をした、——『自分は、或る晩キルマーノックの自分の家へと歩いてゐた時、アメリカに往つてゐた一人の兄弟の聲が森の中から自分と呼ぶのを聞いた。そして次の郵便船はその兄弟が死んだ報せをもたらしだ。』といふのだ。」マクピーンはこの説明しがたい呼び聲は非常によく知られてゐることだと主張した。ジョンソン博士は、或る日オックスフォードで、彼が自分の部屋の鍵を廻してゐた時、母親が「サム」とはつきり呼ぶのを聞いた、と言つた。彼女は當時リッチフィールドに居た。但し、その後で何事も起らなかつた。この現象は、いかなる他の神祕的な事實——それを多くの人は仲々信じようとせず、或ひはむしろ頑固な輕蔑を以て斥けるのであるが——にも劣らず不思議なものだと思ふ。

この話の暫く後で、何であつたか聞き洩らしたが、彼が何か言ふと、ウィリアムズ嬢とホル夫人が同時に彼に答へよりと躍起になつた。彼は怒つて怒鳴つた、「お前さんたちが一しよにしやべつては我慢ができぬ。」しかし、彼は自分を制し、言葉を柔げて言つた、「お前

さんたちは婦人ではあるが、今のやうに言はざるを得ない。」次いで彼は機嫌を直して陽氣な氣分になり、『乞食のオペラ』の中の一つの歌の文句で彼女等に話しかけた――

「けれど、一度に二人はどんな男も手にあまる」
 「おやおや、」と私は言つた、「先生はマクヒース大尉（譯者註、『乞食のオペラ』の主人公なる色男の監獄）におなりになるのですか？」この場の空氣には想像し得るかぎり最も滑稽なる何物かがあつた。マクヒースとポリールとルーシーといふ組合せ――それからサミュエル・ジョンソン博士、盲目で愚痴つばいウイリアムス嬢、及び瘠せてひよろ長くお説教ずきのホール夫人のひと組との間の對照は絶妙であつた。

.....

四月二十日（金曜日）、此の日、私は、私の全生涯中に享受した記憶のある最も幸福なる日の一つを彼と共に過ごした。ギヤリック夫人の良人を失つたことに對する哀傷は、傷を受けた愛情と欽仰とが生じ得るかぎり誠實なものであつたと私は信ずるのであるが、夫人は此の日、良人の死後初めて、彼の友人たちの選ばれた一團を招いて正餐を共にした。その一團とは、彼女と同居し彼女が自分の教師と呼んでゐたハナ・モア嬢、ボスコリーエン夫人、エリザベス・カーター夫人、サー・デジョシア・レノルズ、バーニイ博士、ジョンソン博士、及び私であつた。われ／＼はアデルフィに在る彼女の家――そこで私は「人生を喜ばしめた」かの人と多くの楽しい時間を過ごしたことがある――で非常に趣味饒かにもてなさ

れたのである。彼女は氣分が好ささうで、良人のことを愉しげに語り、爐棚の上に懸かつてゐる彼の肖像に眼を注ぎながら、（死は今では自分にとつて最も快適なものである）旨を言つた。デーヴィッド・ギヤリックの畫像そのものさへ喝采してゐた。ポークレア氏は適切な思ひ付きを以てその立派な彼の肖像畫（それはダイアナ夫人の好意により今は私の友人ラングトン氏の所有になつてゐる。）の下に彼の愛するシェイクスピアからの次の一節を記した

程よい陽氣さを外さないかぎり

これほど愉快な人と一時間と

語りあつたことはございませぬ。

彼の眼はその機智のきつかけをつかみます

眼がとらへるすべての物をば

機智は陽氣さをかき立てる戯談に變へるのです

それを、思つたことの表現者たる、彼のたくみな舌は

いかにも適切で都雅な言葉で言ひあらはすので

老寄りの耳は彼の話を聞いて浮かれあるき

若い者は聞き耳立てて惚れ込むのです。

あの人の話はそんなにうまくそんなに達者です。

（譯者註、シェイクスピアの喜劇「愚者の骨折り損」二幕一場にある）

われ／＼は皆快よい気分にあつた。私はボスコリーエン夫人に囁いた、「人生からこれ以上を望むことはできないと私は思ひます。」素晴らしい御馳走に加へて、われ／＼は特に適切な價値を有した、リッチフィールドのエール酒をふるまはれた。サー・ジョシュア、バーニイ博士、それから私はジョンソン博士の健康を祝してねんごろにそれを飲んだ。彼はわれわれと共に杯は擧げなかつたが、同じねんごろさを以て答へた、「諸君、わしは諸君がわしのために祈つて下さつたに劣らず、諸君御一同の御健康を祈る。」

此の日の一般的感銘は懐しい想ひ出として私の心の中に宿つてゐる。しかしあまり多くの會話は記録されてゐなかつた。たゞ私の保存したものを忠實に披露することにしよう。

一座の一人は、表紙の厚紙に短剣と自由の帽子(譯者註、ローマで解放した奴隷に與へた圓錐形の帽子)の印しを打つた、民主主義的の書籍の贈物を歐洲中に送ることをした強硬なるホイッグ黨員たるトマス・ホリス氏の話をもち出した。カーター夫人は言つた、「あの人は悪い男です。彼はよく冷酷な話しぶりをしました。」ジョンソン、「ふふん！ 奥さん冷酷な話しぶりをされて誰が困りますか？ おまけに彼は、この世の中で最も退屈な貧弱な男だつた。それにわしは彼が、或る人間が自分のそれとは正反對の主義の人間だと知つてゐてもそれに害を加へなかつたらうと信ずる。會つて美術協會に於て、廣告が作製されることになつた時、彼はわしのことを最も良くそれを爲し得る人間として指名したことをわしは記憶する。これはわしに對する深切だといふことはお判りだらう。しかし、わしはそこを脱け出て、それを避けてしまつた。」

カーター夫人は同じ人間について、「私は彼が無神論者でなかつたかと思ひます。」ジョンソン、「それは知らない。(ほほゑみながら) もし彼に成熟すべき時日があつたら、恐らくそれになつたかも知れない、彼は無神論者にまで發達したかも知れない。」

サー・ジョシュア・レノルズは『マツヂの説教集』を褒めた。ジョンソン、「マツヂの説教は善いが、實際的でない。彼は自分が把持できる以上に思想を捕へる。彼は粉にし得る以上の穀物を取り込む。彼は廣い展望を開くが、それはあまりに遠くて不明瞭である。わしは『ブレアの説教集』を好む。あいつはスコットランド人であり、長老派教會員であり、さうあつてはならぬあらゆるものであるが、わしは彼の説教を褒めた最初の人間だつた。わしはそれほど虚心坦懐だつたのだ。」とほほゑむ。ボスコリーエン夫人、「彼の偉大な眞價は、先生の偏見に打ち勝つほどだつたのです。」ジョンソン、「いや奥さん、中を取らうではないか、われ／＼はそれをわしの虚心坦懐と彼の眞價とに歸することにしよう。」

晩になると應接室に、幾人かの婦人たち、キラローの監督、パースイ博士、大藏會議局のチェムバレン氏、その他、その他、といふ大勢の客が集つた。誰かが、單なる文人の生活はあまり面白いものではあり得ないと言つた。ジョンソン、「いや、確かにそれは面白くもありません。これは正當でなくなされ、そして繰り返されてゐる説だ。何故に文人の生活は他のいかなる人間の生活より面白くあり得ないだらうか？ その生活には同じぐらゐる興味ある變化が無いだらうか？ 『文人の生活』としてそれは非常に面白くあり得る。」ボズウェル、「し

かし、それが多少活動的な變化によつて趣きを變へられれば、その方が確かに一層よいにちがひありません。——例へば彼がジャマイカ島に往つたとか、或ひは——ヘブリディーズ諸島へ往つたとか。」ジョンソンはこれを聞いて悪くない氣持らしかつた。

或る、ちやんとした著述家の噂が出て、彼はわれ／＼に、その人が印刷屋の女小僧と結婚したといふ變つた履歴を物語つた。レノルツ、「印刷屋の女小僧ですか！ 私は印刷屋の小僧といふのは黒い顔をしてぼろを着てゐるものと思つてゐました。」ジョンソン、「さうだ。しかし、その男は彼女の顔を洗はせ、きれいな着物を着せたことと思ふよ。(それから非常に眞面目な顔になり、又熱心に言つた。)そして彼女は彼の恥とならなかつた。その女は、底は物が解つてゐた。」がういふ風に話の中に飛び出した底といふ言葉は、彼の眞面目さと對照して見ていかにも滑稽に響いたのでわれ／＼の多くは忍び笑ひや高笑ひを禁ずることができなかつた。但し私はキラローの監督が微塵も顔を崩さずに居たこと、ハナ・モア嬢が彼女と同じ長椅子に坐つてゐた婦人の背中の蔭に殺さうに顔を隠したことを覚えてゐる。彼の誇りは、彼の表現がそのつもりでない時に、嘲笑を惹き起すことを我慢できなかった。そこで彼は專制的威力を把持し行使しようと思ひ、屹とあたりを見廻し、強い語調で叫んだ、「どこが可笑しいのだ？」それから居ずまひを正し、いかに彼がわれ／＼に遠慮を強ひ得るかを感じさせようと怖い顔をし、そして、尙一層滑稽な言葉はないかと心の中で探してゐるやうな様子でゆつくりと言つた、「わたしはその文が根柢的に物が解つてゐたと言ふのだ。」さあ、よ

く聴け、そして笑へるものなら笑つて見よ、と言はぬばかりに。われ／＼はすべてお葬式に於けるごとく神妙な顔をして坐つてゐた。

彼と私は一しよに出て歩いた。二人はアデルフィの欄干に倚つて暫く立ち止まりテムズ河を眺めた。私は多少の感慨を以て、自分は今、會つて此所の背後にある建物に住んでゐた、われ／＼の失つた二人の友人ポークレアとギャリックとのことを思つてゐる、と彼に言つた。彼も情のこもつた聲で言つた、「さうだ、二人とも埋め合せのつかない友人だつた。」

此の日以後暫くの間、私はあまり彼に會はず、又私の聴くことを得た彼の會話にしても、残念ながらほんの少々しか保存して置かなかつた。當時私はいくつか他の事柄に従事してゐて、それが努力と勤勉を要求したので、必然的に殆どすべての私の時間を占領したのであつた。

或る日、當時政權を握つてゐた人々を随分忌憚なくあげつらつた後、彼は私に言つた、「此所だけの話だが、わしは反對黨に、わしがいかに現内閣の遣り口に不服だかを知るといふ満足を與へたくない。」そして私が、パーク氏はホイッグ黨が政權を握つてゐたチョーチー二世の御代に於ては、トリー黨が政治をやつてゐる現在の御代に比べて、いかに國民が靜かであつたかを自慢してゐるといふことを話すと、彼は言つた、「しかし君、われ／＼は、トリー黨は政府に對して一層敬意を抱いてゐるので、さういふ態度によつて拘束されないためどんな手段によつても反對しようとするホイッグ黨ほどの亂暴さを以て反對しないだらうと

いふことを考へるべきだ。」

五月八日(火曜日)、私は再びデイリー氏方で彼とウィルクス氏と共に正餐するの喜びをもつた。今度は二人を一緒にするに「翰旋」の要は無かつた。ジョンソンは前回の會見で大いに満足したので、ウィルクスと再會することを大へん喜んだからである。ウィルクスは此の日はピーティ博士とジョンソン博士の間に坐つた。「眞理」と「理性」との間だと、パオリ將軍は私からその話を聞いて言つた。ウィルクス、「ジョンソン博士、私は論争の的となつたスコットランドに對する選挙の問題はイングランドではなく、その國で彼等自身の聖十字架・ハウスの寺院」に於て討議しようといふ案が議會に上程さるべきだと考へて居りました。何故なら、それを當地で討議する結果として、われ／＼は、出かけて来て決して歸國しないスコットランド人の洪水を見ることになつたからです。此所にゐるボズウェルからして、多分二週間とは續かない自分自身の州のための選挙のことと出て来て來てゐるのです。」ジョンソン、「いや、あなた、わしはそれが討議さるべき理由からして認められませんが。御承知の通り、どのスコットランド人でも似たり寄つたりだからです。」ウィルクス、「ところで、ボズウェル、スコットランドの法廷では辯護士は一年にどのくらゐの収入が獲られるかね。」ボズウェル、「二千磅だと思ひます。」ウィルクス、「それだけの金をスコットランドでどうやつて使へるだらうか？」ジョンソン、「なに、金はイングランドで使へる。だが、もつと

困る問題がある。もしスコットランドに於ける一人の人間が二千磅を得てしまへば、残りの國民全部にどれほどのものが残つてゐようか？」ウィルクス、「先年の戦争(譯者註、七年戦争、一七五六年—一七六三年を指す)に於て、テュロガ(譯者註、一七二七年—一七三三年の海賊)スコットランドの七つの島を徹底的に掠奪して攫つて往つた莫大な鹵獲物のことは御承知でせうが、彼は三志六片を携へて再び故國に船出したのです。」ジョンソンとウィルクスは又もや、所謂スコットランドの貧窮についての途方もない、ふざけた嘲弄を一しよになつてはじめてしたのである。ピーティ博士と私はそれに取り合ふ必要を認めなかつた。

引用をすることについての話が出て、ウィルクス氏はそれを術學的であると非難した。ジョンソン、「いや、それは善い事だ。そこには心の共同がある。古典の引用は全世界を通じての文人の合圖言葉である。」ウィルクス、「大陸では彼等は皆ラテン譯の聖書を引用します。わが國ではシェイクスピアが主として引用されます。われ／＼は又ポーブ、ブライター、バトラー、ウォラー、そして時々カウリーを引用します。」

われ／＼は書簡を書くことについて語つた。ジョンソン、「近頃は書簡を公けにすることが大いにはやつて來たので、それを避けるためにわしはわしの手紙の中にはできるだけ少しの内容をつめこむ。」ボズウェル、「どんなことをなさつても、先生はそれを避けることはいきません。先生ができるだけまづお書きになつても、先生の手紙は骨董品として公けにされるでせう——」

●この奇蹟を見よ！スタナップ（譯者註、チニスターフィールド伯、一六九四年—一七七三年のこと）の鉛筆もて書かれたる機智にあらずして退屈なる二行を見よ（譯者註、エドワード・ヤング、一七六五年、の詩の引用）」

彼は街の女「ベット・フリント」の面白い話をわれ／＼に聞かせた。この女は多少の風變りの才能と多大の不躰さを以つて強引に彼に近付いて來たのだ。彼は言つた、「ベットは韻文で自分の傳記を書き、わしのところに持つて來て、わしにそれに對する序言を寄せてくれと願つた（と笑ひながら言つた。） わしは彼女のことを、平生は運葉女で酔つぱらひであり、時々は賣女で泥棒であると言つたものだ。しかし彼女は洒落れた借間を有し、スピネット（譯者註、ピアノの前身たる樂器）をもつてゐてそれを奏で、彼女の二頭曳き馬車の前を歩く少年を有してゐた。あはれなベットは寢床の上掛けを盗んだ腹であげられ、オールド・マリー（譯者註、當時のロンドンで審問された。首席判事——は女好きで、有利な裁決を下し、彼女は放免された。その後でベットは陽氣で満足の態で言つた、「上掛けは私のものになつたのだから、それで下着袴を作りますわ。」

雄辯術の話が出て、ウイルクス氏はそれが詩的表現のすべての魅力を伴つてゐるものであると言つた。ジョンソン、「いいや、雄辯術は相手の議論を打ち倒し、その代りにより善いものを置く力である。」ウイルクス、「しかし、それでは感情を動かすことができない。」ジョンソン、「それで動かされるやうなのは弱い人間に違ひない。」ウイルクス、「有名な雄辯家の名を擧げて）——の想像力のすべての華々しさと彼の機智の豊饒さの中に不思議な味の缺

乏がある。アペルレス（譯者註、第四世紀のギリシアの畫家）の畫いたヴァイナスについて、その肉は彼女が齋戒によつて養はれたかのごとくに見えると言はれてゐるが、この人の雄辯には時々人をして彼が馬鈴薯を食ひウイスキーを飲んでゐるのではないかと疑はしめるものがある。」

.....

年 一 七 八 一 年
ボークレア氏の大部な藏書が此の季節にロンドンで競賣に附せられた。ウイルクス氏は、その中にあんなに多くの説教集の蒐集があるのは意外だつた、と言つた。華やかな世界に於けるボークレア氏のやうな性格の紳士がこの種類の文章の多くを求め氣になつたのは不思議だと考へたらしかつた。ジョンソン、「だが、あなた、あなたは説教集は英文學の相當な部門をなしてゐることを考へるべきだ。従つて説教集を多數に蒐めてゐなければ、藏書は極めて不完全であらざるを得ない。それから、すべての蒐集に於て、それを擴充しようといふ欲望は、獲得の進捗に比例して、一層強大になるものだ。——恰度、運動が加動力の繼續によつて促進されると同様に。のみならず、（と、ウイルクス氏の方を、おだやかな、しかし意味ありげなほほえみを以て見ながら）人は説教集を、それによつて自分自身を善くしようといふ目的で集めるかも知れない。わしはボークレア氏が、何時の日にかに、彼もさうなることを意圖したのだと希望する。」

ウイルクス氏は私に、ジョンソン博士にも聞こえるほどの高聲で言つた、「ジョンソン博士は僕に彼の『詩人傳』を贈つてくれてよいはずだ。僕は貧乏な愛國者で、それを買ふ餘裕

が無いのだから。」ジョンソンはこのあてつけを少しも意に介しない顔をしてゐた。少したつて、彼はデイリー氏に呼ばはつた、「おい君、わしの『詩人傳』を一揃へウィルクス氏に贈呈して置いてくれたまへ。」これは指圖どほりに爲された。そしてウィルクス氏はジョンソン博士を訪問し、鄭重にもてなされ、長い間對坐した。

客は追ひ／＼辭去した。デイリー氏自身も所用で階下に呼び降ろされた。私は暫くの間部屋を出てゐた。歸つて見ると、サミュエル・ジョンソン博士とジョン・ウィルクス氏が文字通り水入らずで話してゐるので驚いた。即ち二人は椅子の上で身をかがめ、頭を傾しげて殆ど互ひに觸れ合はんばかりに近づけ、一種のひそ／＼話で、ジョージ二世とロシア王との個人的喧嘩について熱心に語つてゐたのであつた。私が今見たごとき、政治的論争の戦に於ける、このやうな二人の敵對者の間の完全に打ち融けた情景は絶好の畫題となつたであらう。それは聖書の中で豫言されてゐる、獅子が仔羊と共に横たはるであらうといふ幸福な日を私に思ひ浮べしめた。

此の日以後又もや、ジョンソン博士と私とが會はなかつた可成り長い間隔が有つた。このことを彼にこぼすと彼はかり言つてくれた、「では、われ／＼は二人一緒に生活しよう。」

およそ此の頃の事、女性がさういふ楽しみを享けようといふ欲望に鼓舞されて、女士乃至才人との會話に参加するやうな夜の集會を開くことが幾人かの婦人の間に大いに流行した。これ等の團體は「青靴下俱樂部」と呼ばれたが、この稱呼の起原はあまり知られてゐない

から、その由来を語るのも無駄であるまい。それ等の團體が創始された時、その最も目星しい會員の一人はステイリングフリート氏*であつたが、彼の服装は著しくちみであり、特に彼が青い靴下を穿いてゐるのが目についた。彼の會話は甚だ優秀なものであつたので、彼の缺席は非常な損失として感ぜられ、「わたしたちは『青靴下』なしではどうにもなりません。」と言はれるのを常としたほどであつた。かういふことからしてこの稱呼は徐々に確立された。ハナ・モア嬢は彼女の詩『Rachon』(譯者註、青靴下の)の中で見事に一つの「青靴下俱樂部」を敘述したが、その中ではそこで目星しかつた多くの人物のことが書かれてある。

*ベンジャミン・ステイリングフリート氏、博物學その他に關する小冊子の著者

ジョンソンはこれ等の集ひに時々来るやうに説き勧められ、快活なモンクトン嬢(現在のコルク男爵夫人)に對してさへ自分があまりに嚴肅な存在だとは考へなかつた。嬢は母親のレーディ・ゴールウェイの家で最も華やかな「才女ぶり」を示したものである。彼女の潑刺ぶりはこの「賢人」を魅了し、二人は想像し得るかぎりの打とけぶりを以つて語りあふのを常とした。或る晩、彼女がスターンの著作の或るものは非常に感動的であると言つたことから、一寸變つた場面が見られた。ジョンソンは卒氣なくそれを否定した。彼女は言つた、「それが私を動かしたことは確かでございますわ。」ジョンソンはほほゑみながら、そして、からだを揺すりながら言つた、「いや、あんた、それはあんたが馬鹿だからですよ。」彼女が暫く後になつてこの事を彼に言ふと、彼は同量の眞實と禮讓を以て言つた、「もしわしがさう思

つたとしても、わしは確かにさう言ふべきではなかつた。」

別の晩、ジョンソンの私に對する寛容は可成り際どい試煉を蒙つた。私はモントローズ公爵家で甚だ愉快な仲間と正餐を共にしたが、公爵閣下はいつもの通り、徳利をふんだんに廻した。グレイアム卿と私とは一しよにモンクトン嬢方に赴いたが、そこで私はえらい元氣で、すべての怖れと慎しみを忘れてしまつた。大勢の第一流の人物——その中には最も端正なる禮節を具へた身分高き貴婦人も居られたのを想ひ出し私は恐縮してゐるのであるが——のただ中で、私はジョンソンの隣りに坐り込み、今や自分が優に彼と對等であると思ひ込み、一座の人たちに私がいかにエーリックス(譯者註、トロイ戦争に於けるギリシアの方の勇士、ジョンソンをそれに喩へた)と太刀打ちできるかを知らせたい氣もちで、聲高にやかましく彼に話かけた。私は特に、想像の楽しみの價值について彼にしつこく話かけ、私の議論の例證として彼にから問ひかけたのを覚えてゐる——

「ねえ先生、もし私が、——夫人(國王陛下の領土内に於ける最も美しい公爵夫人の名を擧げ)が私を慕ふと想像するとすれば、私は非常に幸福に感じはしないのでせうか？」私の友人は巧みに私の問を躲して、できるだけ私を鎮まらせようとした。しかし、彼がどう感じたかは想像に難くない。しかし、二三日後、私が彼の許に伺候してお詫した時には彼は最も友誼的な穩かさを以てふるまつた。

此の年、私がロンドンに止まつてゐた間、ジョンソンと私は幾つかの場所で正餐を共にした。私は、今やダービーからロンドンのローア・グルーヴナー街に引移つたバター博士方に

於ける靜かな一日を思ひ出す。しかし、その折り、及び此の期間中の他の場合に於ける彼の會話については私は規則的記録をものすことをすつかり懈つた。であるから、此所には、私が私のジョンソン覺え書中に見出すところの雜多な記事を若干挿入することとしよう。

「わが身に來たるところの日に對して用意をなす」にあつた彼の往きあたりばつたり一の習慣は、ジョン・ニコルズ氏によつて私に語られた次の逸話に窺はれる。——「千七百六十三年に、ホイストン氏の奉公人たる若い書籍商が彼の『シェイクスピア』に對する申込みを携へて彼の許に伺候した。そして博士がどの簿冊にもその申込み人の名を記入しないのを見て、その紳士の宛所が印刷された申込みの表の中に型のごとく挿入されるやう、それを書き留めて頂けないものかと懼る／＼訊いて見た。「わしは申込み人の表を印刷しないだらう。」七と。ジョンソンはひどくぶつきら棒に言つた。が、殆ど直ぐさま氣を變へ、大へん氣嫌よく附け加へた、「君、わしは申込み人の表を全然印刷しないことに對して二つの非常にもつともな理由をもつてゐるのだ——その一は、わしが名前をみんな失くしてしまつたこと、——八その二は、わしはその金をみんな費つてしまつたこと、だ。」

ジョンソンは、自分の才能の力と巧妙さを示すためにわざと間違つた側に立つた場合でさへも、議論で負かされたやうに見られることは我慢がならなかつた。それ故、自分の敵手の旗色が良いと見ると、彼は俄然として何か強引の詭辯といふ方法を用ふるのであつた。或る時、私が目に見えた有利さを以て彼に疊みかけていくと、彼はかう言つて私を驚つた、「親

愛なるボズウェル君、こんな話は止めようではないか。君だつて何の益が有るわけではあるまい。それより何か、スコットランドの調べの口笛でもやつて貰ひたいね。」

とは言へ、「勝たんがために語つた」場合のジョンソンと、知識を提供し解明を加へようといふ他に他意無い場合のジョンソンとの間には嚴に區別を要するのである。彼のすぐれた友人の一人は言つてゐる、「ジョンソンの主要なる才能の一つは議論の間違つた側を主張すること、そして眞理の素晴らしい顛倒のうちに示された。もしわれ／＼が一つの問題についての彼の公正なる意見、そして、個人的の偏見からの、或ひは議論に勝たうといふ望みからの、何等かの偏傾の無い意見を引き出すことができたとすれば、それは人をして納得せしめるばかりでなく人を壓倒する概のある叡智そのものであつた。」

けれども彼は生涯を通じて會話を、知的の活力乃至練達の試験、といふ風に考へる習慣をつけてゐた。そして、このことにわれ／＼は彼自身の會話に現れた、あの比類ない豊饒と才華とを敢へて歸してもよからうと私は考へるのである。舌の功名に對する彼の熱心と、或るすぐれた友人に對する彼の高い評價とを同時に證據立てることだが、彼はかつてその人から話しかけた、「——君、わし等はもう何時間も一しよに過ぎた。ところで君は、わしをして羨ましがらせることをたつた一と言だけ云つた。」

彼は人々の勤勉と努力との意欲を沮喪せしめる傾きのあるすべての瞑想的な悲觀的な思索を大いに嫌つた。この點彼は大旅行家のショー博士に似てゐた。私がデーンズ・バリングト

ン氏から聞いた話であるが、博士は、「私は *qui bono* (譯者註、何の役に立つ、) を唱へる人間を嫌ふ。」と常々言つてゐたさうである。ある友人から *no neat tanti* (譯者註、大したことに口癖にする或る男のことをどう考へべきかを訊ねられて、ジョンソンは答へた、「馬鹿な男だと思へばいいよ。ああいふ *bono* 連中はその間何をしてゐるだらうか?」私が氣落ちの發作のうちに在つて、一般にわれ／＼を何かの活動にたづさはらしめる仕事に冷淡な氣もちで彼に話しかけ、かくまでの面倒をとることの理由を尋ねたときに、彼は力を籠めた口調で言つた、「君、それは人生といふ組織を押し進めるよ。」

ゴールドスマスは時々彼に對して冒險的に思ふ存分な態度をとり、しかも罰を蒙ることなく脱け出すことができた。ボークレアは私にからいふ話をした。——ゴールドスマスが、作者たちを劇場支配人等の壓制と想像されるものから救済する目的で、新作の劇の上演専門に、ロンドンに第三の劇場を建てようといふ企圖について語つたとき、ジョンソンはそれを鼻であしらつた。そこでゴールドスマスは言つた、「はいはい、これはあなたにとつては何でもありますまいよ、今では恩給の蔭に身をかくまふことのできるあなたには。」そしてジョンソンはこの言葉を氣嫌よく聞き流してゐた、といふ話であつた。

ジョンソンが私に語つた話であるが、或る時、近所に住んでゐた或る大工が、その仕事の

うちで彼が知りたがつた何かのことを非常に快よく教へてくれたといふので彼は非常に喜んだ。彼は言つた、「それは文學に尊敬を拂つたものである。」

私は彼に、富の分け前をそんなに僅かしかもたぬこと、それから、野心の對象にされる國家に於けるあの顯榮の何物をもたぬことを不満にお思ひにならぬかと訊ねた。彼は年に三百磅の恩給をしかもたなかつた。何故彼は自家用の馬車ぐらゐを置ける身分でないのか？何故彼は何か相當の役目に就いてゐないのか？ジョンソン、「君、わしは世の中について滾したことは曾つて無い。また滾すべき理由がわしに有ると思つてゐない。これだけのものでもわしが持つてゐるのが不思議なくらゐだ。わしの恩給はわしの知つてゐるどの場合よりも一層異例な沙汰である。君、ここに、當時の政府に對して公然左袒しない者で、それを求めることなくして恩給を得た者が居るのだ。わしは未だ曾つて權勢に阿附したことがなかつた。彼等はわしを招いた。しかし今ではどうやら、彼等はわしに見切りをつけたらしい。彼等はもう腹を決めた、彼等はこれ以上わしに用はないのだ。」私が、私はさうは信じられない、彼等はたしかに先生の談論を大いに喜ぶにちがひありませんから、と言ふと、彼は自分自身の優越を自覺しつつ、かう答へた、「いいや、君。貴顯の紳士や淑女は彼等の口を押へられるのを好まぬものだ。」この言葉は、彼の性格の力と彼の想像の才華とが生ぜざるを得ない効果をいかにも適確に表現したものであつた。そして、實際のところ、彼等は彼と共にある時彼等自身が不思議に卑少なものに縮むのを感じたにちがひない。私が、自分は何時でも彼

の話をお聴くのをおいかに幸福に感ずるかといふことを熱心に述べる、彼は言つた、「なるほど。しかし、君がもし大法官だつたら、さうはいかないだらう。その時は君は自分の威嚴を考へるだらう。」

この言葉には多くの眞理と人間性の知識とがこめられてゐた。しかし確かにわれ／＼にはから思へるのである——ジョンソンの談論の價値を知つてゐる人間なら、いかほど高い社會的地位に置かれてゐても、なるほど比較されることによつて自分が卑小に見える恐れのある立場は用心深く避けるかも知れないが、ジョンソンが提供し得た豊富な知的の饗應に參することによつて、繁々と私的に自分を満足させたことであらう、と。しかし、いかに少數の貴顯者が彼との交際を求めたかを考へると不思議に感ぜられる。従つて、もし人がこの點からして諷刺のきつかけを得ようといふ氣になつたら、非常に大きな題材が現れ出て來るのである。彼の身分高き友人であるエリバンク卿は、かう道破してゐる——もし貴顯の人士がジョンソンとの會見を求め獲て、しかも彼ともつと會ふことを欲しなかつたとしたらば、それは單なる氣まぐれの好奇心と、非凡なる心性の力に對する憐むべき鑑賞の不足とを示すものである、と。スレール夫人は次の言をなして、さういふ所業を正當にそして機智を以て説明してゐる、——「ジョンソンの會話は卑屈と阿諛とに慣れてゐる人間にとつては甚だしく強きに過ぎた。それは子供の口に芥子であつた——」

或る日、私が彼に、自分は熱心なトリーリー派ではあるが「知的には」十分にさうでないか

ら、その「理論」を御教示願へれば有難いと言つたところ、彼は甚だ率直に之に應じ、そして甚だ明快に説明してくれたので、私は彼に乞うてその言葉を繰り返してもらひ、次のやうに筆記した。――

トリーとホイッグとに就いて

「賢明なトリーと賢明なホイッグは一致する、と余は信ずる。彼等の思考方法は異なるが、その原則は同じである。高踏的なトリーは政治を窺知しがたきものにする、それは雲上に隠れてしまふ。猛烈なるホイッグはそれを非實際的にする、彼は各人に、何人をも支配するに足るだけの権力も無くなるほど多くの自由を許すを可とする。トリーの偏見は固定に與する。ホイッグの偏見は改新に與する。トリーは政府により多くの眞の権力を與へることは欲しない、しかし政府がより多くの尊敬を受けることを欲する。次に彼等は教會に關して相違する。トリーは僧職により多くの法的権力を與へることに與しないが、それが人類の輿論に基づいた、相當の勢力を持たんことを欲する。ホイッグは狭量なる嫉妬心を以つてそれを制限し、監視することに與する。」

六月二日（土曜日）、私はスコットランドに向け出發したが、途中で、時折さうするとはり、ベッドフォードシア州のサウジルに在る、私の尊敬するポールトリー街の書籍商兄弟の兄にあたるデイリー氏の客もてなしの善い屋敷を訪問する約束をしてゐた。今年、デボンス

ン博士がチャールズ・デイリー氏及び私と共に一行に加はり、ルートン・ホーなるビュート卿の屋敷を見に行くことを承知した。彼は馬車の中では、私たちにあまり話しかけず、彼の大いに好んだワトソン博士の『化學論文集』の第二巻と自作の『アビシニアの王子』とを讀むことに主として没頭した。彼は後者を夢中になつて讀んでゐたやうであつたが、彼はそれが最初出版されて以來未だ見てゐないのだと私たちに語つた。私は此の日、それをたまたまポケットから取り出したところ、彼は引つたくるやうにそれを取り上げてしまつたのだ。彼は私に次の注目すべき一節を指さし示した――

一 年 「どういふ譯で（と王子は言つた。）歐洲人はかくも強力なのだらう。或ひは何故に、彼等はかくも容易に、交易又は征服のためにアジアやアフリカを訪れることができるのに、アジア人やアフリカ人は彼等の海岸に侵入し、その港々に植民地を建設し、その土地の王侯に支配を加へることができないのであらう？ 彼等を故國に歸らすその同じ風がわれ／＼をそこに連れて行くであらうに。」
 八 殿下、彼等はわれ／＼より一層力強いのでございます、（とイムラックは答へた。） 彼等は一層賢い故にでございます。人間が他の動物を支配するやうに知識は常に無智の上に勢力を揮ふものでございます。けれども何故に彼等の知識がわれ／＼のそれに優るのかは、至高の存在の窺ひ知るべからざる意志と申す以外にいかなる理由が擧げ得るものか私は存じ居りませぬ。」
 七 彼は言つた、「君、この事は誰でもこの他に説明しやうもないのだ。」

われ／＼はウェルウィンで止まつた。此所で私はジョンソン博士と共に、當時息子のヤング氏によつて所有されてゐた、『夜の想ひ』の作者の住居を見たい氣持を大いに唆られた。此の際、若干の工夫が必要であつた。何故ならば、私はヤング氏とは知り合ひでない。又もし彼の許にわれ／＼が使ひを派することを私がジョンソン博士に提議したとすれば、彼の私の希望を押し止め、又恐らくそれを怒つたであらうから。そこで私はデイリー氏と謀し合はせ、私だけこつそりジョンソン博士と彼とから脱け出し、ヤング氏からのやうな扱ひを受け得るものか、一つ當つて見ることにした。もし不首尾だつたら知らぬ顔で済ませ、もし上首尾だつたら、私が戻つてその事を二人に報告するといふ譯である。私はヤング氏方に急ぎ、彼が在宅なることを知り、一人の紳士が彼の許に伺候したい旨を通じ、彼と彼の息女なる若い婦人の坐つてゐる應接間に請ぜられた。彼は素朴で丁重な田舎紳士のやうに見受けられた。そして、私がお邪魔してまことに申譯ないが、もしお許し願へたらあなたの御屋敷を是非拜見致したいと願ふと、彼は大へん懇懇に應待してから答へた、「是非さうして頂きたい。丁度私たちはお茶を飲まうとしてゐるところです。どうかお坐りくださいませんか？」私は彼に禮を述べたが、ジョンソン博士が私と共にロンドンから来て居り、私は旅館に戻つて彼と共にお茶を飲まなければならぬこと、又、私の名はボズウェルで、彼と共に、ハブリデイズ諸島に旅行したことが有ること、を話した。彼は言つた、「私はジョンソン博士に此所でお目にかかれたら大いに光榮と存じます。博士をお迎へに使を遣ることをお許し願へ

ませうか？」このきつかけに乗じて私は言つた、「私が自分で參つて彼がお茶を飲んでしまつたら連れて來ませう。彼は私がこちらに參つたのを一向知らないのです。」この様に都合好く運んだので私は旅館に急いで取つて返し、ジョンソン博士にかう告げた、「私がたつた今お暇して來た、『夜の想ひ』の作者ヤング博士の息子さんのヤング氏は、父親の住んでゐたその家でお目にかかる光榮を得たいものだとして居ります。」ジョンソン博士は幸ひ、どうしてこの招待が起つたのかの穿鑿をせずに、往くことを承知し、われ／＼がヤング氏の客間に這入ると、彼は非常に丁重にお辭儀をしながら主人にかう話しかけた、「わたしはこちらの御住居を拜見に上がりたものだと思つて居りました。わたしはあなたのお父さんである、あの豪い方をお見知りする光榮をもつたことがあります。」われ／＼は庭に出たが、そこには砂利道が有り、その兩側には各々ヤング博士によつて植ゑられた一列の樹木が有り、それが美しいゴシック式のアーチを形作つてゐた。ジョンソン博士はそれを立派な林であると言つた。私はそれを畏敬の念を以て見た。

われ／＼は暫く四阿で腰を下ろしたが、その外側の壁には *Ambulantes in horto audiebant vocem Dei* (譯者註、庭をそぞろ歩いて神の聲を聞き、の意のラテン語) と記されてあつた。又それが立つてゐる傍らの小流れに關しては *Vivendi recte qui prorogat horam* (譯者註、それは正しき生活の時間を長びかすもの意のラテン語) の小流に記されてあつた。私はヤング氏に、彼の父親は快活であつたと聞いてゐると語つた。彼は言つた、「父は人前で快活に振舞はないには曠が善過ぎました。しかし彼は獨りの

時には陰鬱でした。彼は私の母の亡くなった以後は決して快活ではありませんでした。それにも多くの失望にも出遭ひました。」ジョンソン博士は後になつて私にかり言つた、「これはどうもヤング博士に有利な話ではない。自分が豫期したほどの昇進が獲られなかつたとて陰鬱になり、妻女を失つたために陰鬱な氣持をつづけるほど、攝理のやり方に納得が乏しいといふのは人間にふさはしいことではない。悲しみにも時間的限度があるべきだ。」この非難の最後の部分は理論的になされたものだ。事實問題としては、妻を失つた悲しみは、愛情が眞實であつたに比例して、非常に長い間續くことがあることをわれ／＼は知つてゐる。誰もジョンソン博士以上にこのことを善く知つてゐる者はゐなかつた。

われ／＼は教會の中に入り、ヤング氏が父のために建てた記念碑を見た。ヤング氏は、父がその『普通の感情』のために豫約購讀代金數千磅を受けたが、それを「南洋」(譯者註、十
八世紀の初
め英國で南洋を種にした許偽的の企業計畫で
「南海の池」と呼ばれてゐるものを指すらしい)で失つてしまつたといふ逸話を語つた。ジョンソン博士は自分は豫約出版本を見たことがないからこれは何かの間違ひだらうといふ意見だつた。

路上でわれ／＼は著者や書肆が文學的作品の出版に従事する際の利益の不確實なことについて語つた。ジョンソン、「わしは自分の判断が書物の賣行きについてはどうもあてにならないことを悟つた。」ボズウェル、「先生、あなたはいろ／＼の著者が作品を送つて校閲してくれといふので大いに惱まされませんでしたか？」ジョンソン、「いや。わしは取つ附きの悪い、邪慳な男だと思はれてゐたんだ。」ボズウェル、「それは大へん幸ひでしたね——その

點では。」しかし私は、彼は疑ひもなくこの時はそれを事實だと思つてさう言つたのであらうが、彼ほど屢々、最も下積みの著者からのでさへ、その原稿を讀んでくれといふ依頼に従ひ、或ひは彼ほど惜しげなく助言や訂正で彼等を助けてやつた人間は恐らく他にあらまいといふことを附記しなければならぬ。

デイリー氏方では、何時に變らず結構な御馳走がふんだんにあり、心からの歓迎を受けたので、彼は非常に幸福であつた。

一七〇八年 六月三日(日曜日)、われ／＼は皆で、デイリー氏の家の極く近くにあるサウジル教會に赴いた。此の日は月の最初の日曜日だつたので聖餐式が行はれ、私はそれに與るため後まで残つた。後刻私がジョンソン博士の部屋に這入ると彼は言つた、「君が残つて聖餐を受けたのは善い事をしたね。わしはさうしようと思はなかつた。」この言葉は、自分は前以て準備なくしては聖壇に近づくの欲しないといふことを意味するらしかつた。このことについては善い人々の間にも意見の相違があつて、或る人々は相當の心の準備なくしてこの聖餐に與るのは敬虔を缺くと主張し、他の人々は、誰でも誠實な基督教徒であり、又われ等の宗旨の如何なる他の儀式的義務でも果すのに適當な心的状態に在る者ならば、躊躇なくこの最も嚴肅なるお勤めをも果して差支へないと主張する。私は中間の觀念が當を得たものであると信ずる。即ち、聖餐に與る者は、準備的諸形式の長々しい一聯を絶対に必要であると考へるを要しないが、さりとて、彼はかくも長く神祕的なる聖餐の制度に輕忽に参加を敢てすべき

ではない。基督信徒は、それぞれの場合にどの程度の閉居と自己吟味とが必要であるかを各自自ら判断しなければならぬ。

麗しい天氣に——友人の田舎の屋敷で——敬虔なる宗教的行事に慰めと心の高揚を覚えて多くの人が経験する（私は人間性の幸福のためにさうあることを望むのであるが）心的状態に在つたので、私は私の「指導者、哲人、友人」に向かつて拘束を忘れた熱烈さを以つて心のうちを披瀝した、「先生、私は善い人になりたいのです。そして今、私は大へん善い人間です。私は神を恐れます、國王を敬ひます、私はいかなる悪をも欲しません、そしてすべての人類に恵み深くあらうと欲します。」彼は好意ある寛容さを以て私を見たが、この際私に賢明で健全なる注意を與へた、「君、君は感銘に頼る癖をつけてはいけません。感銘に頼ることによつて人は次第にそれに屈從するやうになるかも知れない。そして遂にはそれに隸するやうになつて、そのため自由なる行爲者でなくなつたり、又、結果に於いてそれと同じ事であるところの、自分が自由なる行爲者でないと想像するやうになることがある。さういふ状態に在る人間は生活するを許さるべきでない。もし彼が自分は特定の遣り方で行動するを禁ずることができないと宣言し、そして抵抗しがたく衝動されるとすれば、彼に信用を置くことが不可能なることは、虎を信用できないと同様となる。しかし君、何びとも自分が抵抗しがたく衝動されるとは信じないのだ。われ／＼は、それを信じると言ふ人間は嘘を吐いてゐるのだといふことを知つてゐる。われ／＼の魂の状態に關しての、特定の瞬間に於け

る有利な感銘は、われ等を欺き、そして危険なるものであるかも知れない。一般に何びとも自分が神に受け容れられたといふことを確信することはできない。なるほど、若干の人はそれを自らに啓示されたかも知れない。奇蹟を行つた聖ポーロは、彼自身の上に奇蹟を加へられたかも知れず、そして赦しと慈悲と至高の幸福との超自然的の保證を獲たかも知れない。しかしながら、聖ポーロは、強い希望を言明してゐるが、同時に、他人に説教して置きながら、自分自身は見棄てられたる者になりはしないかといふ恐れを表明してゐる。」

.....

一七八一年 大概の場合、デボンソン博士ほど富の有利さについて強く支持した者を私は未だ聞いたことがないのであるが、彼は今日はどういふ風の吹き廻しか、反對の立場をとつた。彼は言つた、「わしは莫大なる財産を擁する人々が幸福に寄與する何か特別なるものを享受するのを見たことがない。ベッドフォード公爵は何をもつてゐるか？ デヴォンシア公爵は何をもつてゐるか？ わしが曾つて聞いた富の享受のたつた一つの大きな實例はジャマイカ・ドーキンスのそれで、彼はバルミラを訪れようとしたところ、その途上に盜賊が跳梁すると聞いて、自分を衛るために一隊のトルコの騎馬兵を雇つたのである。」

非國教派牧師のギボンズ博士の話が出ると彼は言つた、「わしはギボンズ博士が好きになつた。」そしてチャールズ・デイリー氏に向かつてから附け加へた、「わしは彼に會ひたいと思ふ。もし彼がわしを訪れて、何時かお茶を啜りながら午後をくつろいで過ごしてくれらな

らばわしは有難いと思ふと彼に言傳してくれたまへ。」

彼はわれ／＼に、自分は一日にフランス語からの翻譯を六枚書いたことがあると話し、かう附言した、「わしはそれを今見たいと思ふ。わしはわしに反對して書かれたすべてのパンフレットの寫しをもつてゐたらいいと思ふ。——ポーブはさうしたさうだが。もしわしが世の中でそんなに物議をかもすといふことが判つてゐたら、わしはさういふものを蒐集する勞をとつたことだらう。新聞紙上でわしについて何とか書いてない日は殆ど一日も無いと思ふね。」

六月四日（月曜日）、われ／＼は皆でビュート卿の素晴らしい屋敷を觀にルートン・ホーへ往つた。切符は私が前以て手に入れてあつたのである。園内に這入つた時、私は得意氣に私の昔からのマウントスチュアート卿（譯者註、ビュート卿の息子）との交友について語り、「多分私は此所で大いにもてるでせう。」と言つた。人事の定め無さを悟つた「賢人」ジョンソンは「あんまりそれをあてにしたまふな。」と穩かに私をたしなめた。彼は二つ三つ變つた言葉を吐いた。即ち、植物園に案内された時、「すべての庭園は植物園でないかね？」と言つたのはその一つである。又そこには數哩に及ぶ灌木の植込みがあると聞いて、「それは随分智慧の無い土地の使ひ方だ。さういふものは少しあれば結構だ。」皆で遊園を歩かうといふ提議がなされる時、曰く、「身體を勞れさすのは止さうよ。何故そこを歩かなければならないのか？」

此所に立派な樹が有る、一つこのてつべんまで登つて見よう。」とは言へ、大體に於て彼は大いに満足した。彼は言つた、「これはわしが見物に來たことを後悔しない場所の一つだ。實際堂々たる所だ。家の内では壯麗が便利の犠牲にもなつてゐないし、便利が壯麗の犠牲にもなつてゐない。圖書室は素晴らしいものだ。部屋々々の品格も大へん高い。繪の量も豫期を超えて居り、希望をも超えてゐる。」

別に前以て計らつた譯ではないが、われ／＼はたま／＼國王の誕生日にビュート卿の屋敷を訪れたのであつた。われ／＼はルートンの村の一旅館で正餐をとり陛下の御健康のために祝盃を擧げた。

夜、私は彼に、彼の有名なチェスターフィールド伯爵に與ふる手紙の寫しを私に授けてくれるといふ約束を彼に想ひ出させた。やつと彼は此の熱心なる要望に應諾してくれ、自分の記憶からそれを私に書取らしめたのである。彼自身はその寫しを持つてゐないと考へてゐたからである。彼がかかりして彼の高邁なる怒りを想ひ起こした時その顔面には活き／＼した輝きが認められた。

六月五日（火曜日）、ジョンソンはロンドンに歸ることになつた。朝餐の時彼は大いに愉快であつた。私は或る友人が決して美しい女を娶らない決心をした話をした。ジョンソン、「美しい女を娶らないと決心するのは非常に馬鹿げた決心だ。美そのものは非常に價値があ

の『詩人傳』を一と揃へお贈りしよう。」彼はこの約束を果した。そしてパーニー博士はその友人を燦爛の簪の切れ端しよりはもつと貰ひ甲斐のある贈り物で喜ばすことができたばかりでなく、その後間もなく彼をポルト・コートでジョンソン博士その人に引き合すことができた。ビューレー氏はかくてこれと相當時間談話する満足を得たのであるが、それは氏の死ぬ二週間と前ではなかつた。彼は、聖マーティン街で偉大なるサー・アイザック・ニュートンが生活し死去したその家で、パーニー博士を訪問中死んだのだ。」

彼の小さな備忘録の一つに次のやうな覚え書がある——

「八月九日、午後三時、年齢七十二歳、ストレッタムの別荘にて。

何回となく決心をしそれを反古にした擧句、自分は何もつと勤勉な生活を設計すべく此所に引き籠つた。自分が猶有用であり、わが造り主わが裁き主の前にあらはれるに日一日とより善く準備できてゐらんことを希望して。而してその神の無限の慈悲から自分は逃つて加護をこひねがふのである。

余の目的は左の通りである——

毎日八時間を何か眞剣なる仕事に過ごすこと。

祈つた後、余は余の確定した研究として、次の六週間をイタリー語に用ひることにした。『かういふ孤獨の瞬間に於ていかに彼が尊くも敬虔に見えることよ。そして人生の高齡の時期に於て、そして多くの病患に悩まされてゐる際に、雅文學に於てさへ自己の心情を向上し

ようといふ彼の決心はいかに軒昂たるものであることよ。

秋には彼はオックスフォードとパーミンガムとリッチフィールドとアッシュユブアンに赴いた。自分たちが做すすべての事柄について解釋を下すことを誇りとする著作家たちの、推測的でしかも斷定的なやり方に従へば、この行について非常に尤もな理由が持ち出されるかも知れない。しかし彼自身はかう言つてゐる、「余の旅行の動機を余は殆ど自ら知らない。余は去年それをせよにしまつた、そして又もそれを逸することを欲しないのである。」*

『新稿と瞑想』第二〇二頁

一七八一 年
しかし若干の尤もな考慮は思ひ浮ぶので、その中にはパーミンガムの外科醫師ヘクター氏の戀ろな想ひ出がある。「ヘクターは又古い友人であり、余と共に學校時代を過ごした唯一の幼な友達である。二人は常に相愛した。恐らくわれ／＼は何か眞剣な談話によつて裨益されるかも知れない。しかし、それに就いて余は確たる希望はもつてゐない。」彼は又言つてゐる、「わが故郷のリッチフィールドに於て、余は公けの禮拜に頻繁に出席することによつて善き模範を示すことを望んでゐる。」

この年のその後には於ける彼と私の交通はどういふ譯であつたか甚だ乏しく、又すべて私の側からしたもののみであつた。私はケースネス州選出の議員シンクレア氏（今のサー・ジョン）を彼に紹介する一つの手紙を書き、又他の手紙では、私の家内が再び病氣の恐ろしい徴候に襲はれたことを彼に告げた。

千七百八十二年、年齡七十三歳、——千九百八十二年には彼の疾患は増大し、此の年の彼の生活の歴史はその病氣の一進一退の悲しむべき記事以上に多く出でないものであるが、そのただ中に於いても彼の心の諸能力は些かも損はれなかつたことはその醫簡から窺へるであらう。

「デュームス・ボズウェル様

拜啓。小生は貴君の御手紙を受け取つたその日にそれに御返書すべく坐りこみます。そして今年の最初の手紙が貴君に宛てたものであることを嬉しく思ひます。何びとも自己が過つてゐたことを自覺したならば平然たるべきではありません。小生も小生の長い御無沙汰を善い事とは思つて居りませんでした。但し、シンクレア氏に關する御手紙は遂に配達されなかつたと信じます。

過ぎた一年間小生の健康はよろめきがちのものでした。そして小生は自分の時間のあまり自慢になるやうな用ひぶりを語るわけには参りません。小生は常に自分が従前爲し來つたより將來に於いて、より善く爲さんと希望しつつあるものです。

アッシュブアン及びスタッフオドシア州への旅行は愉快ではありませんでした。もとく病人が病人を訪問して何の楽しみがありません。——われ／＼はあのヘブリーズ諸島旅行のやうな愉快をも一度味ふことができませうか？

親愛なるボズウェル夫人がその病患を乗超えられることを希望致します。彼女を失へば貴

君は貴君の錨を失はれることになり、安定無く人生の波に漂はされることになるでせう。小生は彼女及び貴君の御兩所が幾久しく幸福なる年を重ねられんことを祈念します。この數箇月間小生は世間から甚だ隔絶してゐましたので貴君に何も特別のことをお傳へすることができません。しかし貴君の友人等はすべて健在で貴君がロンドンに歸來されることを喜ぶでせう。 敬具。

千七百八十二年一月五日 サム・デュームスン

この言の眞實であつたことは悲しむべき経験によつて實證された。「ボズウェル夫人は千七百八十九年六月四日に死んだ。——マロンの註。」

御筆に堪へる力が以前よりも衰へた時期に於て、彼は突然レヴェット氏を奪ひとられた。この事件を彼はロレンス博士に宛てこのやうに報知してゐる——

「拜啓。われ／＼の古い友なるレヴェット氏は昨夜は頗る上機嫌であつたが今朝死去してしまひました。同じ部屋に寝てゐた男が、常ならぬ物音を聞いたので、起き上がり、彼に言葉を發せしめようと試みましたがその甲斐がありませんでした。そこで彼は藥劑師ホールダ氏を呼びました。氏が來て見ると病人は死んでゐると思はれましたが、靜脈を切り開いたところ、血を引き出すことができませんでした。かくして、一人の大へん有用で大へん缺點の妙い人の長い一生が終はりました。 敬具。

千七百八十二年一月十七日 サム・デュームスン